

# アジアの人々の協働から学ぶ

XXXI



第31回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2017

桃山学院大学



START ▶▶

開空からバリへ出発～



横内どお屋ごはん



毛布を巻く～



インドネシア到着～



ティアナプラ大学の学生と合流!!



プリボンサリ村へ  
出発～



午の間のバスに乗りかえり到着～



子供たちと一緒に  
バスに乗りかえり



ローワ!! 壁のワリ、おなごのワリ、おなごのワリ!!



日本食



交流会



ソラン節

運動会 ~!!



Soccer Ⓞ



Basketball Ⓞ



おはなとマユティム  
100人JRMとゆいゆい



高村武 TT



お世話になったバビロイガ  
に感謝のお手紙

エグゼクティブ  
&  
メンバー



お世話になった  
メンバー

観光 ~♡



サブタイトルは...!!



いよいよ帰国...



帰空に到着 ~





Akana Miss Emily Palma Vanita Aid

71-920799

LOVE

311020799

189402

THANK YOU

中環

時時歡聚

HAPPY

311020799

311020799



IWC31st テーマ

# 「歩き続ける」

歩き続ける = terus berjalan

IWCは今年で31回目を迎えました。

このプログラムはこれまでに長い歴史があり、  
「これからもずっとIWCが続きますように。」という

思いを込めてこのテーマをつけました。

30期生の人たちの悔しさも胸に、  
私たちはインドネシアに向かいました。

# 目 次

第31回 IWCテーマ『歩き続ける』	1
スケジュール	4
第31回 メンバー紹介	
フリーエピソード	13
人物紹介	26
事前研修	27
アスラマの環境について	28
アスラマの紹介	29
アスラマの子どもたちとの遊び	30
アスラマの子どもたちへのインタビュー	31
子どもたちのポジティブさ	34
ムラヤでのワーク・プリンピンサリでの農作業	35
交流会	36
日本語プログラム	39
日本食プログラム	41
アスラマの生活（バリで驚いたこと・困ったこと）	42
来年へのアドバイス	45
ランキング・インドネシア	46
エヴァリュエーション	48
インドネシア語 セレクト集	54
参加学生のレポート	
【桃山学院大学学生】	
「国際ボランティアでの体験」	馮    ブンテイ ..... 56
「国際交流を通して」	小    谷    明    香 ..... 58
「インドネシアの文化および生活について」	千    賀        敦 ..... 61
「IWCでの経験」	西    脇        良 ..... 63
「インドネシアでの経験」	川    添    晴    人 ..... 66
「人の心にある幸せ」	寺    崎    敦    也 ..... 68
「私が感じたインドネシア」	西    口    塔    子 ..... 71
「インドネシアの文化および生活について」	青    野    壮    助 ..... 74
「インドネシアに行ってみて」	池    永    一    樹 ..... 76



「ワークキャンプを通しての経験と気づき」	國 枝 みずほ	78
「インドネシアで体験したこと」	隊長 河 関 慶士郎	81
「国際交流について」	樋 口 さくら	84
「インドネシアの文化および生活について」	副隊長 平 野 順 也	86
「インドネシアで感じたこと」	小 椋 良平太	89
「私がインドネシアで感じたこと」	林 雅 貴	91
「インドネシアに行って感じたこと」	松 村 彰 大	93
「異文化」	森 千 芳	96

#### 【インドネシア学生】

I Made Aris Ananta S. (Leader)	99
Ni Putu Yunita Nara Putri	101
I Nyoman Agus Aristya Palma D.	105
Putu Emi Hermayanthi	109
A.A. Kompiang Adiada	113
Ni Made Adi Pratiningsih	116

#### 引率者レポート

「IWC31をふりかえって」	第31回国際ワークキャンプ団長	チャブレン 宮 嶋 真	120
「異文化理解と自己理解」	社会学部	大 野 哲 也	123
「Fostering Intercultural Communication through Co-operative Work and Shared Experiences」	International Studies and Liberal Arts	エイドリアン・ワーグナー	125
「国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って」	学長室学部事務室	朝 倉 康 仁	127

## スケジュール

2017年度 第31回 国際ワークキャンプ（インドネシア）日程表

日付・曜日	時間	スケジュール
8/21 (月)	8:30	関西国際空港出発ロビーに集合
	8:30	点呼
	9:00	搭乗手続き
	11:00	GA883便にて出発 (所要時間6:45 時差-1時間)
	16:45	デンパサル空港到着
	17:05	入国手続き
	18:00	ホテルチェックイン
	19:00	夕食、インドネシア学生と 合同オリエンテーション
	22:00	就寝



初めまして！  
少し緊張…！

日付・曜日	時間	スケジュール
8/22 (火)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	日本・インドネシア学生 ホテルでミーティング
	9:00	一部引率スタッフ日本国総領事館へ
	11:30	昼食（ホテル）
	12:30	ブリンピンサリ村へ出発
	17:00	ホームステイ先へ
	18:00	夕食



ホストファミリー  
どんな方かな？



ブリンピンサリ村へGO☆彡

日付・曜日	時間	スケジュール
8/23 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ムラヤのアスラマへ
	9:00	入村式・ワーク開会式
	12:00	ブリンピンサリへ帰る
	12:30	昼食
	13:30	ミーティング、アスラマスタッフによるツアー等
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



入村式！  
初めてのガムラン！



ワーク頑張るぞ！

日付・曜日	時間	スケジュール
8/24 (木)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	出発：ムラヤ公立高校訪問
	12:00	昼食・休憩・着替え
	13:30	ワーク
	16:30	ブリンピンサリへ帰る
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



高校にて日本語授業！



一日のふりかえり…

日付・曜日	時間	スケジュール
8/25 (金)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ムラヤのアスラマへ
	8:30	ワーク
	12:00	ブリンピンサリへ帰る
	12:30	昼食・休憩
	13:30	交流会の練習
	18:00	夕食
	19:00	交流会 学生と子どもたち
	21:30	帰宅、就寝



歌上手！  
かわいい♡



ブロック運び  
重たい…！

日付・曜日	時間	スケジュール
8/26 (土)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	小・中学校訪問
	12:00	昼食・休憩
	13:00	日本食準備
	17:00	日本食パーティー
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



あでい・ちがちんさん  
人気者!!



豚汁おいしくなあれ♪

日付・曜日	時間	スケジュール
8/27 (日)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:00	教会で礼拝
	12:00	昼食 昼食ミーティング等
	13:00	ホストファミリーとの交流・自由
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝



君は愛されるため  
生まれた～月



教会の前で ☺

日付・曜日	時間	スケジュール
8/28 (月)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:00	施設見学
	10:00	ふりかえり
	12:30	昼食・昼休み
	15:00	ワーク (ムラヤにて)
	16:30	プリンピンサリへ帰る
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝



朝のウォーミングアップ!!



個人のふりかえり

日付・曜日	時間	スケジュール
8/29 (火)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食・個人ボランティア
	8:30	エヴァリエーション ミーティング
	12:30	昼食
	14:30	ワーク (ムラヤにて)
	16:30	プリンピンサリへ帰る
	18:00	夕食
	19:00	エヴァリエーション ミーティング
	20:30	帰宅、就寝



一人一文字ずつ  
書きました～



みんなの意見を  
まとめてくれている様子

日付・曜日	時間	スケジュール
8/30 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食・個人ボランティア
	8:30	エヴァリエーション ミーティング
	12:00	昼食・昼休み
	15:00	ワーク (ムラヤでのワーク終了)
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング
	20:30	帰宅・就寝



なが～～い  
バケツリレー!!



バリダンス～♪

日付・曜日	時間	スケジュール
8/31 (木)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	看護学校訪問出発
	8:30	日本語プロジェクト
	12:30	昼食
	15:30	プリンピンサリでの農作業
	18:00	夕食
	19:00	運動会準備
	20:30	帰宅、就寝



看護学校で授業



アスラマでワーク  
初の畑起し。疲れた～

日付・曜日	時間	スケジュール
9/1 (金)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	運動会
	11:00	エヴァリエーション ミーティング
	12:30	昼食
	15:30	エヴァリエーション ミーティング
	18:00	夕食
	19:00	ミーティング等
	20:30	帰宅、就寝



みんなでマイムマイム♪



いきなり  
ダンス大会、(^o^)/

日付・曜日	時間	スケジュール
9/2 (土)	6:00	ヤシの砂糖作り 見学
	7:15	朝食
	9:00	フリータイム
	12:30	昼食・昼休み
	13:00	エヴァリュエーション ミーティング
	18:00	夕食
	19:00	離村式の手紙 練習
	20:00	帰宅、就寝



目の前でヤシの実の蜜をとっているのを見学Σ(°□°)



インドネシア語の発音難しい。。

日付・曜日	時間	スケジュール
9/3 (日)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:00	教会で礼拝
	12:30	昼食、昼休み
	15:00	離村準備（荷物整理等）
	18:00	離村式
	20:00	帰宅、就寝



先週とは違う場所で礼拝



離村式でお世話になった家族にインドネシア語でお礼の言葉



子どもたちとのお別れが寂しい・・・



日付・曜日	時間	スケジュール
9/4 (月)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	9:30	プリンピンサリ出発
	13:00	第4アスラマ到着、昼食・交流会
	15:30	ホテルへ
	18:00	夕食
	19:00	エヴァリュエーション発表練習
	22:00	就寝



第4アスラマで交流会  
日本の歌が上手でびっくり…!!!



エヴァリュエーション  
発表練習英語に苦戦…



住んでいる日本人  
意外と多い!?!?



ディアナプラ大学で✌

日付・曜日	時間	スケジュール
9/5 (火)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ディアナプラ大学訪問出発
	9:30	バリ・プロテスタント教会本部へ移動
	10:00	エヴァリュエーション
	11:00	アガペーフエスティバル
	12:00	昼食
	13:00	バリ日本人会・補習校訪問
	15:30	ヌサドゥアの五大宗教施設見学
	17:30	マタハリショッピングモールへ
	18:30	マタハリショッピングモールで 食事・買い物
	20:00	ホテルへ出発
	21:00	ホテル到着
	22:00	就寝

日付・曜日	時間	スケジュール
9/6 (水)	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ホテルチェックアウト
	9:00	バロンダンス（聖獣のダンス）
	12:00	キンタマーニ（昼食）
	14:00	タンバクシリン（ヒンドゥー教寺院）
	15:00	ゴアガジャ（ヒンドゥー教寺院）
	16:00	銀細工のお店
	17:00	土産店で買い物
	18:00	ホテルで夕食
	20:00	ディアナブラの学生と最後の交流
	22:00	空港
	0:30	出発

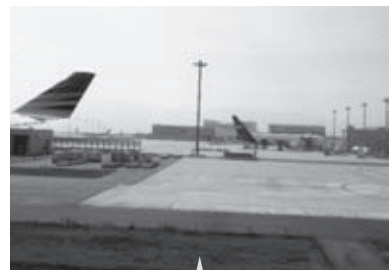


最後の集合写真



17日間ありがとう  
ございました。

日付・曜日	時間	スケジュール
9/7 (木)	0:45	GA882便にて出発 (所要時間7:00、時差+1時間)
	8:50	関西国際空港到着
	9:25	帰国手続き
	10:00	解散



関空到着～✈



和泉中央で  
たまたま再会!!

## フリーエピソード

社会学部 4回生 馮 ブンテイ

今回IWC31に参加してくれたインドネシアの学生さんたちはとても優しくしてくれたり、わからないことも教えてくれたりしました。生活面でも助けてくれました。プリンビンサリ村ではホームステイです。言葉が通じない1人のインドネシア学生と一緒に泊まりました。初めて違う国の人と一緒に生活するのが面白くて、楽しかったです。インドネシア学生の「ユニタ」と一緒にホームステイ先になりました。

プリンビンサリ村の夜の街はけっこう暗くて、道が狭いです。犬を飼っている家庭が多くて、夜に人が道を歩いたら、犬に吠えられることが多いです。1日が終るのは、だいたい8時くらいです。プリンビンサリ村はけっこう静かで、その時間に道を歩いたら、犬はワンワンって吠えました。ユニタは毎回懐中電灯を持って、明るくしてくれました。怖い犬も避けてくれました。

日本に戻る前にユニタからプレゼントをもらいました。嬉しかったです。

ホームステイ先の人たちも優しくかったです。泊まっている間に、イブはインドネシアの伝統的なお菓子をくれたり、服を干してくれたりしました。家を出る前や、帰ってからも、イブはいつも笑顔でしゃべってくれました。



国際教養学部 4回生 小谷 明香



私が一番心に残っているエピソードは、同室だったアディと打ち解けられた事です。アディはディアナプラ大学の学生で何事も一生懸命で純粋な女の子です。始めアディと同室だと知った時はコミュニケーションの取り方、文化の違いなど正直戸惑いや不安がありました。英語も辿々しい私は話しかけても話しかけられてもすぐに会話が終わってしまい、だんだん会話が減ってきた時期もありました。しかし私がある日お腹を下していた時、アディはずっと私に声をかけてくれました。夜中悪化した時のために先生にも掛け合ってくれ、すごく気遣ってくれました。私はその優しさに本当に感激しました。それから私達は毎晩知っている単語やジェスチャーを使って一生懸命会話しました。するとそのジェスチャーが面白くて笑ったりアディに日本語を教えたり、逆に私がインドネシア語を覚えてもらったり、家族のことや友達のこと、自分の国の文化や場所、また将来のことたくさん話を話しました。本当に新鮮で夜にアディと話す時間が毎日の楽しみになっていました。私がアディと同室になって感じた事は本当にインドネシア人は心優しいことです。誰にでもフレンドリーで始めて会った人でも昔からの友達みたいに接することが出来ます。日本人が見習わなければいけないところだなと感じました。

IWC活動中、日本人学生で意見が食い違う場面が何度もありました。それに対してインドネシ

ア学生同士で揉めている姿を見たことがありませんでした。私はアディにどうやって問題を解決しているのか相談しました。するとアディから意外な答えが返ってきました。私達は日本人学生が羨ましい、みんなでああやって本音をぶつけあえるのは素敵なことですよとってくれました。そのアディの言葉を聞いてたくさん意見を言い合って最高の活動にしようとする前向きな気持ちになる事が出来ました。アディには本当に感謝しています。最後私達がお別れの時にアディに手紙を書きました。今までの感謝と必ずまた会おうと添えました。アディからはかんざしをプレゼントしてもらいました。日本に戻ってからよく「あすか元気？」と連絡をくれます。アディは来年日本に来る為に一生懸命勉強しています。そんなアディを見ると私も頑張ろうと本当に刺激を貰える存在です。アディと出会えたことは私にとってかけがえのない思い出と宝物です。来年アディが日本に来てくれることを本当に楽しみにしています。

#### 〈ホームステイ先のエピソード〉

印象に残った事は、ホームステイ先の家族の親切さです。

毎日部屋に入ると綺麗にベッドメイキングされた状態で、洗濯物もいつも日の当たる場所に移動して干し直してくれており、本当に毎日快適に生活させて頂きました。

日本から来た私達を暖かく受け入れてくれ、言葉も通じないのにいつも笑顔で名前を呼んでくれました。最後お別れの時はギュッと抱きしめられて、言葉は分からなかったけど、何か一生懸命私達に伝えようとしてくれていました。

本当に心優しくて、暖かい家族で、離れるのがすごく寂しかったです。

初めてのホームステイ経験でしたが、もっと色々な国でホームステイをしたいと思うようになりました。

インドネシアでの生活は毎朝6時起きだった。日本にいた時よりも自分は2時間早く起きていた。なぜそんなにも早起きかと言うと、現地の大人・子どもたちはとても早起きだからだ。だから必然的に自分達も早く起きなければならない。ビックリするのがアスラマの子どもたちは早朝の5時台に学校へ向けて出発するのである。となると起きるのは遅くて5時前だろう。早い。とてつもなく早すぎる。自分は何か遠出などしない限りそんな早起きはしない。だが、現地の子どもたちはそんな早朝の中でも目もこすらず、何事も無いかのように学校へ向かう支度をする。驚きである。

そんなとても早寝早起きのバリの文化を理解するためには私達も早寝早起きをし現地の文化に従うことである。「郷に入っては郷に従え」これが異文化理解を深める大事な要因だと私は思う。そんな規則正しい生活リズムを18日間していたらとても早寝早起きになった。早い時は夜8時半に寝てしまうほどだ。これは自分の祖母並みに早い。だが、そんなに早く寝ても寝足りないぐらい一日やることはたくさんで体を動かすことが多い。実に健康的である。

最初の数日間は現地の人たちが早起きすぎて正直ビビっていた。この生活リズム、慣れるのに時間かかりそうだと感じていた。だがある日、私はホームステイメンバー4人の中で1番早く起きた。だいたい5時半ぐらいだった。インドネシアの9月の朝は日本の9月の朝に比べてとても暗い。夜が長いのだ。いつもは4人の中で1番起きるのが早いホームステイメンバーのアリスはまだ寝ていた。とても気持ち良さそうな寝顔をしてスヤスヤ寝ていた。起こすのが申し訳ないぐらいだ。「まだ5時半だからいいっか。」と思い私は夜が明ける前にコーヒーを飲み、バナナを食べた。

インドネシアワークキャンプでは日中、ワークや日本語プログラムなどをしていて充実した毎日を送っていた。しかし、自分は現地で過ごす夜、早朝も充実した時間だと感じた。インドネシアの夜は星が綺麗で朝は昼間みたいに暑くなく、とて

も涼しい。

私はインドネシアの夜と早朝の時間がとても大好きだ。

最後にこの写真は早朝、ホームステイメンバーでアスラマに向かう時に撮った写真である。



### 経済学部 3回生 西脇 良

私はこのワークキャンプに参加して、日本とは違う暮らしや文化・言語を学び、普段体験できない事を体験し、とても充実した有意義な時間を過ごせました。アスラマの子ども達はとても元気で明るく、私たちと一緒にいると常に笑っていました。一緒に遊んだり話したりするのがとても楽しい時間でした。

日本語プログラムでは、最初は授業が上手くいくか心配でした。少し失敗した部分もありましたが、私たちが用意したゲームや授業を楽しんでくれて、なんとか無事に全ての日本語プログラムを終える事ができました。日本人とは違って、バリの生徒たちは好奇心満載でとても元気でした。元気過ぎて正直疲れる部分もありました。普段日本語を教えるという事はないので、とてもいい経験になりました。

ワークでは、私たちとアスラマの子どもたちがみんなで協力してワークを進めました。暑い中のワークでしんどいだろうなと思っていましたが、子どもたちと一緒にやっていると、しんどいとかの気持ちではなく、楽しいという気持ちにな

りました。子どもたちは私よりも元気いっぱいワークをしていて、私はすごいなーと思っていました。子どもたちは楽しそうにワークをしていて、それを見ていると私も元気が出てきて、疲れなども飛びました。みんなが楽しくワークをしていたため、時間が過ぎるのもあっという間で、作業を終えました。

ワークをキャンプを終えてから、私の考え方は変わりました。アスラマの子どもたちのためにもっと何かをしてあげたいし、また子どもたちに会いに行きたいとも思いました。私にとって今回のワークキャンプは人生でかけがえのない体験になりました。

### 〈ホームステイ先のエピソード〉

毎日、家を出るときと帰って来るときに笑顔であいさつしてくれました。また、ときどきコーヒーやお菓子を出してくれました。





18日間のほとんどはプリンピンサリ村で過ごしていたのでプリンピンサリ村について書いていきたいと思います。

振り返ると18日間全体はとても長く感じましたが、1日1日の時間は本当に短かったです。朝は6時にルームメイトのシャワーの音で目覚めて、前日に用意していた服を着て、ワークで必要なものを鞆に詰める。6時35分に家を出て、上り下りが多い道のを15分かけてアスラマにたどり着く。朝の集い（体操とお祈り）が終わればバイキング形式のおいしい朝食を食べる。毎朝これの繰り返し。朝が早く毎朝が気だるかったが、ご飯を食べ終わるころには、今日も1日頑張ろうという気持ちになっていた。

朝の活動は毎日違った生活でした。日本語の授業や運動会、日曜日には教会へ礼拝に行ったりして毎日が楽しかった。お昼の自由時間はとことん寝た。昼からのワークは毎日あるが毎日違った作業で飽きなかった。かなり壁づくりに貢献し、楽しんだと思う。休憩時間に配られたミニッツメイドオレンジはとても甘くておいしかった。

夕食ごろになるとアスラマへ戻り夕食を済ませミーティングがある。ミーティングでは日本語授業や運動会のことなどこれからの行事の作戦会議をした。1日が終わるころはとても疲れてものすごい睡魔に襲われた。

毎日がそんな感じで長いようで短い、短いようで長いインドネシアの生活でした。

〈ホームステイ先のエピソード〉

毎朝家を出るときは笑顔で見送ってくれて、夜帰ると既にホームステイ家族は眠っている日もあったが、たいてい外で家事をしていて、こちらに気づくと「今日なにがあったの?」と声をかけてくれる。とにかく笑顔が素敵で疲れが吹っ飛んだ。

辛かったのは、毎日の片道徒歩15分の道のりだ。坂を上り下りしてようやくアスラマに辿り着く。お昼の自由時間は暑すぎて家に帰る気が起こらなかった。



このインドネシアでの生活の中で最も印象に残っていることは「日曜礼拝」です。なぜかという、一番日本との文化の差を感じることができたからです。日本人が休日に祈るという習慣はありません。休日は買い物をしたり、どこかに出掛けたりして幸せを感じています。私は祈るとは何なのかさえ分かりません。神様お願いとは、言うが深い意味ではないし、信じていません。しかし、彼らは朝から礼拝に行き、本気で健康であることを祈っています。そこで大きな宗教の信仰心の違いを学びました。日本にも宗教は存在するが生活には影響はない。インドネシアでは、すべてに関係し何よりも優先している。祈るとは自分自身を知ることであり、心の中で思っていることが本当の自分を映し出す鏡のようなものになると分かりました。そこで自分でも考えていない自分に

出会い、崇める存在に頼ることで精神的な面を安定させ穏やかにさせることができるもの、それが宗教であると実感しました。このような体験を通して私は幸せの価値観について考えました。私たち日本人は、発展した社会の中で何をすることも不自由のない生活を送って満足しています。この日に旅行の予定があるから、毎日を頑張ろうというモチベーションになったりして日々を過ごすことが多いのが日本人の特徴で、なにか自分にとって楽しいことをするという目的意識が常にあります。それに対して、こちらの人たちは毎日朝起きて手洗いで洗濯をして、ご飯の支度をしたり当たり前の家事をするだけで1日がおわります。それに不満すら感じていないことで、彼らの心の豊かさに感銘を受けました。私たちは進化しすぎたせいで、毎日なにかの不安や不信感を抱いていて、時間の概念もくっきりと存在している社会のため圧力による窮屈な感情さえも生まれるため常に新しい悩みを抱え込んでいます。そんな私たちが本当に幸せなんだろうか。彼らのように毎日を笑顔で笑って過ごせることが精神的な豊かさを持った正しい人の生き方じゃないだろうかと思いました。なにもなくなつて、人は生きていける、そして毎日は自然と過ぎていく。この旅で私は出会った人たちみんなから「生きる力」を学びました。幸せは人の心にあつて、環境や便利なものがあるからだとかではなく、自分に正直に向き合つて、苦しまないように生きることかなと思いました。



私自身、生まれて初めて児童養護施設を訪れた。そしてその児童養護施設、アスラマで様々な境遇にある子ども達と出会った。その一つ一つが私にとっては素晴らしい、一生忘れることのない大切な宝物になるだろう。

まず私が大変驚いた事は、子ども達は親と離れて暮らさないといけない状況にも関わらず、笑顔を絶やす事なく元気に生活している事である。住んでいる場所はあまり良い環境ではない中で、日々を力強く過ごしている彼らの姿が目には焼き付いたのだ。

普段は家族に会えない子どもたちだが、ある男の子の家族がアスラマにやって来ていた。父、母、祖母の3人であった。彼自身、家族に会えたことが嬉しそうであった。私はそれまでアスラマに預けられている子ども達は捨て子であると勝手に勘違いをしていた。しかし、実際に会うとそうではなかった。話を聞くと普段、彼の父親は出稼ぎをしているらしい。そして家族を養う為に出稼ぎをして、彼をアスラマに預けている様であった。漁師の仕事をするために日本にも出稼ぎに来たことがあると言っていた。私はそれを聞いた時、何か居た堪れない気持ちになった。なぜなら家族と離れる事は大変辛い事だが、それをどうにも出来ない彼ら自身を目の当たりにしたからだ。私自身も手伝える事がないか考えたが彼らの話を必死に聞く事しかできなかった。でも、彼らの表情は穏やかで、ゆっくり語り、男の子自身も仕方ないという表情で家族との時間を楽しんでいるようにも思えた。私はその時彼らの力強さを見出だしていた。どんな過酷な状況にあつても笑顔でいる彼らに感銘を受けた。

私も彼らと共に遊んだり話したりする事で彼らから沢山の元気もらった。彼らはあまり裕福ではなかったが、心の豊かさは、恵まれた環境で育っている私達以上に豊かであった。そして私自身、この様な施設がバリ島にあるという事を忘れてはいけなかった。インドネシアを訪れる前、バリ島はとても豊かな観光地が沢山あるイメージがあった。しかしそのイメージもボランティアや活動を通して変わっていった。バリ島にも問題があり、未だに家族と一緒に生活できない子ども達が沢山いる事実がある。日本人の多くはバリ島は豊かな観光地であると考えている。しかしその豊かさを裏で支えている人々がいる事を忘れてはいけなく感じる。

今回、インドネシアを訪れて人の協力なしには自分自身は居られないということ学んだ。実際に多くの人々に支えられ、助けられているということ肌で感じた。そしてインドネシアを訪れたこの思い出は私自身の中で色あせる事はないし、大変素晴らしい経験である事を感じると共に今後の将来につなげていきたい。



#### 〈ホームステイ先のエピソード〉

毎朝早くにお父さんは外でカンカン、カンカンと家の屋根に登り仕事をしている。そうすると、お父さんは「台所を作っている」と答えた。私はその時、びっくりした。なぜならもう50歳を過ぎているであろうお父さんが、屋根の上に登って大工仕事をしているからだ。その家には台所がすでにあるのだが、「家族のためだ」とニコニコしながら作業しているお父さんを私は見ていた。



好きな果物は柿と梨の壮助です。

私にとってインドネシアのバリのプリンピンサリは第三の故郷になりました。綺麗な空気、自然豊かな道、笑顔の溢れるアスラマ、いつも元気で優しく接してくれるホームステイのパパとイブ、エトセトラ。私はとても幸せでした。プリンピンサリでは、日本にはないものがたくさんあります。この環境で過ごした日々は私の宝です。

特に印象に残るエピソードがあります。それはアスラマで出会ったスギャルタ、エクセル、アグース、バユの4人の話です。4人ともイケメンで陽気でみんなのリーダー的な子達でした。この4人がすごく私に優しくしてくれているんなことを教えてくれました。バリで流行っている遊び、マンディーの上手な浴び方、インドネシア語などなど、本当に充実した日々を過ごせたのはこの4人のおかげです。私のことを兄貴と呼んでくれて兄弟になりました!! 今でもその喜びを覚えています。絶対に忘れないです。お別れの時には年上でいつもクールなバユは泣いてくれて、スギャルタ、エクセルはプレスレットを作ってくれて、5人で泣きながら笑顔でお別れをしました。

普段と違う環境の中で出会う全ての人、全てのは新鮮で自分の中の心を凄く動かしてくれます。私はこの体験を通じて何が変わったか、成長したかはわかりませんが、この体験を一生の思い出にすることができました。本当に楽しかったです! 以上。



〈ホームステイ先のエピソード〉

毎朝のようにピサゴレン（揚げバナナ）を用意し、毎日生のバナナやお菓子もたくさんくれて、『お昼寝するんだよ』や『マンディー入りや』など本当のお母さんのように接してくれた。短い時間しか一緒に過ごしていないし、言葉も通じない僕にいつも優しく温かく接してくれて本当に嬉しくて心強かったです。ありがとうございました。大好きです！



経済学部 2回生 池永 一樹



私は海外に行くのが初めてだったので、インドネシアに到着しバスに乗ってホテルに向かっているときに街を見たときはとても驚きました。車道には車が溢れていて、車と車の間にはスクーターが重なるように埋まっていて車道に隙間という隙間がほとんどなかった。そして向かっている途中1番驚いたのは仏様が描かれている絵画を背負い

ながらスクーターに乗っている人がいた事だ。あれは日本では中々目にかける事が出来ない光景であったと心から思います。(笑)

ホテルに着いて部屋の鍵を受け取り、入ってみれば日本にいるゴキブリより大きいゴキブリが私とルームメイトの青野さんと河関くんを迎え入れてくれました。対処することが出来ない私たちを救ってくれたのは宮嶋チャプレンです。颯爽と現れてゴキブリをティッシュの上から掴んで退治してくれました。この時ほど宮嶋チャプレンがいてくれたことに感謝したことはないです。(笑)

そして最後の関所であるシャワーである。お湯が出るか分からない、他の部屋のシャワーはお湯が出なかったと聞いていたのでとても緊張感のある時間でした。いざ、蛇口を捻って水を出してみるとお湯が出てきてとても感動しました。次の日からはプリンビンサリ村に向かう予定でそこでは水しか出ないと聞いていて、お湯でシャワーを浴びるのはここを過ぎれば日本へ帰る数日前までないと聞いていたのでとても嬉しかったです。青野さんと一緒に入っていたのでこの感動を共感できてとても嬉しかったです。

国際教養学部 2回生 國枝 みずほ



私は日本語の授業が特に印象に残っています。最初に訪れた学校では自分が有名人であるかのように生徒たちが物珍しそうにこちらに手を振ってくれたことが今でも覚えています。教室に入ると

みんな暖かく迎えてくれました。日本語のレベルがどのくらいかとても心配で、用意してきた日本語プログラムが伝わるか不安でした。しかし事前にディアナプラナ大学の学生との打ち合わせのおかげでスムーズに進めることができました。特に盛り上がったのは告白ゲームです。現地の学生同士の告白はもちろん日本人学生に対する告白もあり、ハグをしたりするととても盛り上がりました。また、男子の日本人学生が私の班では人気で、私の班の男の子に告白した女の子が振られてしまうと泣いてしまうというハプニングがあるほど大盛り上がりで驚きました。しかし、中学校を訪問した際、私達は1年生のクラスを担当したのですが、思春期のせいか、告白ゲームは盛り上がることは盛り上がるのですが恥ずかしさが勝ち、ノリであるということが高校生や看護学生に比べると比較的少ないように感じられました。そのため伝達ゲームという隣同士で手を繋いで握って行くゲームでは、男の子と女の子同士で手を繋ぎたくない、恥ずかしいという雰囲気になってしまい、ゲームを始めるまでに時間がかかってしまいました。年齢にあったゲームを考えるべきだと感じました。とはいうものの、全部の日本語プログラムは自分たちが予想していたよりもはるかに盛り上がり、最後の写真タイムはみんなに写真を求められ、また有名人になった気分でした。お別れをとても悲しんでくれた女子学生が1人おり、今も時々メールのやりとりをしています。Instagramを学生達と交換したのですが、みんな日本語授業の写真を載せてくれていてコメントも翻訳してみると『楽しかった』と書いてくれていて、それを見るたびに頑張ってたかった、と今でも思います。

今回、事前準備の時に班が決まり、私たちの班は1年生と2年生の構成で先輩がおらず、しっかり進められるのか現地の学生をまとめることができるのか不安でしたが、いい意味のノリと綿密なリハーサルにより成功させることができました。この体験は私の人生においてとても貴重な体験でした。この達成感を将来にも活かしていきたいと考えています。

〈ホームステイ先のエピソード〉

ホームステイ先との思い出はやはり娘さんの息子ダニャンとの思い出です。

初めて会ったときはすこし泣きそうになったりしていたのですが、日が経つにつれて少しずつ笑顔を見せてくれたりと、本当に可愛かったです。

また、お父さんがお別れの日に熱があったらしいのですがわざわざ出て見送りに来てくださり本当に暖かい家族でした。



国際教養学部 2回生 河関 慶士郎



私は今回のIWC31でキャンプ長という役割を担うことになりました。31回目という新しいIWCに向けての節目の年にキャンプ長として参加する

ことが出来たことをとても嬉しく思います。キャンプ長としての経験を含め、IWCで得ることが出来た経験すべてがたいへん刺激的で興味深いものでした。その中でも印象に残っている体験は小学校、高校、看護学校での日本語授業でした。

小学校では遊びを中心とした交流を行いました。日本語での名札作り、縄跳びやサッカー、バレーボールなどの遊びを通じて交流をすることが出来ました。小学校にはアスラマで生活をしていて、既に私たちのことを知っている子どもたちも多く通っていました。ですが、アスラマの子どもたちはもちろん、小学校で初めて出会った子どもたちもとても積極的に私たちと交流してくれました。

高校、看護学校でも同じく、日本語での名札作りを行いました。小学校訪問との違いとしては、「ひらがな」を用いて、カルタ・フルーツバスケット・伝言ゲーム・告白ゲームを行い、交流をしました。どの学生からも、全力で楽しみつつも真剣に学ぼうとしている姿や熱心さを感じることができました。

この日本語の授業を行うというプログラムを成功させることができたことには大きな要因があったと感じています。その一つがディアナブラ大学の学生が熱心に協力してくれたことです。彼ら、彼女らが私たちの英語での拙い説明を理解してくれて、インドネシア語に翻訳してくれたことで、生徒たちがゲームの内容を理解でき、円滑にプログラムを進行させることが出来ました。もう一つは、生徒たちの積極的な態度があったように感じられました。小学校、高校、看護学校、どこを訪れたときでも生徒たちがとても積極的に私たちの話を聞き、理解しようとし、盛り上げてくれました。

これらのたくさんの協力があったからこそ私たちの学校を訪問して日本語の授業をするとい

#### 〈ホームステイ先のエピソード〉

毎日必ず家に帰ると玄関のドアを開けて出迎えてくれました。そして、部屋に戻ると服を洗濯してくれていて、毎日清潔な服を着て快適に過ごすことができた。

そのおかげで毎日のワークや様々な活動に取り組むことができました。

#### 国際教養学部 2回生 樋口 さくら



私はアスラマの子どもたちとの交流が特に印象に残っています。初めて施設に着いた時バスから降りると子どもたちが私たちを待っていてくれて、ハイタッチしてくれました。こんなに歓迎されるとは思っていませんでしたので、驚きとともにここでの生活が楽しみになりました。思っていたとおりに毎日子ども達とボールで遊んだり、手遊びをしたり、話をたくさん交流ができました。写真は着いた日に荷物を置いて施設に戻ったときに写真を撮ると言う子どもたちがいっぱい来てくれた時の写真です。初対面なのに壁がなく接してくれてとても嬉しかったです。

ムラヤの子ども達とも数回しか合わないのにワーク中バケツリレーをしながら話をするなど、仲良くなれました。交流会ではマイムマイムが特に盛り上がり、子ども達もとても楽しそうにしているのを見て頑張って準備をして良かったと思いました。運動会でもムラヤの子ども達も来てくれて大きい円でマイムマイムができました。2週間近くアスラマにいて子ども達との別れが一番辛かったです。子ども達から最後に手紙や折り紙、ブレスレットなどのプレゼントをしてくれてそれらは私の宝物になりました。絶対にまた子ども達に会いにアスラマに戻りたいです。

またディアナプラ大学の学生との別れも辛かったです。特にエミとはホームステイ先が同じで一緒にいる時間が一番長かったです。私は英語があまりできなく、話す時は片言でしかコミュニケーションがとれなかったけどエミとはとても仲良くなれました。ホテル最後の日にエミは私にプレゼントでパリのTシャツと犬のぬいぐるみと髪飾りをプレゼントしてくれました。私もディアナプラ大学の学生との最後の時間に6人に手紙を渡して、エミには私のお揃いの伝統的なパリの布をプレゼントしました。

国が違うのにこんなにも仲良くなれたのは私には初めての経験だったのでこのプログラムで私はたくさんのお出会いと初めての多くの経験ができ、参加ができて本当に良かったです。この経験を活かして在学中に他のことにもたくさんチャレンジしていきたいです。

国際教養学部 2回生 平野 順也



インドネシア学生に日本語を教え、インドネシア語を教えてもらったことがとても印象に残っています。インドネシア学生は日本語に興味津々に、新しい言葉や表現方法を教えるたびに、メモをとっていてすごく意識が高いなと感じました。私たち日本人からすると普通の発音でもインドネシア人からすると面白かったりするみたいで、常に笑いが起こっていてとても楽しく、勉強にもなった時間を過ごせました。

インドネシア学生と一緒に予定になかったのに、フォーチュンクッキーを踊ることになり、ダンスを楽しめたことがとても印象に残っています。予定に無かったにも関わらず、私たちが提案したダンスに自ら乗ってきてくれて、お互いすごく仲良くなりよりIWCグループとして団結したように感じました。

そういったこともあって最後に別れるのはとてもつらかったですが、良い思い出にもなり、今でも良い友達として良い関係が築けました。

〈ホームステイ先のエピソード〉

隣の家でおばあちゃんがなくなり、お葬式が開かれました。日本ではお葬式にはふつう観光客を呼んだりすることは無いのに、その時私を呼んでくれました。そして、中に入ることを許可してもらい、さらには、棺に納められているご遺体までみてみて！というほど積極的にみせていただきました。日本とは対応が全然違って、とても面白く驚きました。

国際教養学部 2回生 小椋 良平太



私は今回のワークキャンプの中で一番楽しみにしていたのはワークです。今までのワークキャンプではムラヤの児童養護施設でいろんな建物を建てたと聞いて、自分たちも施設の子どもたちが使ってくれるものを造るんだろうなと思っていたからです。今回のワークキャンプでは壁の補修の

ための土やレンガ運びがメインでした。想像していたよりも軽作業で正直期待していたワークではありませんでした。日本人学生とインドネシア学生のみでの作業と思っていましたが、施設の子もたちも土とレンガ運びのバケツリレーに参加してくれました。暑い日が続くワーク中で、「暑い」という意味の「Panas」や「バケツ」という意味の「Ember」といったインドネシア語を子どもたちに教えてもらいました。初めはあまり会話やコミュニケーションがなかったバケツリレーでしたが、たった2つの単語だけでコミュニケーションがとれたのが嬉しかったです。喋る余裕もないくらいの重労働よりもインドネシア学生や施設の子もたちとコミュニケーションがとれた今回のワークは実際にやってみると良かったと思います。

第4アスラマでの交流会では私たちは恋するフォーチュンクッキーを踊る予定でしたが急遽、寺崎君、青野君、池永君と4人でソーラン節を披露することになりました。日本のサブカルチャーもいけど伝統的な文化も知ってもらいたいと思ったからです。私はソーラン節を踊ったことがありましたが、寺崎君は経験がなく、0からのスタートで、しかも交流会までそんなに日がないのにすごく頑張ってくれたと思います。プリンビンサリのアスラマで練習している際、子どもたちが練習を不思議そうに覗いていて、踊りや掛け声の「どっこいしょ」を真似ているのがとても可愛らしかったです。第4アスラマでの交流会の前にあった離村式のあとに4人でソーラン節をプリンビンサリの子もたちとホームステイ先の家族の方に披露しました。離村式でのご飯はどれもおいしくて、つuitakさん食べてしまった直後で、激しい動きのソーラン節はかなりつらかったです。終盤では動きがだんだん小さくなったり、掛け声もほとんど出なくなりましたが、私たちの疲弊している姿が面白かったのか、笑いも起きていました。それでも最後まで見てくれて大きな拍手を送ってくれたのがとても嬉しかったです。本番の第4アスラマでは離村式の時よりも完成度が高くなっていったと思うし、自分で言うことではないけどかなりかっこよかったと思います。

プリンビンサリ村の人たちの生活は日本と全く違う。最初はその違いに戸惑うことが多かった。朝はやたら早起きだし、シャワーは全て水で、洗濯は手洗い、正直言ってかなり不便だった。今回はそんな違いに戸惑っている時に助けてくれたホームステイ先のイブ、パパの話を書きたいと思う。

彼女たちは優しく情が厚い。洗濯、睡眠、怪我の治療など様々な面でサポートしてくれた。

そして毎朝、僕たちの為に、ピサンゴレン（バナナを揚げた料理）を作ってくれたのだが、これが結構大変だった。ピサンゴレンは美味しいし、日本では食べれない味だ。

最初はみんな喜んで食べていた、しかしアスラマに行けば朝ごはんが出される、必然的にピサンゴレンは前菜でしかない。だが、出てくる量は1キロ以上で「食べきるまで行けません」状態。だから、後半はかなりきつかった。

もし読んでる人がIWCの参加者希望者なら一つ忠告しておきたい、食べるだけ食べたらはっきり断った方がいい。でないと食べれるのだと思われ無限に出てくる。そして、次の日は前の日の量より多いピサンゴレンが登場するからだ。インドネシアの人たちは優しいからすごく接待してくれるが感謝しながらきちんと断らないと後々結構身体にくる。ちなみに、僕はピサンゴレンにより日本出発時より5キロ以上太ってしまった。

そんな愛情たっぷりのイブと別れる前の夜に撮った写真がこちらです。





私がインドネシアで心に残っていることは、毎日の食事のことだ。インドネシアで過ごした18日間の中でなぜこのことが印象的かというと、インドネシア料理はかたい食べ物が多かったと感じたので、慣れない生活の中でのストレスもあったと思うが私は3日目あたりで奥歯が痛くなった。味は本当においしかったので食べられない訳ではなかったが、日本でご飯を食べる時よりもどうしても少食になってしまった。しかし、アスラマでの食事は日に日に私達日本人の口に合うように味が変わっていると気づいた。明らかに感じたのは、ご飯の柔らかさだった。タイ米は日本米より硬くてパサパサだったが、タイ米を水につけて出来るだけ柔らかくなるようにしていたのを厨房でのぞいた時に見て、ご飯を残すのは作ってもらっている人にやっぱり失礼だなと思った。そんな中、滞在10日目あたりにミートソースパゲティとチキンカツが出た日があった。インドネシアに来て骨のない肉は初めてだったと思うし、ご飯の準備に何時間もかけて作ってくれていると先生たちから聞いてご飯を作っているアスラマのスタッフさんに本当に感謝したし、その日は美味しすぎて半泣きで食べた気がする。その日をきっかけに食事に対する思いが変わり、日本に帰ってからも出来るだけご飯を残さないようにしようと思った。

また、私が泊まったホームステイ先はとても大きな家で、普段ホストファミリーが暮らす家と私が泊まる家が分かれていた。そんな大きなお宅だったのでなかなかイブ（インドネシアでは母の

ことをイブと言う）や家族の方と話す機会はないかと思えた。私たちは、昼間は基本アスラマにいるのでホームステイ先にいるのは朝と休憩時間と夜くらいだった。朝も早かったので、ホストファミリーがまだ寝ている時間に私は家を出るだろうと思っていたが私が家を出る前にお茶とパンを持ってきてくれた日があった。またインドネシアでの洗濯は手洗いだったが洗濯にバケツが必要なき時も、私たちが洗濯したいことに気づいてくれてバケツと洗剤まで用意してくれた。休憩時間に家に帰れる余裕があった時は参加した友人が雑談をしにきたことがあり、その時もバナナとクッキーを用意してくれ私はその時々イブの優しさにとても感激したことを今も覚えている。ホストファミリーには息子さんが3人いてその中でよく話したのが20代くらいのバグースとアグースという息子だ。片方が働きに出ているときは、もう片方が家にいるというシステムだった。2人共とても優しく、特にバグースとは私たちがアスラマから帰ってきた時にお互いの知っている日本語とインドネシア語の単語の言い合いをしたのが印象的だった。もう一人の息子は、まだ小学生くらいの子で名前はリオンという。私達が家に帰ると毎回手を振って迎えてくれた。今思うと本当に苦しい体験はなくとても暖かい家族だったと感謝している。



2週間インドネシアで生活して本当に色々な体験が出来ました。一番自分自身が学んだと思うことは、コミュニケーションをとりながら自分の言いたいことをどう相手に伝えるのかということをよく学びました。インドネシア学生と初めは全く言葉が通じなくて、会話は日本人のメンバーとばかり話していました。だけどインドネシア学生は自分たちから英語で話しかけてくれて、通じない場合でもジェスチャーや翻訳機を使ってくれ、私たちとコミュニケーションを取ろうとしてくれました。それに日本語を学ぼうとする意欲が凄くて日々尊敬していました。そして私自身も、もっとインドネシア学生のことを知りたいと思い必死に会話をしていました。初めは「話さなければ、何を話そうか」と交流中も思ったり、感じていたりしていたのですが、日々の日本語の授業やワークの中で交流を深めていくうちに「話さないと、何を話そうか」という気持ちは一切なくなりました。逆に「話したい、伝えたい、共感したい」と思うようになりました。日本語の授業やワークなどのプログラム以外でも、フリータイムは必ずインドネシア学生と過ごすようになってきました。山に登りに行き、お菓子を食べながらホラー映画を観たりとても充実した時間を過ごせるようになっていきました。英語を話すことは本当に大切なことですが、その前にコミュニケーションをとり自分の言いたいことをどう相手に伝えるのかを考えないといけないと学びました。特に同じホームステイ先だったユニタとは本当に仲良くなりました。最終日の観光時にユニタに内緒でお揃いのプレスレットを買いました。そして最後の食事の時に「このプレスレットどう思う？似合ってる？」とユニタに聞くといつものように冗談で「まったく似合っていないよ」と言われて、似合っていないならユニタにあげると言って、私はお揃いのプレスレットをユニタの腕につけた瞬間にユニタは泣き出しました。そして「あなたと離れることが寂しい」と言ってくれました。ユニタは私が日本に帰る日がどんどん近づいて行っても、寂しいや日本に帰ってからも～ということは言わずに、「元気でね」というラフな感じだったので、

ユニタに「寂しい」と言われて本当に胸が苦しくなりました。お互いレストランのロビーで泣いてしまったことが印象強いユニタとのエピソードです。他にも沢山の人々と関わることが出来ました。インドネシア学生をはじめ、アスラマやムラヤの子どもたち、ホームステイ先のイブ、IWCのメンバー。本当にいい人ばかりで、学ぶことが多く日々勉強でした。そしてインドネシアでの生活を振り返ると大変だったことや辛かったことを含めて、良い思い出になりました。この経験を活かしてもっと人とコミュニケーションとり、語学に励もうと思います。

#### 〈ホームステイ先のエピソード〉

部屋に大きなトッケー（トカゲ）が出て、イブがほうき一本で叩きつけて、トッケーの首をへし折ったこと。イブがスムーズに対処をしていて虫が出ることは日常的なことな事なんだと知った。



## 人物紹介

### ディアナブラ大学の学生



アリス



パルマ



アケン



ユニタ



エミ



アディ

### 現地スタッフ

スイクラマさん  
ヤティさん  
フォルマンさん  
ステイティさん  
石井美和さん

### 引率者

大野哲也先生  
エイドリアン・ワーグナー先生  
宮嶋 真チャブレン  
朝倉康仁さん



## 事前研修

選考に受かってから三か月間、毎週火曜日の昼休みと、金曜日の5限目にインドネシア語の授業や、交流を深めるための課題に取り組みました。最初は、皆仲良くなれるか不安でしたが、研修を重ねるうちに自然と仲を深めることができました。

インドネシア語の授業は、由比先生による授業でした。現地で使える単語や、インドネシアの文化の面白いところや変わったところ等多く教えていただきました。そしてその他に、「根っこワークス」穂久宗徳さんによるチームビルディングの参加型研修を行いました。自己紹介から始まり、縄跳びや、ボールを使った人と触れ合いながらの研修を行い、まだ打ち解けてない私たちにとってこの研修は仲良くなるためのとてもいい機会になりました。さらに、私たちが受けた研修内容をインドネシアでも行い活用しました。

これらの研修によって、初めて会った頃とは雰囲気も意識も変わり、選考に受かった人たちから一つのチームへと成り立ちました。



## アスラマの環境について

アスラマの第一印象は自然が豊かだと思いました。運動場が広くその周りには様々な木が生えており、例えばマンゴー、ヤシの木、パパイヤ等といった南国のフルーツの木が多く生えていました。残念ながら乾季のため、実は殆どなっていませんでした。バスケットコートや遊具があるところも草が生えていたので自然な感じでした。壁は可愛くイラストされていました。これはシンガポールの高校生がボランティアで書いたそうです。食堂には網戸があり、風通しもよく、ハエを寄せ付けないように私たちのために配慮がされていました。想像していたよりも設備は整っていて施設も綺麗でした。子どもたちもとても明るい印象でした。しかし、よく観察してみると、私たちの生活している食堂や部屋、トイレが綺麗なだけで、子どもたちが生活している子どもたちの部屋、トイレのスペースは、マンディ場（水浴び室）やトイレは汚い上に、部屋では衛生管理があまり行き届いてなく、雨漏りしている部屋もあり、網戸もないので夜には蚊が子どもたちの大切な睡眠を邪魔している現状でした。



## アスラマの紹介

### ブリンビンサリ村

私たちがホームステイをした自然が豊かな村です。  
とても親切な人たちで、夜は星がとてもきれいでした。



### 第4アスラマ（児童養護施設）

私たちが食事やミーティング、運動会を行った場所です。子どもたちがたくさん遊んでいました。



### ムラヤ町

私たちがワークを行ったアスラマ（施設）や日本語プログラムで訪れた中学校や高校があります。



## アスラマの子どもたちとの遊び

### 《遊び》

サッカー  
バトミントン  
バスケットボール  
鬼ごっこ  
手遊び（アルプス一万尺）  
トランプ  
お絵かき  
写真撮影  
おしゃべり  
肩車

### 《遊んだ年齢と人気種目》

5～14歳

- ・バスケット、バトミントン、高学年
- ・手遊び、女の子
- ・サッカー、小学生低学年～高学年の男の子  
キャッチボール、小学生・幼稚園生  
鬼ごっこ、幼稚園生～小学生低学年



## アスラマの子どもたちへのインタビュー

このインタビューは、8月28日から9月2日にかけてディアナプラ大学の学生が行った。プリンピンサリのアスラマの31名の子どもたちが対象で、年齢は6歳から13歳であった。

インタビューは、子どもたちに、ストレスを与えないように注意されました。また、子どもたちは、楽に答えられる質問にのみ答えるようにしました。

質問は4つの部門に分かれていた。まず、過去の経験、現在の生活、将来の夢について質問を受けました。最後にワークキャンプの経験についての印象を質問としました。子どもたちの、大多数は日々の生活に満足しています。ほとんどの子どもたちはスポーツをするのが、好きだと答えています。他の子どもたちは、英語、日本語、化学、などの勉強を楽しんでいると答えました。

彼らの問題に関しては、ほとんどの子どもたちがすでに解決していると答えました。

### 【過去の経験】

子どもたちは、最初にアスラマに来たとき幸せに感じました。一部の子どもは、家族や故郷から離れたため孤独感や、不安を感じていました。残念ながら一部の学生は、最初に来たとき、他の子どもからのいじめや、コミュニケーションの問題があったと答えました。ほとんどの子どもたちは、この問題を、自分自身で解決できたし、スタッフの助けを借りて、解決することができたと言いました。

### 【現在の生活】

いじめや、喧嘩、またスタッフに割り当てされた掃除を終えていない時にスタッフに、怒られることを嫌っているという意見もありました。

### 【将来の夢】

子どもたちは多くの夢を持っています。子どもたちは、観光業や会社に就職したいと言いました。ほかの子は、教師、警察になりたいと言いました。教会のために働く牧師や、芸術家になりたい子どももいました。



# アスラマの子どもたちへのインタビュー

(現地学生分の日本語訳)

## アスラマ

長年にわたり、国際ワークキャンプの参加者は、児童養護施設の施設とその一般的な生活様式の改善について評価してきました。今回、私たちは子どもの心のケアを促進するために情報を収集しました。

その情報は、8月28日から9月2日にかけてディアナブラ大学の学生が集めました。プリンビンサリ(アスラマ)の合計31名の子どもたちがインタビューされ、年齢は6歳から13歳です。

インタビューは、子どもたちにストレスを与えないように注意しました。また、子どもたちが、楽に答えられる質問のみにしました。

質問は4つの部門に分けました。まず、過去の経験、現在の生活、将来の夢について質問を受けました。最後にワークキャンプについての印象を質問にしました。子どもたちの大多数は、日々の生活に満足しています。ほとんどの子どもたちはスポーツするのが好きだと答えています。他の子どもたちは、英語、日本語、化学などの勉強を楽しんでいると答えました。

彼らの問題に関しては、ほとんどの子どもたちがいままでに経験していると答えました。

### 【過去の経験】

一般的に子どもたちは、最初にアスラマに来たときハッピーと感じていました。一部の子どもたちは、家族や故郷から離れたため、孤独感や不安を感じていました。残念ながら一部の子どもたちは、最初に来たとき、他の子どもからいじめを受けたり、コミュニケーションの問題があったと答えました。けれどもほとんどの子どもたちは、この問題を自分で解決できたし、スタッフの助けを借りて、解決することができたと言いました。

### 【現在の生活】

いじめや喧嘩、またスタッフに割り当てされた掃除を終えていない時に、スタッフに怒られることを嫌っているという意見がありました。でもそれは自分が悪いので仕方がないとも言っています。

### 【将来の夢】

子どもたちは将来について多くの夢を持っています。子どもたちは、観光業や会社に就職したいと言いました。ほかの子は、教師、警察官になることを志望しました。教会のために働きたい子ども、芸術家になりたい子どももいました。

生徒はまた、パプア、ジャカルタなどバリ島以外の場所へ旅行を希望します。また教育を受けた後、ほとんどの子どもたちは故郷に戻り平和な家庭で生きることを願っています。

IWCプログラムの桃山学院大学とディアナブラ大学の学生のワークキャンプに関して、子どもたちは圧倒的にポジティブな経験と答えました。子どもたちにとってゲストを迎え入れることは非常にエキサイ

イテイングで、私たちと一緒に遊んだり、日本語を学んだりするのが楽しいと話しました。また、子どもたちは交流会での歌と踊りはとても楽しかったと答え、日本食を食べる機会を得て喜んでいました。

このインタビューのプロジェクトがIWCの歴史の中で試みられたのはこれが初めてでした。このプロジェクトを今後も継続するために、質問とデータ収集のプロセスを改善することを願っています。

## 子どもたちのポジティブさ ～子どもたちの置かれた状況の厳しさについてスィクラマ氏のお話～

スィクラマさんのお話（施設の子どもたちについて）



国際ワークキャンプ（インドネシア）のコーディネーターであるスィクラマさんに、施設の子どもたちのお話を聞くことができました。

ウィディアアシ財団が運営しているアスラマ（児童養護施設）に住んでいる子どもたちは、家庭の貧困や暴力、搾取といった理由から、この地で生活することになりました。

中には、生活のため、子どもたちに働かせる親もいます。また女の子は、10代前半で結婚をし、20代になる頃には3人以上の子どもを産む人もいます。



様々な理由から、アスラマで暮らすことになった子どもたちですが、もしウィディアアシ財団が設けたアスラマが無ければ、多くの子どもたちが労働に従事していたかもしれません。本を読んだり、手紙を書くといった、ささやかな人生の豊かさすら知ることができなかったのではないのでしょうか。今年度は、インドネシア人学生の協力を得て、子どもたちにアスラマでの暮らしや将来の夢、家族のことなどを聞くことができました。前向きな回答もたくさんあり、ひたむきに生きる彼らの思いを知ることができました。

詳細については、エヴァリュエーションの項目でご覧ください。



## ムラヤでのワーク・ブリンビンサリでの農作業

第31回ワークキャンプのワーク内容は、ムラヤのアスラマで豪雨で倒れた塀を再建することでした。ムラヤの子どもたちも砂を運ぶバケツリレーに参加してくれました。ワーク最終日はムラヤでのワークが終わっていたので、ブリンビンサリ村で農作業を行いました。私たちが作業を始めるとどこからともなく、子ども達が集まり、手伝ってくれました。

ムラヤへは毎回トラックの荷台に揺られながら向かう。ころばないように足を踏ん張りつつ、心地よい風を感じた。道中では木々がこちらへはみだしており、みんなで「葉っぱ!」と声を掛けながら葉や枝を避けていく。ムラヤに着くとすぐに軍手をつけて、帽子を被り作業を始める。

ワークの大部分は、ムラヤの児童養護施設での塀の再建。この壁は以前のワークキャンプ参加者が造った塀が崩壊した為、造り直すという作業でした。インドネシアは、夜・早朝は比較的涼しいですが昼間は、30℃ほどになる為メンバーは麦わら帽子被って作業をしました。塀を作るために赤レンガや土などをムラヤの子ども達と一緒にバケツリレーで運びました。炎天下汗だくになりながらの作業でしたが、塀が完成し、お互いの学校名を刻みました。私たち1人1人で壁に名を刻む瞬間はまさに達成感に満ち溢れてました。

ブリンビンサリでの農作業は3つの作業で構成されました。堆肥を畑にバケツで運ぶ班、堆肥と土を混ぜる班、ナス畑の雑草を取り除く班にわかれ、すべての作業を皆ができるようにローテーションで行いました。

ワークはとても暑い中での作業でしたが、アスラマの子ども達も手伝ってくれました。声を掛け合ったり、励ましあったりしながら、また子ども達と触れ合いながら、インドネシア語と日本語を教えあいながら、楽しくワークができたので、子ども達との交流もでき、時間が経つのもあっという間でした。

このワークを通じて、IWCのメンバーが1つになれたような感じがしました。1つの作業をチームワークでやり遂げる達成感とチームワークの素晴らしさを学びました。またこれらの作業は日本では体験のできない事だったので、とても良い経験になったと思います。



## 交流会

### ダンスについて

交流会で踊ったダンスは妖怪体操、イスラエル民謡のマイムマイム、ソーラン節、フォーチュンクッキーの4つです。

第2アスラマ・プリンビンサリ村では、妖怪体操を披露し、マイムマイムは室外で全員手を繋ぎ、大きな円を作って周り、声を出しながらみんなで楽しみました。第5アスラマでは、池永・青野・寺崎・小椋の4人が自由時間に練習を重ね見事なソーラン節を魅せました。最後には全員でフォーチュンクッキーを披露しました。

スポーツ大会では、準備体操を行う際にラジオ体操よりも楽しくできるのではないかという意見から、急遽「妖怪体操」を踊りました。事前の合宿で練習を積み重ね、ほとんど完成した状態でインドネシアに行きました。しかし、子どもたちがもっと楽しむことができ、覚えやすく仕上げたかった為、現地で掛け声のタイミングや、動きの統一を行い細かな修正を行いました。マイムマイムについては我々学生たち（インドネシア学生も含む）が数回練習したのみでしたがそれでも十分でした。足の動きは完璧でなくても、楽しむことができたし、本番では、子どもたちは見様見まねで動きを合わせてくれました。



フォーチュンクッキーは、ダンスを私たちにに向けて披露してくれるということで、相談の末に急遽全員で踊ることに決定しました。簡単な動きだったので覚えやすく、プログラムの合間に少しの時間を見つけては、音楽を流して練習しました。

### 交流会について

交流会は食堂で夕食後の時間帯に行うので、机や椅子を外に出して座れるように動かしたりしてダンスや歌を発表するための空間を作りました。

交流会はアスラマの子どもたちが先ずガムランを演奏してくれ、次に数人の子も達が民族舞踊やインドネシアで人気のあるモレモレダンスを披露してくれました。そのあと我々日本人学生とインドネシア学生のダンスを交互に発表し、日本人学生とインドネシア学生が一緒になって「君は愛されるために生まれた」を合唱しました。そのお返しにアスラマの子どもたち全員で合唱を私たちに聞かせてくれました。最後はアスラマの子ども達が、くぐれる人間アーチを私たちが作ってあげて子ども達を送り出しました。子どもたちはとてもうれしそうでした。



交流会をするにあたって困ったこと、失敗したこと

- ・披露するダンスの練習が不十分だったこと
- ・披露しているのに写真や動画を撮っていて失礼だったこと

## ガムランについて【ガムラン (gamelan)】

「ガムラン」とはインドネシア各地の様々な打楽器合奏の総称で、古代ジャワ語の「ガムル」(たたく)が語源となっています。

地域によって特色があり、その中でもジャワ島中部、ジャワ島西部 (スンダ)、バリ島のものなどがよく知られています。特に芸能の島として有名なバリ島には大小数十種類のガムランがあり、島民の信仰するバリ＝ヒンズー教の寺院の祭礼や冠婚葬祭などに際し、あるいは観光客向けのショーとして、(多くの場合、舞踊の伴奏音楽として) 盛んに演奏されています。

私達が今回訪れたバリ島のガムランの事を、バリ・ガムランと言います。

バリ・ガムランにはガンサ、クンダン、レヨン (トロンボン)、ゴングと様々な種類があります。

簡単に紹介します。



- ・ガンサ【片手で叩く鉄琴】
- ・クンダン【太鼓】
- ・ゴング【ドラ】
- ・レヨン【両手で叩く「釜」】

これらが一般的によく使用されている楽器です。

ガムランの演奏はかなり大きな音で、何キロか先まで聞こえます。ホームステイ先で寝る準備をしている時に、よくガムランの演奏が聴こえてきました。見た目も華やかでとても高級感があります。このIWCの活動中も、たくさんのガムランの演奏を聞かせて頂きました。私達に向けて歓迎の証として、子ども達も民族衣装に身を包み、迫力のある演奏で鳥肌が立ちました。

## スポーツ大会について

アスラマでムラヤの中高生たちとプリンビンサリの子どもたちでスポーツ大会をしました。

前日、私たちはどの競技を実施するのかを話し合いました。また、スポーツの他にも小さい子どもたちや運動があまり得意でない子どもたちのために、室内で出来る折り紙、お絵描き、日本から持ってきた卓球やシャボン玉で遊べるプログラムも入れようとなりました。この室内でのプログラムは主に小さい子どもたちや女子に人気がありました。お絵描きの中で、似顔絵と手紙をかきあって交流を深めました。





そして、事前の話し合いの中でどの競技やプログラムにどれだけの子どもたちが集まるか、想像が付きませんでした。結局、私たちの担当を固定して、子どもたちは好きな時に好きなプログラムに参加ができるようにしました。スポーツ大会の司会は日本人学生から1人とインドネシア学生1人にしました。アスラマのスタッフの方をお願いして、当日グラウンドで全員が司会の人や音楽が聞こえるように大きなスピーカーや機材を用意してくれるようになりました。そのおかげで当日は全体にアナウンスが聞こえ、スムーズに進行が出来ました。また、当日にアスラマのスタッフさんが水やジュースやお菓子を大量に用意してくれていました。

当日は、司会の挨拶から始まりました。グラウンドにはプリンビンサリとムラヤの子どもたちが先生の指示にしたがって整列しました。子どもたちの中にはサッカーのユニフォームやバスケット専用の靴を履いている子どもたちもいて本当に楽しみにしてくれているのだなと思いました。司会の挨拶が終わり、日本人生徒を中心にして「妖怪体操」で準備体操をしました。ムラヤの子どもたちはこの時初めて

「妖怪体操」を目にしてとても笑っていました。その後スポーツ大会が始まり、大きなグラウンドではサッカーと大縄跳びをしました。サッカーは主に高学年の男子に人気でした。大縄跳びは男女問わず人気でした。バスケットコートではバスケットをしていたのですが、意外と不人気でサッカーやバドミントンに流れることが多かったです。バスケットコートの横ではバドミントンをしていて、特に高学年の女子に人気がありました。休憩時間は前もって全員決まった時間に休むと決めていました。ですが子どもたちは元気が良いので、ずっと走り回っていました。最後は全員でマイムマイムをグラウンドで踊りました。大きなグラウンドだったので大きな円を作ることができ、子どもたちはとても大はしゃぎでした。閉会式も司会の2人が担当し、無事にスポーツ大会を終えることが出来ました。そして一番驚いたことは、大会が終わった後に子どもたちが率先して片づけをしていたことです。重い椅子も子どもたちで運んでいたり、シャボン玉でベトベトになった部分を拭いたりしていました。その姿をみて、自分たちも最後までしっかりしなければならぬと考えさせられました。大会を成功させる為には、スタッフ同士で事前にしっかり話合っ  
て細かいところまで決めておくことが本当に大切だと思いました。また、アスラマのスタッフさんとコミュニケーションをとりながら、打合せすることも大切だと思いました。

体育大会を全員で楽しめることが出来て、本当に良かったです。



## 日本語プログラム

### 小学校訪問

小学校では20分ほど日本語の授業を行った。授業といっても高校や看護学校のようにではなく、簡単に伝言ゲームなどを行った。しかし、伝言ゲームは難しかったようであまり理解してもらえなかった。時間も短かったので進行はスムーズにはいかなかった。

授業後は外で子どもたちと遊んだ。サッカーや大縄跳び、シャボン玉などブースを設け、小学生たちが行きたいところに行くような形で行った。シャボン玉はインドネシアでは珍しいようでとても楽しそうだった。また、大縄跳びでは初めは縄に引っかかることも多かったが慣れてくると10回、20回とどんどん跳べるようになった。跳ぶカウントを日本語にするといい工夫もできた。

小学生ということもあり、外で遊ぶのがとても楽しそうだった。



### 中学校訪問

中学校での日本語プログラムでは、最初は2つの班が1クラスずつ分かれて授業を行う予定でしたが、学校側の要請で急遽3クラスをやってほしいという事になり、2つの班から各2名ずつ抜き、3つの班に作り直し、3クラスに分かれて授業を行いました。

中学校では主にあいうえお表、ひらがなの名札作り、カラーバスケット、かるた、伝言ゲーム、日本語での告白ゲームを行いました。中学校では、日本語を少し勉強していたようなので、50音表の読み方などはみんな元気よく読んでくれました。中学校で意外と盛り上がったのが、伝言ゲームでした。お題などはその場で決めて、お題の答えを簡単なジェスチャーと英語で説明した。みんなが真剣に日本語で伝達しようとしていて、真剣だからこそ勝ち負けにこだわって盛り上がりました。また、中学校では、アスラマの子どもたちも居て、日本語プログラムをきっかけに仲良くなれました。

中学校でうまくいかなかったのは告白ゲームです。みんな恥ずかしがったりして、なかなか上手く進めることができず、もう少しクラスの状況を見て判断するべきだったなと思い反省しましたが、最後はみんな写真撮ったりして、笑顔で終わる事ができました。



## 高校訪問

私たちは日本語プログラムのため高校を訪問した。日本語を使った遊びを通して日本語を学んでもらった。4つの班に分かれて1クラスずつ担当した。日本で準備している段階では本当に盛り上がるのか、真剣に取り組んでくれるか心配だった。高校に到着してからもうまくできるかとても緊張した。

しかし、高校生たちは私たちを見ると笑顔で手を振って歓迎してくれた。また、高校生はある程度日本語を学んでおり、挨拶や簡単な会話ができ、そしてとても元気で明るい人が多かったので、授業が始まる前に緊張がほぐれた。

どの班もカラーバスケットが人気で盛り上がった。色を日本語で言った後に英語やインドネシア語で補足したのでスムーズに進行できた。また、椅子を取り合う時や、空いている椅子に気づいていない時は周りが楽しそうに見ていた。想像以上に盛り上がったのと、真剣に取り組んでくれたのがとてもうれしかった。

また、告白ゲームは男子から女子に、女子から男子への告白も盛り上がったが、特に男子同士だと大きな笑いがおこった。

しかし、告白ゲームは日本語で告白するルールだったので、そのセリフの意味を英語やインドネシア語で伝えるのが難しかった。準備していたセリフの表現が難しかったのもっと簡単にすればよかったと思う。伝言ゲームはうまく説明ができず、ルールを理解してもらうのが難しかった。周りは聞こえないように耳を塞いでもらったが、途中で手を離したり、隣同士でお喋りをはじめたりしてあまりスムーズな進行ができなかった。



## 看護学校訪問

看護学校では、4つの班を4クラスに分けて、五十音表、名札作り、カラーバスケット、かるた、伝言ゲーム、伝達ゲームを中心に授業を進めました。看護学生は私たちが想像してたよりも日本語を勉強していたので、名札作りと五十音表などはスムーズに進む事ができました。カラーバスケットなどではみんな本気で椅子を取りに行っていて、あまりにも激しかったので正直驚きました。日本の学生と違って好奇心が高く、みんな真面目に私たちの用意したゲームに取り組み、楽しんでくれました。

看護学生は、1クラスにつき男子が数人と聞いていましたが、思った以上に男子の人数が少なく、少しやりづらかった部分もあったり、途中でグダグダしたり早く終わってしまうクラスもありましたが、最終的にはみんな楽しんでくれたみたいなので良かったです。普通の学校と違い、看護学校という専門学校での日本語プログラムでしたが、普段とは違った体験ができたので、本当にいい経験になったと思います。



## 日本食プログラム

今回は、和食を準備しました。そして、ごはんをメインに考えました。メニューは、炊き込みご飯と豚汁、デザートとしてわらび餅をアスラマの子どもたちとホストファミリーの方たちにごちそうしました。そのメニューと概略を説明します。

### ○材料

#### 【炊き込みご飯】 120人前

お米 10kg            だしの素 3袋  
水 13.5ℓ            醤油 60杯  
豚肉 適量            ネギ 塩 少々  
人参 7本  
生姜 7個

#### 【豚汁】

水  
だしの素  
赤だし  
豚肉  
人参  
大根

#### 【わらび餅】

わらび餅粉  
水

### ○感想

日本で練習した通りに炊き込みご飯を作ろうとしましたが、お鍋があまりにも大きかったのでうまく作れずお米が固くなってしまいました。それで現地のスタッフの方にバナナの皮で包んで蒸してやわらかくしていただきました。豚汁は練習通り出来ました。ですが小さな男の子達には少しすっぱかったようです。デザートの花び餅が一番好評で、おかわりする子たちもいました。

#### [良かった点]

わらび餅が好評でした。  
練習通り出来た個所も多くありました。

#### [反省点]

炊く量が多かったので炊き具合にむらが出ました。



## アスラマの生活（バリで驚いたこと・困ったこと）

### マンデイ

インドネシアのお風呂はシャワーではなく、マンデイという水浴びをする。

桶に入った水を被る伝統的なスタイルやシャワーやホースから水が出る家もあるが、どの家も温水がなく冷たい水でした。夜にすると寒くなるので夕方にする人が多いようだ。

マンデイ場にはほかの部屋と同じように風通しを良くするための通気口がある。そこから虫やトッケーなどが侵入してくることもあるので油断できない。



### 食べ物

インドネシア料理には焼きそばのようなミーゴレンや焼き飯のようなナシゴレンがある。どの料理も美味しいのだが、サンバルというチリソースが使われていてとても辛い。

初めは辛さに苦しむ人が多かったが、だんだん慣れていき、追加でサンバルをかける人もいた。また、インドネシアは日本のように茶碗にお米を入れて、大皿に主菜を入れるスタイルではなく、一つの皿にお米や主菜などをまとめて入れる。また、食事は右手にスプーン、左手にフォークを持って食べるのが一般的だ。



### 風景の違い

インドネシアでは犬や鶏を放し飼いにしているのが一般的だ。道路の真ん中で寝ていたり、車を気にせず道路を歩いたり、脇道で親鶏がひなを連れていることがよくあった。

インドネシアは日本に比べて圧倒的にバイクが多い。デンパサールではノーヘルメットや2人乗り、3人乗りは当たり前で、プリンビンサリでは小学生さえもバイクに乗っている姿を見た。これって大丈夫なの？

また、バリには信号がほとんどなく、たまに警察が交通整理をしているのを見かける程度だった。

また家や門の前に国旗を掲げていた。国旗の他にも国旗の色である赤と白の旗や星の飾りもあった。



建物は当然日本のものとは違う。民家は玄関前に段があり、そこで靴を脱いで家に入る。また、風通しを良くするために窓が多かったり、開閉の必要がない通気口を設置している。プリンピンサリにはキリスト教の教会があるが、大学のチャペルとは違い、バリ教の寺院風の石造りだった。



## 洗濯

ホームステイ先では日本から持参した洗剤で手洗いだっ。直に洗剤に触れるので手がある人もいた。また、普段は洗濯機を使っているののでどうやって洗えばいいのかわからなかった。脱水も手絞りだった。うまく絞らないと臭いがのこることもあった。インドネシアは乾季で雨の心配はなかったが日陰だとなかなか乾かないこともあった。

洗濯物を干すときはホームステイ先の物干しざおを貸してもらった。ハンガーをかけるロープがあれば干せる場所を増やすことができたのでかなり便利だった。

## 動物

プリンピンサリで生活していく中で色々な生き物と出会うことができました。

主に犬、豚、鶏、牛、トカゲ、ハエである。トカゲに関してはホームステイ先で多く出現し、「トッケー」と言われている。そしてハエに関しては、常に私たちの近くを沢山飛んでいた。特に日本食パーティーでわらび餅を作った時に、わらび餅の砂糖に多く集まってきた。ハエたちはアスラマの近所に養鶏場があり、そこから飛んでくるそうです。普段子どもたちは野菜を主に食べており、そんなに多くやってこないと聞きました。私たちの活動中に多くハエがたかった理由としては、日本人の為に食事でも肉を出してくれているのでハエたちが集まってきているという説が有力です。

動物に関して一番驚いたことは、インドネシア人と日本人の犬への思い方の違いだ。



ある朝、ホームステイ先の犬が車に轢かれて死ぬというショックな事件がありました。その時に飼い主は「気にしないで、良くあること。車が来た時に逃げることを教え込んでいなかった私が悪い」と言いました。日本だと愛犬に事故や怪我をさせると、慰謝料の請求などと、ことが大きくなってしまいます。この日本の考え方しか知らなかったのでメンバー全員が驚きました。

後で現地のスタッフさんに聞いたのですが、昔から多くの家で犬は番犬として飼われ、敷地内で放し飼いになってきました。私達が夜にホームステイ先の家に帰ろうとすると、通りすがりの家の番犬が私達に吠えてきます。でもその家の前を通り過ぎると、その犬は家に戻っていきます。そして次の家の犬が出てきて吠えるのです。プリンピンサリでは、放し飼いは禁止になっており家の敷地の中では許されているが、敷地から道路に出ると何があっても、飼い主側の責任なのです。だから、犬を轢いたドライバーには責任がないのだそうです。

日本ではペットは家族の一員ですが、インドネシアでは番犬という考え方の様です。

## バイク

バリ島ではほとんどの人がバイクを自転車感覚で乗っていました。

一番驚いたことは、違法かもしれないが小学生も町でバイクを乗り回しており、お年寄りの方もスピーディーにバイクに乗っていたことが驚きました。バイクのガソリンはビンに入っており、民家でもうられているところを目にしました。

また、バリ島では定期バス、公共交通機関がほとんどないということです。あったとしても渋滞などで、時間通りに運行されないことがあるのでバイクの使用率が高くなります。

## トイレ

ホームステイ先とアスラマのトイレは思っていたより綺麗で快適でした。トイレトペーパーもしっかり備え付けてありました。日本と違うところはトイレにシャワーがついていて、日本でいうウォシュレット代わりになるものでした。マンディー中やトイレ中に虫が侵入してくることも多々ありました。途中のサービスエリアのトイレは昔ながらのデザインで、便器の横に水を貯めたタンクがあり、そこから柄杓で水をくんで流すというセルフ水洗方式でした。



## 来年へのアドバイス

### 【役に立ったもの】

- ベープ(電気蚊よけ)・・・蚊がデング熱ウイルスを媒介するので
- ハエ叩き・・・・・・・・・・夜寝るときにハエがいて寝られなかった！
- 洗濯ロープ・・・・・・・・・・部屋干し外干しどちらでも役に立つ！
- 日本のおかし・・・・・・・・日本食が恋しくなったときや、現地の学生との異文化交流の材料に！
- インスタント食品

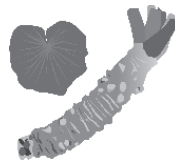
### 【やってはいけないこと】

- 左手(不浄の手といわれる)で子どもの頭をなでること
- 夜に騒いではいけない(あたりまえ)
- 犬が近づいてきても走って逃げてはいけない。
- さらに追いかけてくるので、静かに去るのがベスト！



### 【持って行ったお土産】

- ・日本から
- 抹茶系
- 風鈴
- わさび系
- カップラーメン
- 折り紙



### 【おすすめのお土産】

- ・インドネシアから
- ティムタム
- バリ珈琲
- かごバック
- お皿
- ジャスマンティ



## ランキング・インドネシア

### 【カルチャーショックランキング】

- 1位 ハエの多さ
- 2位 トイレ事情
- 3位 マンディー事情
- 4位 現地の人たちの生活習慣
- 5位 犬

IWC参加者に聞いたカルチャーショックをランキングにしたものがこちらになります。

一番みんなが気にしていたのが「ハエの多さ」ですね。

確かにインドネシア、特にアスラマではハエの多さが異常でした。

ご飯の時はみんなでハエを退治していたのが印象に残っています。

2位と3位は水回りの話ですね。

トイレは水洗タイプもあるのですが、ほとんどのものが自分で水をすくって流すタイプでした。

またお風呂（マンディー）はお湯が出ません。

続いて4位、インドネシアの人たちの生活習慣です。

彼らは早寝早起きを徹底しています。

子どもたちは朝5時半には学校に向かいますし、ホームステイ先の人たちも4時には起きていました。

5位はインドネシアの犬の話。

向こうの人たちは犬を愛犬用に飼う習慣がありません。

基本的には番犬用で、地域によっては食用で飼っている人もいます。

以上がカルチャーショックランキングです。

さて、続いてはアスラマで出た食事のランキングです。

### 【アスラマの好きな食事ランキング】

- 1位 焼き豚
- 2位 チキンカツ
- 3位 お粥（インドネシア風）
- 4位 バナナクレープ
- 5位 スパゲッティ

これは、私たちが滞在していたアスラマで出していただいた好きな料理をランキングにしたものです。

1位は離村式の後に出た焼き豚です。

炭火焼きだったのでごい風味で、全員が喜んでいました。

これは日本の店で出てもおかしくないレベルだ、とみんなが口をそろえて言っていたのが印象に残っています（エラそうでゴメンナサイ）。

2位がチキンカツですね。

これはもも肉にパン粉を付けてカラッと揚げたシンプルな料理です。

日本ではそんなに珍しいものではないのですが、アスラマではそもそも肉料理が少なかった(?)ので、この料理の時はみんな目の色を変えて食べていました。

3位はお粥です。

しかし、普通のお粥ではありません。

このお粥は自分で具材を盛っていくタイプで、日本粥のように味が優しいものではなく、どっちかと言うと中華粥に近い感じです。

盛っていく具材は、鳥のささ身、卵のそぼろ、オニオンチップ、そして秘伝タレです。

タレが何で出来ているのかが気になる場所ですね。

4位はバナナで作られたクレープです。

もぎたてのバナナが大量に入っていて食べごたえがありました。

5位はスパゲッティです。

トマトソースがかかっているシンプルなもので、おいしかったです。



#### 【インドネシア学生に人気のカップ麺ランキング】

- 1位 カレーうどん
- 2位 きつねうどん
- 3位 かき揚げうどん
- 4位 天ぶらそば
- 5位 カップヌードル

このような結果となりました。

驚いたのが意外とうどんが人気ということです。

インドネシアの人たちは、しっかりとした味付けを好む人が多く、うす味は好まないようです。

だから、味がしっかりとしているカレーうどんが人気です。

インドネシアに行く時はカレーうどんを持って行きましょう。

## エヴァリュエーション

こんにちは。初めまして。私達は桃山学院大学の学生、ディアナプラ大学の学生合わせて全員で23人です。私達はプリンビンサリ村と子ども達について考え、話し合いました。

その前に、「私達は何故このプログラムに参加したのか」について話し合いました。例えば、何人かの学生は過去の参加者から経験を聞いて、プリンビンサリの子ども達と子ども達の家について何かしてあげたいと言っていました。また何人かの学生は自分たちの目でプリンビンサリの子ども達や家などを見てみたい、日本語の授業やボランティアの経験をしたいと思いました。異文化交流もこのプログラムを通して行いたいなど様々な気持ちでここに来ました。

私達はプリンビンサリとムラヤの子ども達の施設でほとんどの時間を過ごしました。ここでは、子ども達の生活をより良くする方法を考えてきました。

私たちは活動の間に気づいたことや感じたことについて話し合いました。そして改善した方がいいところを見つけたので4つに分類し、それぞれmake, clean, improveに分けています。その中でもmakeはbig projectとsmall projectに分けました。

初めにbig projectです。

- ・遊具の改善

子どもたちの運動能力を向上することができます。例えば、ブランコ、ジャングルジム、シーソー、うんてい、滑り台などです。

- ・フェンスの設置

バスケットボールコートの柵をたてるべきです。野菜を傷つけるし、ボールが池に入ってしまうと危ないからです。

- ・共用のパソコン

ムラヤのアスラマにはパソコンルームがあるが、プリンビンサリにはありません。パソコンを設置することでスキル習得や情報収集ができるので子どもたちに良いと思います。

次にsmall projectです。

- ・アスラマではたくさん遊び場があるのに遊具が少ないことに私たちは気づきました。私たちは子どもたちの為にサッカーボールやバスケットボール、バレーボール、フリスビーなどを与えてあげなければなりません。そして私達はサッカーとバスケットゴールにネットを設置してあげたいと思います。その上、子どもたちがボールを無くさない為にも収納箱を置く必要があります。

- ・私たちは子ども達と会った時、彼らの服と靴があまり良くない状態でした。サンダルを持っていない子もいました。子ども達に定期的に服や靴を与えるべきです。それと、食堂の前と部屋の前に靴箱を置くのと靴を無くすことは無くなるでしょう。

- ・私たちが児童養護施設の図書館を利用した際に、私たちは十分な数の本が無いことに気がつきました。そこで私たちは図書館に本を増やすと良いのではないかと考えます。インドネシア語と英語の本だけではなく、日本の本やDVDも設置すべきです。例えば、絵本や辞書、ドラえもんやナルトのDVDです。もし、私たちが図書館内の設備を増やすことが出来れば、子どもたちはよりたくさんのお話を学ぶことができるでしょう。

次にcleanです。

- ・プリンビンサリの子どもたちは、手を洗うための場所があり、手を洗う教えもあります。しかし、私達は子どもたちが食事の前に手を洗っていないことに気がつきました。そこで私達は、職員の方が

子どもたちに手を洗うことを教えることを積極的に提案したいです。

- ・子ども達は清潔に感心を持っていないと私達は思いました。

だから私達は子ども達に部屋に入る前に足を洗うことと、部屋の入口にフットマットを置くことを提案します。

最後にimproveです。

- ・女子トイレを改善すべきと考えます。なぜならタイルが壊れていて怪我をする恐れがあるからです。
- ・子ども達がよく眠れるように、スタッフが子ども達の部屋に蚊が入るのを防ぐべきであると提案します。季節によっては、蚊は子ども達の睡眠を妨げます。これは彼らの発育には子ども達の部屋の窓やドアに網戸を設置するべきではないでしょうか？それは虫の侵入を防ぎ、空気循環を可能にし、窓ガラスが割れる危険を減らすことにつながります。
- ・子どもたちの建物の廊下の屋根がいたんでいるところがあり、そのせいで雨漏りしているので直す必要があります。

本日はお聞きくださいましてありがとうございます。IWC31期生はウィディアアシ財団とバリプロテスタント教会のご協力に感謝しています。私たちにとってこのプログラムに参加した経験はとても良いものでした。桃山学院大学とディアナプラ大学はこれからもこの活動を続けていきたいと考えています。

2017年9月2日桃山学院大学・ディアナプラ大学参加学生一同



# 31st International Work Camp Evaluation Summary

## Introduction

The participants in the 31<sup>st</sup> International Work Camp travelled to Bali, Indonesia, with the intention of engaging in volunteer work and cultural exchange. Our activities have included assisting in the construction of a new wall, cleaning in the children's homes, cultural exchange parties, teaching Japanese language at various schools, and a Japanese meal party. A total of 23 students, 17 from St Andrew's University in Osaka, Japan, and 6 students from Dhyana Pura University in Denpasar participated in the program.

We spent most time in the children's homes in Blimbingsari and Meraya. While here, we have been thinking of ways to make the lives of the children in the children's homes even better. The following is a summary of our observations and suggestions, categorized into four categories, *Make (Big Projects)*, *Make (Small Projects)*, *Clean*, and *Improve*.

Also, students from Dhyana Pura University engaged in a project of interviewing the children in the Blimbingsari Children's Home to learn more about their backgrounds, thoughts and feelings about daily life, and aspirations for the future.

## Students' Observations and Proposals

### Make (Big Projects)

#### 1. Installation of Play Equipment

To enable children to play actively we propose the construction and installation of additional play equipment such as swings, jungle gym, see-saw, monkey bars, slide, etc.

#### 2. Installation of the Fence around the Basketball Court

The fence will prevent the ball from the court going into the vegetable field and damaging crops, falling into water receptacles near the court.

#### 3. Installation of Shared Computer

There is a computer room in the children's home in Meraya but not in Blimbingsari.

This will be good for the students to learn skills and get new information.

### Make (Small Projects)

#### 1. Play Tools

At Blimbingsari Children's Home, we noticed that children have a lot of space to play but don't have many play tools. We would for the children to receive more play tools such as soccer balls, basketballs, volleyballs, frisbee, and more. And we would like to put nets on the soccer and basketball goals. Also, we would like to put a storage box for the play tools so children do not lose them.

#### 2. Clothing and Footwear

When we met the children, we saw some of their clothes and shoes are not in good condition.



Also, some children don't have sandals. We would like for children to receive clothes and shoes periodically. And we would like to set shoe boxes in front of the dining hall and their rooms to stop the loss of shoes.

### 3. Books and DVDs (Japanese)

When we used the library of the children's home. We noticed they don't have enough books. We think it would be desirable to increase books in in the library. Not only books in Indonesian and English, but also, we should put in books and DVDs in Japanese, for example picture books and dictionaries, and DVDs such as Doraemon, Naruto etc. If we can increase the materials in the library, children can learn more and more.

## Clean

### 1. Handwashing

The children at Blimbingsari have an area to wash hands and there is a sign of handwashing instructions. However, we noticed that not all children wash their hands before eating. So, we would like to suggest that staff teach and remind students to wash their hands.

### 2. Feet

We noticed that lots of children spend time outside without shoes or sandals. We would like to suggest that students be helped to form the habit of cleaning their feet before entering their rooms. For this purpose, we would like to set foot mats in the rooms of students.

## Improve

### 1. Improvement of Female Toilet

We suggest repairs of the female toilet. It came to our attention that some girls had been injured by broken tiles.

### 2. Screens on Windows and Doors of the Children's Rooms

This will keep mosquitoes and flies out of children's rooms so that children can sleep well. We have been told that in some seasons, mosquitoes prevent children from sleeping. Setting of screens will stop insects from entering, allow air circulation and reduce the danger of broken window glass.

### 3. Repair of Roofs

There is evidence of rain damage on the underside of the roofs of the children's rooms. We think that renovation is necessary.

## Interview Project Report

Over the years, participants in International Working Camp have noticed and reported a steady improvement in the facilities of the children's homes and their general lifestyle. To compliment these ongoing improvements, we began to collect information that we hope will be useful to promote the emotional care of children.

Information was collected through informal interviews with the children at the Blimbingsari Children's home conducted by students of Dhyana Pura University between August 28<sup>th</sup> and

September 2<sup>nd</sup> 2017. A total of 31 students were interviewed, with an age range of 6-13 years.

Care was taken to ensure that the interviews did not cause emotional stress to the children. Also, children were instructed to respond only to questions that they could answer comfortably.

The questions were divided into four sections. Firstly the students were asked about their past experiences, their present lifestyle, and their dreams for the future. Finally, they were asked to give their impressions of their experience of the International Working Camp.

### Past

In general, the children felt happy when the first came to the children's home. Some students reported feelings of loneliness and anxiety due to being separated from their families and home towns. Unfortunately, some students reported bullying and communication problems with other children when they first arrived. Most said that they were able to solve these problems by themselves or with the help of the staff.

### Present

The majority of students are happy with daily life. Most reported that playing sports was their favourite activity. Others reported enjoying studying subjects such as English, Japanese and science.

As for their problems, most students reported that they still experienced bullying or fighting with other students. Some also said that they disliked being punished by staff when they did not finish their assigned chores.

### Future

Children are optimistic about their future and have a lot of dreams. A number of children said that they would like to work in tourism or private sector jobs. Other children aspired to be public servants such as teachers, police or soldiers. There was also a student who would like to work for the church and another that would like to become an artist.

Students also hope to travel to foreign countries and other places in Indonesia such as Papua and Jakarta. Furthermore, after completing their education, most children would like to return to their hometown to live and raise harmonious families.

Regarding the IWC program and visit from St. Andrew's University and Dhyana Pura University students, the children all reported an overwhelmingly positive experience. They said that it was very exciting to have guests and they enjoyed playing with the students and learning Japanese from them. They also enjoyed the cultural exchange night that included singing and dancing performances very much. They were also happy to have the opportunity to try Japanese food.

This was the first time that such a project has been attempted in the history of the IWC. We hope to improve our questions and data collection process to continue this project in years to come.

### Conclusion

The 31<sup>st</sup> International Work Camp was created with the cooperation of the Widhya Asih Foundation and the Bali Protestant Church. This has been a great learning experience for the students who were able to participate in the program. We also believe that we have been able to make a positive contribution to the local communities that we visited.

We are very grateful for the opportunities that this program continues to provide and sincerely hope for its continuation in the future.

St. Andrew's University and Dhyana Pura University  
September 5<sup>th</sup>, 2017

## インドネシア語 セレクト集

### ①気持ちの表現

パナス・・・暑い	サキ・・・・・・・・・・痛い
チャペ・・・疲れた	マル・・・・・・・・・・恥ずかしい
エナツ・・・美味しい	バイク・・・・・・・・・・良い
バダース・・・素晴らしい	スナング・・・・・・・・・・嬉しい
タク・・・・・・・・・・怖い	カゲツ・・・・・・・・・・驚いた
カシハン・・・可哀想	チャンティック・・・可愛い
クレン・・・・・・・・・・イケメン	デイギン・・・・・・・・・・涼しい

### ②役に立つ挨拶集

- スラマ➡パギ・・・・・・・・おはよう  
➡シアン・・・・・・・・こんにちは  
➡ソレ・・・・・・・・こんにちは&こんばんは  
➡マラン・・・・・・・・こんばんは

慣れてくると、スラマ無しにするとかっこいい！

- トゥリマカシ・・・・・・・・ありがとう      ヤー・・・・・・・・・・はい  
マーフ・・・・・・・・・・ごめんなさい      アパカバアル・・・元気ですか？  
ティダアパアパ・・・大丈夫ですよ

### ③よく使った単語

#### ●話すとき

- ナマ サヤ ○○○・・・・・・・・私の名前は、○○○です  
トロンパンギルカン ○○○・・・私のことは○○○と呼んで  
ください。  
シアパ ナマム・・・・・・・・あなたの名前は？



●ご飯の時

- ミーゴレン・・・・・・・・焼きそばのような食べ物の事
- ピサンゴレン・・・・・・・・バナナを揚げた食べ物
- ナシゴレン・・・・・・・・焼き飯のような食べ物
- サンバル・・・・・・・・辛いソース（日本でいう醤油の感覚）
- エナツ・・・・・・・・美味しい
- ティダックエナツ・・・・・・・・まずい（使えないですけど…）
- アイル・・・・・・・・水



●ワークの時

- エンベレ・・・・・・・・バケツ
- ブラッ・・・・・・・・重い
- パナス・・・・・・・・暑い
- チャペ・・・・・・・・疲れた
- マイムラリー・・・・・・・・一緒に散歩しよう
- バイバイサジャ・・・・・・・・元気です



## 参加学生のレポート

### 国際ボランティアでの体験

社会学部 4回生 馮 ブンテイ



#### はじめに

IWCに参加したきっかけは、大学の時に海外の文化や人たちに触れ合いたいと思っていました。その時にインドネシアの国際ボランティアという活動を知り、応募してみようと思いました。海外でボランティアをすることは結構私には新鮮で、面白い、体験です。それと、日本や先進国とは違い、これから発展して行く国であるインドネシアは、どんな国か、また宗教について、インドネシアという国にけっこう興味がありました。

#### インドネシアへ行く前に

インドネシアでやる活動や言葉などを学ぶための事前研修と事前準備はとても大変でした。毎週金曜日の5限目に集まり、文化や言語を教えてもらいました。特にインドネシアは宗教の国ですから、例えば、左手は汚いと思っているから、食事の時や握手の時など左手を使ってはいけません。こういうことはほんとに日本の文化とは違います。

健康管理では保健室の先生からインドネシアはあんまりきれいな国ではないという注意がありました。行く前に病気になるように予防接種をしました。インドネシアでの生活の話を聞いて、

ちょっと不安になり、18日間生活して行けるのか心配しました。病気になるのか不安でした。

#### 実際のインドネシア

関西空港からデンパサール空港まで、飛行機に乗る時間が約8時間、着いて窓から外の景色を見たら、外国に来たと感じました。空港から出て来て、車でホテルに向っている時に、道で車よりバイクが多くて、バイクで2人同時に乗っていたり、早いスピードで運転したり、車との距離はほとんどなく、周りの人たちを見るとけっこう危ない感じでした。意外に日本の車もけっこう多くて、サークルKのコンビニもいっぱいありましたが、店や建物前にインドネシアの国旗のようなもの飾られていました。インドネシアの人たちは自分の国が好きだと思いました。

夕方にホテルに着きました。ホテルでごはんを食べた後に現地のインドネシアの学生とお互いに自己紹介をしました。日本人の学生はインドネシア語で自分の名前を言ったり、インドネシアの学生は日本語で自分の名前を言ったりしました。その時にはじめて国際交流したと感じました。知らないインドネシアの学生とも同じテーブルで食事することが珍しくて、面白いです。ほとんど日本語は通じないから、お互いに単語くらいの英語を喋って、意外に楽しかったです。

次の日は、ブリビンサリ村に向かいました。ホテルから4時間くらいかかりました。高いビルがなく、その代わりに低い建物が多く見られました。途中でトイレ休憩がありました。一般的なインドネシアのトイレは、トイレトペーパーがなく、横に水桶があって、その水を使って流します。この時が、はじめてのカルチャーショックでした。ブリビンサリ村に着くと、アスラマの子どもたちの歓迎を受けました。子どもたちはけっこう年齢が下で、とても可愛くて、みんなすぐ仲良しになっていました。その後はホームステイに行きました。同じホームステイの人はインドネシア人一人と日

本人一人でした。ホームステイに行く前に、家族や部屋がどんなものなのか心配しました。実際に行ってみると、けっこうきれいな家でした。庭があって、犬が3匹いて、5人家族でした。ホームステイ先のイブは少し英語を話せます。最初はインドネシア語のあいさつをしてから、ほとんど英語で喋ったりしました。通じない時に一緒にいったインドネシアの学生にお願いして、通訳してもらいました。イブはとてもやさしい人でした、いつもお菓子を持って来たり、洗濯物を干すために場所を移動したりします。

ホームステイ先ではじめて水でシャワーをしました。最初入る時に、想像できないつめたさで、毎日水でシャワーしたら絶対風邪を引くと思いました。寒い寒いって言いながら水シャワーを終わりました。髪の毛を乾かす時、ドライヤーを使ったら、家の電気を全部消しちゃいました。電気が足りないから、ドライヤーは使えなくなりました。国が違いますから、生活習慣も全然違います。ブリビンサリ村の人たちはけっこう早起きしたり、早寝したりします。シャワーも夕方にしている人が多く、ドライヤーを使う習慣がなくて、自然に乾かします。人と同じでいろいろな文化や生活習慣があり、視野が広くなりました。

ブリビンサリ村の道は車が一台通れるくらいの広さで、周りにけっこう木があり、グリーンイメージがつよい自然豊かな村でした。歩いてみると、現地の家は、だいたい犬や猫を飼っていて、近所に売店があり、そこでインドネシアのお菓子を買ったりしました。すれ違う人みんな笑顔で簡単なインドネシア語のあいさつをしたりします。とても嬉しかったです。この親切な感じは日本にはないと思います。

インドネシアの物価は日本より安いです。ひとつのお菓子はだいたい5円や10円で、ジュースは50円で売っています。日本人の給料は20万円として、インドネシアは2万円くらいです。

3週間いろいろな活動をしました。

## 日本語プロジェクト

日本語の授業では中学生、高校生と看護学生を教えました。現地の学生と日本語で簡単なゲームをやりました。行なったメンバーはインドネシアの学生2人と日本人の学生4人でした。日本の文化や言葉を知るために、あいいうえお順の発音練習をしたり、自分の名札を作ったりしました。現地の学生はけっこう積極的で、日本語に興味を持っていて、みんな盛り上がりました。授業が始まる前に、この日本語プロジェクトはスムーズに行けるのか心配していましたが、でも意外に、みんな興味があり、行きました。最後に記念写真を撮ったり、SNSを交換したりして、けっこう仲良しになりました。

## ワーク

毎回ワークの現場に行く交通手段は大きなトラックで、23人プラス先生たちはトラックに乗り込み走り出します。初めて乗った時にみんな興奮して、写真を撮りっぱい撮りました。ワークの内容はだいたい土をバケツに入れて、運びます。アスラマの子どもたちも一緒に参加して手伝ってくれて、すごく効率が良かったです。隣は知らないアスラマの子どもでも話したり、笑ったりして楽しかったです。すれ違う子どもたちもみんな笑顔で目を合わせてくれて、ワークの疲れを忘れました。休憩する時にアスラマの子どもたちと写真を撮ったりして、あまり言葉通じないのですが、みんなbody languageをやったりして、意外にわかってくれました。

## 交流会

交流会もすごく楽しかったです。子どもたちのダンスや歌などとても可愛くて、上手でした。向こうの子どもたちはドレスを着て、化粧をして、本気でやっています。私たちも日本ではやっているダンスをしたりしました。最後に子どもたちと一緒にマイム・マイムダンスをしてとても盛り上がりました、交流会の雰囲気はとても良かったです。その時に、子どもたちからインドネシアのきれいな花を、耳にかけてもらいました。

## 日本食パーティー

食事文化の交流をするため、日本食パーティーをしました。私たちは子どもたち、お世話になっているホームステイの方や関係者にお礼の気持ちを込めて炊き込みごはんや豚汁、わらび餅を作りました。だいたい120人分を作ることには私たちはチャレンジすることになりました。3つの班に分けて、野菜を切ったり、お肉を切ったりして、けっこう大変でした。4時間くらいかけて、やっとできました。6時に子どもたちと、それぞれのホームステイの方も来て、みんな笑顔で食事をしている姿を見ると日本食パーティーは成功したのだと感じました。

## まとめ

IWC31回目に参加して良かったと思いました。このプログラムでインドネシアにいる18日間はとても充実して、毎日違う体験ができ、素晴らしいと思いました。違う国の人たちや文化に触れ合うことによって、自分の視野が広くなり、客観的に物事を考えることができます。とても有意義な夏休みを過ごしました。

初めて長い期間の団体行動をして、やはり周りの人たちの意見を聞いたり、自分の意見を出したりすることが大切だと思いました。それと現地の人たちの優しさ、また生活を楽しんでいることが素晴らしいと思います。その学んだことを将来に活かして、積極的に生活していきます。

## 国際交流を通して

国際教養学部 国際教養学科 4回生 小谷 明香



## 一章「私が行く前に自分が思い描いていたこと」

私は子どもが大好きで、子ども達と触れ合いたい、そして笑顔にしたい。そしてこの大学生活で自ら何か始めることもなく、ただ楽しむだけの自分、そんな自分を変えたい。初めはそんな思いでIWCへの参加を決めました。何度も海外に行った経験もあるし、ボランティアで子ども達と触れ合う機会も多かった私は、正直あまり不安などはなく、自信満々でした。出発までは約4ヶ月間、現地での注意事項やミーティング、インドネシア語の授業や合宿などの事前学習がありました。いざ事前学習が始まると、あんなに自信に満ち溢れていた気持ちがいつの間にか不安へと変わっていました。まずインドネシアでは日本では珍しい病気になる事。また食事やコミュニケーション、そして言葉の繋がらない場所で私達が本当に子ども達を楽しませてあげられるのか、日本語の授業は盛り上がるだろうか。イベントや企画を考えると不安は大きくなっていました。長いように感じていた出発までの4ヶ月間は、本当にあっという間でまだまだ準備期間が必要だと感じるようになっていました。

## 二章「実際のインドネシアの印象」

少し不安が残ったまま迎えた8月21日。海外から帰国したばかりの小池先生やインドネシア語を教えて頂いた由比先生、そしてずっと私達を支え



てくれていた馬詰さんが朝早くから私達の見送りに来てくれていました。皆が私達の成功を祈ってくれていると思うと、必ず成功させ、皆揃って元気に帰国しようと自分に喝が入りました。先生達から見送られ関西国際空港を出発し、無事にデンパサール空港に到着しました。空港では仕事なのに皆携帯を触ったり、日本と違って自由な環境に驚きました。空港からホテルまではバス移動で、バスからはデンパサールの街が目飛び込んできました。車よりも多いバイクの数、空にはタコがたくさん飛んでおり、初めて訪れたインドネシアに興味津々でした。ホテルに到着し、インドネシア学生と初対面しました。自己紹介をし、一緒に夜ご飯を食べました。初めはなかなか言葉が通じませんでしたが、ジェスチャーや英語を使っていくうちにフレンドリーなインドネシアの学生とはすぐに仲良くなることができました。ホテルのシャワーは水しか出ず、部屋には虫がたくさん居て日本のホテルとの違いを痛感しました。1日目はどこか旅行気分があるまま1日が終了しました。2日目、8月22日。いよいよプリンビンサリ村に出発する日が来ました。デンパサールの街からだんだんお店が少なくなっていく、山道に入っていくのが分かりました。途中でトイレ休憩を挟みましたが、ここでのトイレが衝撃的でした。トイレトペーパーはもちろん無く、トイレを流す水は、便器の横に置いてある大きなバケツから桶ですくうようになっていました。虫もたくさん居て電気も無く、私は少しカルチャーショックを受けたのを覚えています。そこから二時間ほど山道を走りプリンビンサリ村に無事到着しました。その時車の窓から外を見た時の光景が頭から離れません。子ども達が本当にキラキラした目で満面の笑みで出迎えてくれていました。バスを降りると1人ずつ歓迎の挨拶をしてくれました。本当に楽しみに待っていてくれたんだと感じ、いよいよ始まるんだと実感が湧いた瞬間でした。インドネシアでの生活は想像していたより日本と全く違うものでした。シャワーからお湯が出ない事や洗濯物は手洗いで絞って干す事。ハエが自分に付いているのは当たり前で、犬やニワトリ、牛が放し飼

いで村中にたくさん居ること。衝撃的で戸惑いもありました。しかしプリンビンサリの村を歩けば会う人、会う人が笑顔で話しかけてくれました。ホームステイ先のホストファミリーは本当に素敵な家族でした。初対面の私を笑顔で迎えてくれ、言葉もほぼ伝わらないのに英語でたくさん話をしてくれました。帰宅するといつも笑顔で名前を呼んでくれて、その笑顔を見るとほんとに安心しました。そして何より本当に親切でした。洗濯物は帰宅するといつも日の当たる場所に位置を変えてくれたり、毎日ベッドや部屋が綺麗になっていました。思いやりがあふれていて本当に自分の家のように感じていました。そしていつの間にかマンディー前の家族団欒の時間は私の1日の楽しみになっていました。プリンビンサリ村の暖かい家族を感じる事が出来、本当に光栄でした。プリンビンサリ村の人達はみんな凄くフレンドリーで毎日が楽しそうでした。日本で街を歩いていて知らない人に挨拶する人はほぼ居ません。そして毎日つまらなさそうに歩いている人をよく見ますが、プリンビンサリ村の人達はハッピーに溢れていました。私は暖かく優しいプリンビンサリ村の人々にどんどん惹かれていきました。

### 三章「プログラム期間中に印象に残っているエピソード」

私がIWCの活動の中で最も印象的だった出来事はインドネシア学生とルームシェアした事です。私のルームメイトはアディと言います。アディは少し人見知りの女の子でした。初め同じ部屋だと決まった時は正直戸惑いました。これから毎日同じ部屋で上手くコミュニケーションを取る事が出来るのか、文化の違いで日本では当たり前事がインドネシアでは失礼な事ではないのか、色々不安で、正直日本人同士でルームシェアしているメンバーが羨ましいと思っていました。ホームステイが始まると不安は的中し、会話も全く続かず沈黙だらけ。向こうも私と同じ部屋は息苦しくて嫌なんじゃないかとネガティブな気持ちにもなりました。本当は仲良くなりたいけど、どうしていいか分からないもどかしい気持ちでいっぱいでした。

た。ある夜アディの携帯の待ち受け画面が日本人アーティストだと気付きました。好きなの？って話しかけると笑顔で本当に大好きで、日本に行くのが夢です。その為に日本語を勉強しています。という返事が返ってきました。そこで私は、自分の携帯に入っていた日本の色々な場所の写真を見せました。アディは今まで見たことないキラキラした目でここは何？なんていう場所？とか、かわいい!!とか日本語で反応してくれました。その日からもっとアディの事を知りたいと思うようになりました。言葉は通じなくても伝えたいと思う気持ちがあれば、ジェスチャーや、歌、英語を使い、言葉の壁を乗り越える事が出来るということを学びました。それから私達はお互い家族の事や友達の事。日本やインドネシアで流行っている歌やテレビの情報、色々な話をするようになりました。アディと話をして一番驚いたのは、本当に勉強熱心で一生懸命だということです。私はインドネジ語を教えてもらっても、1日経てば忘れてしまいますが、アディは私が日本語を教えるとすぐにメモを取り出して、どういう時に使うのか何回も私に尋ねてきました。何故そんなに一生懸命なの？と聞くと私達が日本に留学するにはテストに合格しなければ行けない。そのテストは本当に難しいとアディは答えました。私たち日本人は簡単に留学やボランティア活動に参加することが出来ます。アディはこのIWCは日本に留学するまでの本当に貴重な体験だと言っていました。本当に一生懸命で親切で心優しくて純粋なアディの事がいつの間にか大好きになって、毎晩アディと話しをする時間が楽しみになっていました。

#### 四章「行く前と実際に行ってからの違いから、自分が考えたこと、学んだこと」

IWCのメンバーは年齢がバラバラでした。最年長メンバーとして何かみんなの役に立てればいけないと思いました。しかし私はいつも誰かに引っ張っていてもらう性格でリーダーシップなどといったことがなく、初めは戸惑いました。IWCの1つの目的である自分を変えたいという思いがあり、少しは自分から意見を言うように試みまし

た。自分から行動してみることで誰かが答えてくれたり、自分の意見がみんなに通じたりする喜びを学びました。

#### 五章「今後の人生にどのように生かしていきたいと考えているか」

私はこのIWCの経験を通して、笑顔の大切さと言葉が通じなくても相手の気持ち、優しさが伝わるということ。言葉が通じなくても本当の友情が生まれるということ。相手を思いやることの大切さ、子ども達やインドネシア学生、ホストファミリーやこのIWCに関わってくれた人達からたくさんのことを学びました。また普段当たり前のように暮らしていた日本での生活がどれほど贅沢なものか痛感しました。これも実際に自分が体験しなければ気付くことが出来なかったことです。毎日過ごしているこの日々感謝しなければならない、そして日本の人達に関心があるのか分かってもらいたいと強く願うようになりました。IWCのこの18日間は私の大学生活で一番大きな経験になりました。来年社会人になる私は、この経験を生かして日々感謝することを忘れず、私を受け入れ、支えてくれた人達を忘れず生活していきます。

## インドネシアの文化および生活について

国際教養学部 国際教養学科 4回生 千賀 敦



### 第一章・行く前に、自分が思い描いていたこと

「不安」の文字がインドネシアに行く前に思い描いていた。

私は22年間生きてきてインドネシアに行くまでは海外に行ったことがなかった。世界的にも住みやすく、住み慣れた日本で何不自由なく暮らしてきた。そんな日本から出たことのない自分が抱いていたインドネシアのイメージは「病気にかかりやすいのではないのか」「文化の違いから生じる問題」などそのようなイメージが多く占めていた。

今井先生による事前研修では特に虫に気を付けるようにと念を押すように言われた。現地の蚊はデング熱などあらゆる病原菌を持っているみたいで日本にいる蚊とは違うのである。やはり東南アジアは年中気温が高いため色々な虫が見られるのではないかと、そしてそれらの虫には色々な病気を持っているのではないかと考えていた。

他にインドネシアの文化の違いに対しても不安があった。たとえば現地では左手は不浄の手といわれ、その手で握手をしたり小銭を渡すという行為は相手に対する侮辱行為であることだ。何気なく左手を使っている私は現地に行った時には、つい左手で物事をしてしまうのではないのかと思った。それ以外にもトイレは水洗でなく紙を使わなかったりと不安があった。だが今回のプログラムの主旨でもある異文化理解という観点からは絶好のチャンスではないかと思った。なぜなら、もし

日本でインドネシアの文化を自身の体で理解しようとしても精々インドネシア料理を食べることぐらいしできないからだ。日本で不浄である左手を使わなかったり水洗ではないトイレを使っても私は意味がないと思う。現地に行き現地の文化に従い、触れ合うことこそが異文化理解であるからだ。故に私はインドネシアの文化理解には絶好のチャンスだと感じた。

初海外がインドネシアの私にとって不安もあったが、とても刺激的で良い経験になるだろうと渡航前はそう思い描いていた。

### 第二章・実際のインドネシア（バリ島）の印象

日本では真夏の最中である8月21日からインドネシアワークキャンプが始まった。約7時間のフライトののちにデンパサル空港に到着した。空港についた時点で日本人は私たちのメンバーだけしかなく周りは外国人ばかりで海外に来たのだと実感が湧いた。まず着いて先に思ったことが日本とほとんど気温が一緒だったことだ。日本よりうんと赤道に近いが気温が一緒なのは驚いた。プリンビンサリ村では夜、早朝に行動することが多かったが特に早朝は半袖の上から何か羽織らないと寒くて風邪を引きそうになるぐらい気温が低かった。昼と夜・早朝とでここまで寒暖差があるのは日本ではそう味わえないだろう。

インドネシアの中でもバリ島は多宗教の島であって面白い。私たちがワークをしたプリンビンサリ村はプロテスタントの村で、各々の家の玄関には十字架が掲げられていた。この村を一步出るとヒンドゥーの街になったりしてその街並みの変化を見ていて楽しかった。

だが、私が特に思ったのはインドネシアはやはり街並みや家などを見ても先進国とは言えない状況だった事だ。なぜ発展しないのかと自分なりに考察してみたが、それはインドネシアの文化にあると感じた。インドネシアの家庭では主人が絶対的であり妻は主人についていだけという服従文化があるからだ。それは家庭だけではなく私たちが訪れたプリンビンサリ村の児童養護施設でも軍隊的などころがみられた。このようなことか

ら創造性・進歩を奪うことに繋がっているのではないのか。故にそれらが国自体の発展に繋がっていないのだと感じた。

### 第三章・プログラム中に印象に残っているエピソード

プログラム中に共に行動した現地の大学であるディアナブラ大学の学生との関わりである。ディアナブラ大学の学生と一緒に現地の看護学校や小学校に行き日本語の授業を行った。ワークキャンプ2日目にはディアナブラの学生も含め日本語プログラムのメンバー別に分かれて打ち合わせなどしていた。だが、自分のぎこちない英語のせいで最初はうまく伝えることができなかった。それからうまく伝えられなかった時にはボディラングイジを駆使したりプログラム以外の時も積極的に自ら話しかけたりもした。その甲斐あってか授業自体がより良い完成度へと達した。3回目の日本語プログラムの頃にはほぼ完璧な授業として成し遂げた。自分たちは日本語で説明し、ディアナブラの学生が通訳をするという流れだった。私はタイムマネジメントを意識し授業自体の進行役として進めた。他の日本人メンバーもそれぞれ自ら率先してその場で最適な判断をし、授業を成功へと導いてくれた。頑張ったのは日本人の私たちだけでない。ディアナブラの学生が生徒たちに休憩時間は必要かなどと聞いてくれて進めやすいように配慮してくれた。彼らの力が無くては達成できてなかっただろう。最初、言葉はほとんど分からずインドネシアの子どもたちに日本語なんて教える事ができるものだろうかと思っていた。だからこそプログラム終了後、得た経験はかけがえないもので大きな達成感を得ることができたのだと思う。

### 第四章・行く前と実際に行ってからの違いから、自分が考えたこと、学んだこと

私はインドネシアに行く前、左手は不浄の手とされることから物事は右手で済まさないといけな、と自分に言い聞かせていた。ワークキャンプ中は気を付けてなるべく左手を使わないようにすると心掛けていた。現地に行き最初は気を付け

て右手で子どもを触るようにしていた。だが、時間がたつにつれインドネシアの生活にも慣れてきたせいかわれど左手で触ってしまった。事前研修では左手で神が宿るとされている子どもの頭をなでると最大の侮辱行為となり、その子どもの親に殺されても仕方ないと先生に言われた。そんな最大の侮辱行為を行ったのにも関わらず子どもたちやその親も何も起こらず笑顔で受け入れてくれた。

私が文化の違いから学んだこととしてはバリの人たちにとって異なる文化である私たちを快く受容してくれる優しい国民性であることだ。文化の話とは少し異なるが、日本語プログラムで現地の学校を訪れた際には私達日本人の周りに人だかりができるぐらい現地の学生たちで溢れかえっていた。海外からやってきた見知らぬ外国人である私たちにバリの名所や食べ物などバリのいいところを彼らはたくさん教えてくれた。それは私達日本人を快く受け入れることができる優しい心を持っているからこそその行為だろう。

私は同じ状況を日本でそっくりそのままおこなうと日本の学生たちは人だかりができるほど外国人を受け入れることができるかと思うと疑問だ。日本はかつて鎖国していたせいもあってか現代でも外部からやってきたモノを排除しようとする傾向にある。この点が日本の国際化の発展、異文化理解に至らない所以だと私はインドネシアに行ってから学ばされた点である。日本は先進国であるにもかかわらず、異文化を受け入れる態勢がまだなっていないと思う。例えば、イスラム教徒一日5回聖地であるメッカの方角に向かってお祈りをしなければならぬ。たとえ授業中であってもその時間になれば打ち切ってお祈りをしなければならぬ。そのお祈りをする場所が日本にはほとんどない。日本で旅行中にお祈りの時間になっても歩行者だけの日本では地面に座ってゆっくりお祈りができないのだ。昔にテレビでイスラム教徒のためにお祈りをする為の部屋を設置している施設があるというのが報道されていた。このような施設を設置することは異文化理解への大きな第一歩といえるだろう。私たちの身近なところという

と小学校のクラスのような中規模の一つの共同体の中に一人だけ外国人がいれば、その一人を排除しようとしているのがみられる。それがイジメなどに発展するのだろう。

そのような異文化理解の点に関してはインドネシアから学ばなければならないのが今の日本の現状なのだと私は考えた。

## 第五章・今後の人生にどのように生かしていきたいと考えているか

はじめに私は人生経験の糧としてとても大きなものを得ることができた。そして、私に身についた経験は単に得ただけでなく学んだということだ。特に初めての海外というわけでもあって刺激的だったというのもあるが、文化・価値観など学ぶことができた。日本では到底ないような生活様式で2週間滞在したこと。食べたことのない料理。インドネシアの人たちと色々なコミュニケーションを取ったこと。これは今後、より国際社会化する日本、世界で生活するうえで特に役に立つ経験だといえるだろう。また、私は来年企業に就職し外国の人と多く関われる仕事に就くことになる。その時にはこのワークキャンプ中の日本語プログラムで培った「言葉が通じなくても諦めず伝えようとする努力」を生かし今まで以上に海外の人々と関わろうと思っている。そのほかにインドネシアの人々から学んだ「異文化を受け入れる優しさ」を生かしこれから自分と関わる外国の人たちのことをより理解しようと思った。

現地で関わった子どもたち、共に努力しあったディアナブラ大学の学生たちの笑顔は私は忘れることはないだろう。初めて行く海外がボランティアという形でインドネシアだったことは私にとって今後、かけがえのない経験だといえるだろう。

## IWCでの経験

経済学部 3回生 西脇 良



私がこの国際ワークキャンプ (IWC31) に参加した理由がいくつかあります。私は子どもが大好きなので、子どもたちと遊んだり、話したりしたいということ。インドネシアの文化について知りたい、ボランティア活動をしたい、日本語の授業で日本語を教えたい、学生のうちにしかできない事をしたい、海外を通じて自分の視野を広げたいなどという気持ちがきっかけです。特にやりたかった事は、現地の学生達に日本語を教えることでした。日本では日本人以外に日本語を教えるという機会が減多にないので、日本人以外に日本語を教えるのはとてもいい経験になると思い、4つのグループがある中でも日本語プログラムに所属し、毎週金曜日の5限目の事前研修や、講義が終わった後に集まったりして、いろんな事を考え、現地でのプログラムに備えて準備をした。

日本から飛行機で約6時間～7時間でバリ島に着いた。バリ島に着いたのが夕方だったのでホテルに向かうためにバスに乗って移動した。移動してる間にまず最初に印象に残っているのがバイクの多さだった。バリ島では移動手段は車とバイクがほとんどで、日本みたいに自転車や歩いてる人を見かけることはなかった。ホテルに着き、これから18日間一緒に行動するインドネシア学生と初めての顔合わせだった。インドネシア学生は優しく笑顔で日本人学生に接してくれた。インドネ

シア学生とコミュニケーションを取るのには難しいと思っていたが、インドネシア学生は母国語と英語の2つの言語が話せるし、さらに日本語も少しだけできるような学生もいたので、ジェスチャーと少ししか喋れない英語で意外とコミュニケーションが取れた事が印象に残っている。1日目はホテルで泊まり、2日目の朝はミーティングで昼からプリンビンサリ村に向けてバスに乗って出発した。ホテルから離れて行くにつれてだんだん景色が変わっていき、ホテル周辺ではバイクや車で賑わっていたが、その賑やかさも無くなり、周りを見ればポツポツ家があって、他は畑や田んぼがあって、周りは自然でいっぱいに囲まれていた。ホテルから約3時間でプリンビンサリ村に着いた。そして、アスラマに着いた時、大勢の子どもたちが笑顔で出迎えてくれた。バスを降りると子どもたちが一斉に私たちに寄ってきて、ハイタッチや握手などをしてくれた。私はアスラマの子どもたちは親元から離れて生活していると聞いていたので、暗い顔や寂しい顔をしているイメージがあったが、こんなに暖かい歓迎をしてくれると思っていたのでびっくりした。ホームステイ先に着くとパパとイブが笑顔で迎えてくれた。村を歩いていると、村の人とすれ違う度に笑顔で挨拶してくれたり、話しかけてくれたりした。バリ島の人ってこんなにも心が暖かく、人柄がすごくいいんだという印象が強く残っている。私はこの時、日本人はもしや、すごく冷たい人間なのではないかと思うぐらいだったので、よっぽどバリの人の印象が強かったのだろう。しかし、村に着いたその日の夜、アスラマからホームステイ先に帰る途中、犬にもものすごく吠えられた。この時、私は事前研修で狂犬病についての話を思い出した。犬に噛まれると狂犬病になる可能性が高いと言われていて、村での帰り道、ずっと私の後をつけては吠え続けていて、ものすごく怖かったのを覚えている。日本では、犬にこんなにも吠えられる事は無かったし、襲われそうという感覚はなかった。しかし、バリ島では日本と違って番犬として家の周りで飼っているため、襲われてもおかしくなかった。バリ島に着く前は犬なんかその辺

にいる程度だと思っていたが、実際に吠えられるとこんなにも怖いのかというのを感じた。

印象に残っているエピソードは、アスラマの子どもたちとの交流についてだ。前の文章にも書いたが、私たちがアスラマに着いた時に、子どもたちが一斉に笑顔で迎えて、バスから降りると同時に満面の笑みで私たちに寄ってきて、遊ぼうと言わんばかりの顔で話しかけてくれた。しかし、私はあまりその呼びかけに笑顔で答えることができなかった。理由は、想像以上の暖かい歓迎で少し戸惑っていたからだ。子どもたちが元気で優しく接してくれたのにも関わらずあまりそれに答えられなかったのは申し訳ない気持ちでいっぱいだ。村に着いた日はあまり子どもたちと関わる事ができずに終わった。次の日、なんとか子どもたちと打ち解けようと思っていた時、1人で遊んでいる子どもを見かけた。その子どもはまだ3歳4歳くらいの子だ。私はその子と打ち解けようと喋りかけに行ったが、なにも返事がなく、そのままそっぽを向かれて逃げるかのようにどこかへ去ってしまった。恐らく人見知りなのだろう。私はその子をどうにかして心を開いてくれるように、その子を見かける度に話しかけに行ったが、なかなか心を開いてくれず、そっぽを向かれるばかりだった。しかし、ある日、私たちがアスラマの子どもたちのために持ってきたボールを使って子どもたちと遊んでいた時、その子がボールをじーっと見つめていた。私はボールを持ってその子に渡すと、ボールを投げたり、蹴ったりして遊んでいた。私はその子と一緒に投げ合ったり、サッカーのパスをするみたいにボールを蹴って一緒に遊んだ。普段はつまらなさそうな顔をしていたが、ボールで遊んでいる時は少し表情が和んだ感じがした。しかし、ボールを取ってしまうと、また心を閉じたかのようになどどこかへ行ってしまった。こんな感じが1週間ぐらい続いていたが、ある日から突然見かけなくなってしまう。私はどこへ行ったのだろうか？と疑問に思い、施設の人に聞こうと思ったが、私はその子の名前を知らなかったため、聞こうにも聞けず、心も開けられずにそのまま村を離れる日

になってしまった。私は村での最初の1週間はその子にずっと話しかけに行っていたため、他の(施設)の子ども達とは全然喋っておらず、全く打ち解けていなかった。ところが、ある子どものおかげで打ち解けるようになった。その子とは、アスラマの館長さんの娘さんであるナディンちゃんだ。ナディンちゃんは生まれてまだ10ヶ月の赤ちゃんだ。私は赤ちゃんを見るとどうしても抱っこしたくなる癖があって、その時をついつい抱っこしに行ってしまった。最初施設の子もたちが抱っこしていて、そこに私が抱っこしに行くと、やはり最初は嫌がられていたが、子どもたちが私に抱っこしてあげてよという感じできて、私もナディンを抱っこすることができた。すると、抱っこ心地良さが気に入ったのか、他の施設の子もたちが抱っこしようとする、私から離れたくないという感じで嫌がっていた。その時に子どもたちから、「ナディンはあなたの事が好きだよ」と言われ、そこからだんだん子どもたちとの会話が進み、施設に来て1週間経って初めて名前を聞かれ、やっと子どもたちが私の名前を呼ぶようになり、打ち解けていった。私はこのプログラムに参加した学生よりも、かなり遅れて子どもたちと打ち解けたが、遅れた分村で残された時間をできるだけ子どもたちと交流するようにした。それからよく昼からのミーティング終わりから夕食までの間に子どもたちと交流するようになり、手を繋いでジャンプしたり、両手を掴んでグルグル回転したり、一緒に走って競争や追いかけてこしたり、アルプス一万尺をしたりしてよく遊んだ。だんだんみんな私の名前を覚えてくれるようになり、中にはずっとひっついてくる子どももいた。私はこの時、もっと早くから子どもたちと打ち解けるべきだったなと思った。子どもたちの遊んでる時の笑顔が今でも覚えている。そして、ついに村を離れる時、子どもたちは泣いている子もいれば、泣くのを我慢してる子、笑顔で挨拶してくれる子など、様々な表情で私たちと別れの挨拶をした。これが私のプログラム期間中に印象に残っている子どもたちとの交流だ。

行く前と実際に行ってからの違いから自分が考えたこと、学んだ事はいっぱいある。行く前までは、子ども達はどんな生活を送っているのだろうか?と疑問を持ちながらアスラマに行くことになった。子ども達の生活はどんな感じなのかと思い、毎日観察してみた。同じ服を毎日着ている子、服が破れながら着ている子、サンダルが壊れながら履いてる子、サンダルや靴が無くて裸足で歩いている子など、直感で感じた事は、私たちとは違ってかなり貧しい生活を送っていると思った。私の中では、服は毎日着替えるということはさすがにあるだろうと思っていたが、実際にはそうではなかった。私はこの時、自分たちが当たり前だと思っていた生活は、かなり裕福な生活だったんだと思った。毎日着替える服はあり、破れた服は捨てて新しい服を買い、靴やサンダルもある。しかし、アスラマの子ども達は私たちが簡単に出来る事ができないのだ。私たちの生活はアスラマの子ども達にとっては、夢のような生活に感じるだろう。子ども達を見ていると、自分は一体今まで何をしていたのだろうと思った。遊ぶ事にお金を使い、ご飯に行く事にお金を使い、無駄遣いが多い生活を送っていた。こんな無駄遣いをするのなら、施設のためや、子ども達のためにお金を使う方がよほどいいと思った。そして、今送っている生活が当たり前と思わず、親と一緒に暮らせてる事、ご飯が美味しく食べれる事などに、日々感謝しなければならなかった。

ワークキャンプの経験を通じて、今後の人生では、これから日本で自分たちが出来ることは何かあるのだろうかと考え、それを考えた上で行動していくことを目標にし、将来に繋げていきたいと思う。また、可能であれば、アスラマの子ども達を社会に出るまで見届けたい、子ども達のために何か出来る事があればまた現地でワークをやりたいとも思っているの、英語やインドネシア語を勉強して、現地で住んでみるか、また来年のワークキャンプに参加してみようとも思った。

## インドネシアでの経験

国際教養学部 3 回生 川添 晴人



テーマ：国際交流

### 第1章

インドネシアに行く前にしてみたいと思い描いていたことは、アスラマの子どもたちとの交流だった。事前研修で、アスラマには広いグラウンドやバスケットコート、サッカーゴールがあるという話を聞いていたので、サッカーボール、バスケットボールや鬼ごっこという主にスポーツを一緒にしたいと考えていた。スポーツは名前を呼んだり、掛け声をかけたりでき仲良くなれるきっかけを作ることができ、インドネシア語がわからなくとも会話が要らず楽しめるだろうと考えていたからだ。

経験したいと思っていたことは特になく、経験したいことというよりも確かめたかったことがあった。それは自分がどれだけ早くに異文化に溶け込めるかということだった。私は今年の2月に国際センター主催プログラムの「インド異文化・体験セミナー」に参加した。インドで過ごす日々は、食も環境も日本とはまるで違い、最初の10日間程は「帰りたいたい」という気持ちが強く、インドという異文化に溶け込めずにいた。その反省を踏まえてインドネシアでは早く環境に溶け込めるように努力しようと考えていた。

### 第2章

バリに到着して最初に感じたことは、想像して

いたインドネシアよりもずっと綺麗だったことが印象的だった。それは空港内で感じたのではなく、空港外に出てから感じたことだった。空気も綺麗で道にはごみが落ちていない。空気の匂いも全く気にならず、道路も思っているより混雑していない。ホテルに向かう移動バス車内も綺麗で、匂いも気にならなかった。(インドの移動バス車内は臭く感じた)ホテルまで移動の際バス車内から街並みを眺めていても、壊れた建造物はなく、物乞いや路上で寝ている人はおらず、交通状況もマナーやルールが確立されている印象を受けた。ホテルまではずっと綺麗な街並みが続き、インドネシアの国旗があちこちらいたるところに掲げられ、商店や一般的な家屋にも掲げられ、国民がインドネシアという国家に誇りをもっているような雰囲気であった。日本では国旗をあまり見る機会はない。

またご飯がとても美味しく毎日お腹いっぱいになる程食べることができた。ミーゴレン、ナシゴレンはとびっきり美味しくて、苦手な野菜も食べることができた。サンバルは予想以上に辛く1度しか食べなかった。小腹が空いたとき用に日本からスナック菓子を持ち込んでいたが、食べたのはキャンプ後半でスーツケースの容量を仕方なく開ける為であった。

バリでのマンディーは予想以上に凍えたので工夫が必要であった。最初に体を濡らしてしまうととても寒いのでまず第1ステップとして少量の水で頭を濡らし髪の毛を洗う。泡はまだ洗い流さずに次は体を洗う。全身を泡まみれにした後で思っきり水を被る。何度も素早く水を被り、泡を素早く落としてタオルで身を包む。この方法が気持ちよくマンディーを行うコツであった。

そして何よりもバリの印象は、人々がとても暖かかった。インドネシア滞在中、たくさんのインドネシア人と会う機会があった。同じくワークキャンプに参加するインドネシアの学生たち、スイクラマさん、小中高看護学生、アスラマのスタッフの方々や子どもたち、ホームステイでお世話になったステイルマン夫婦、プリンビンサリ村に住むバルマ(ホームステイ先が同じインドネシ



ア学生)の叔父家族、叔母家族そしてパルマが優しかった。

積極的に英語で話しかけてきてくださって、私のことを知ろうとしてくれたし、スイクラマさんや、パルマの叔母家族は日本語で体調やご飯は食べたのかなど聞いてくれた。会話というコミュニケーションを図ってくださり、日本人の私を無視せずに、その場に「存在」しているという実感をすることができた。

### 第3章

私はこのワークキャンプで常に国際交流を実感していたのでテーマを国際交流に決めた。全体を通して第2章でも記述したように現地の人々と触れ合い、会話をするコミュニケーションが多く英語、インドネシア語を話す機会が多かった。インドネシア語はとても覚えやすかった。覚え方は、*lalat* (蠅) という単語は冬に日本でも上映された洋画「ラ・ラ・ランド」とリンクさせて覚えた。もう動くことができないという意味のMAGAR (短縮系らしい) は日本語の「曲がる」というように意味は全く違うが、発音で覚えるようにするとすんなりと言葉を覚えることができた。

またバリにはインドネシア語とバリ語があることに驚いた。先ほどの*lalat*はインドネシア語でバリでは*buyung*と言う。他にも牛で例えると*sapi* (サッピー) はインドネシア語、*sanpi* (サンピー) はバリ語というように発音の違いもあり両方覚えるのはさすがに難しいと感じた。インドネシア語(バリ語)は主にワークやアスラマの子どもたちと連携をしたり、コミュニケーションを図るときに役に立った。

そして英語は主にインドネシア学生とコミュニケーションをとるときに話した。日本語授業の打ち合わせや日常会話では英語だったが、案外通じた(インドネシア学生の理解力が素晴らしかったかもしれないが)不自由なく過ごせた。しかしホームステイ先では話は別だった。私はインドネシア学生のパルマと2人きりでのホームステイであった為、アスラマに向かうあるいはアスラマからホームステイ先へ帰る15分の道のりやホームステ

イ先では全て英語で会話をしなければならなかった。最初の数日は話すことも豊富で15分という道のりも早く感じたが日にちが経過するにつれて苦痛に感じてきた。ホームステイ先でも大まかな話は通じるが、誰がどんなことをしていたのかなど具体的に細かな説明を英語ですることができずもどかしさを感じたし、発音が間違っていて通じずに英語の綴りを書き合ったり、疲労と睡魔で頭が回らずに訳のわからない英語を話していたりした。

だが、英語を話さなければコミュニケーションを図り、意見を言わなければならない状況に置かれたことは新しい刺激でもあった。日本では全く話さなかった英語が案外スラスラと自分の口からだせることに新たな可能性を感じた経験でもあった。

### 第4章

インドネシアの環境には思っていたよりも断然早く溶け込むことができたと思う。食べ物は美味しく空気は綺麗。なによりトイレが臭くなく洋式で座れることに大変喜びを感じた。寝不足に陥ることもなく、私にとってはとても過ごしやすく快適過ぎるほどであった。

子どもたちとスポーツをしたいという願いは、最終的には叶えられなかったと考える。考えられる原因は2つあり、1つ目はお昼の自由時間は各自洗濯やお昼寝時間に充てたのでほとんどの学生は昼食のあとすぐにアスラマから離れた。私自身も午後から始まるワークに備えて昼寝をした。2つ目は子どもたちと私たち学生の食事の時間が交代制であり、子どもたちにはマンディーの時間が設けられていた。食事の時間やマンディーの時間は決められており、ベルが鳴ると子どもたちは足早に移動していった。私はスポーツ大会の日ぐらいしかアスラマの子どもたちとスポーツを楽しんでいないかもしれない。

しかし思いがけないイベントで子どもたちとの交流を果たすことができた。それは今年から始まったとされるインドネシア学生が子どもたちにインタビューを行うというイベントだった。私は

仲の良かったエミとアリス（インドネシア学生）のインタビューに付き添うことができた。インタビューはもちろんインドネシア語（バリ語かもしれない）で行われたが、エミが英語に翻訳してくれたおかげでインタビュー内容を知ることができたし、インタビューシートも英語による記述だったので読み返すこともできた。アスラマに来た理由は、両親の離婚が主な理由として挙がっていたが、子どもたちはアスラマでの生活を楽しんでいようだった。それはアスラマで友達ができただからだという。

印象に強く残ったのが子どもたちの行ってみたい場所や将来の夢だった。行ってみたい場所のほとんどが国内ではなく海外であったことに驚いた。アメリカ、オーストラリア、イタリアなど既に海外に目を向けていたのだった。将来の夢は様々あった。照れくさそうにインタビューに答えるがそれぞれ意思があった。警察官、料理人、数学教員、建築物の設計士が挙がっておりみんなバラバラだった。子どもたちの夢を聞いたことで自分の励みにもなった。真剣に応援したい。インタビューをインドネシア学生と行えたことが貴重な体験だった。

## 第5章

これから日本の生活で英語をもっと使っていきたいと考えている。それは第3章でも記述したように、案外英語が喋れて自分に可能性を見いだせたからだ。今まで中学生から座学で学んできた英語だったが実践的な会話をしたことがなく、英語が果たして身に着いているのかさえ分からなかった。しかし、少しは意味があったように思えた。そこでこれからも英語を意識しながら生活していくべきではないかと考える。SNSに投稿するときでも、授業中メモを取っているときでも常に英語ではどう書くのだろうかと考えながら行動していきたい。そして現在桃山学院大学には、ワークキャンプに数日合流したインドネシア学生が在籍している。彼らと大学でも交流することで更に学習の幅が広がるのではないかと考える。

これからの学習目標は「少しでも英語」と設定

する。社会にでて英語は必須とまでは思わないが身に着いていて損はないはずなので少しでも無理なく英語に触れていきたい。また子どもを応援、支援できるような職に就きたいとも考えた。これからの日本の将来を担う子どもたちは日本の宝である。インドネシアでの経験を活かし就職に活かしたい。

## 人の心にある幸せ

国際教養学部 3回生 寺崎 敦也



### インドネシアの文化および生活について

私はもともと海外に興味があり、外国の環境や文化についても本学で主として学んでいるため偏見はあまり持っていなかったです。しかし、インドネシアに行ったことがあるわけではないため現地では驚くことが多々ありました。以前にも本学のプログラムで他の国に行くことがあり、様々な経験をして、その度に新しい発見や気づきが生まれました。なので、今回も初めての異国の地で何を学び得ることができるのかと楽しみではありましたが、現地の文化に関しては実際に自分自身がその場で体験してみないと理解できることは少ないだろうとは思っていました。生活の面では、もちろん日本のように洗濯機があり温かいシャワーが出るようなところを想像しているわけではありませんでした。事前研修等でインドネシアをよく知る先生方から話を聞く機会も多くあったので、どういった食事でのどのようなマナーを守るべきか、

どんな環境であるのかはイメージがつきやすかったです。そのため文化や生活の面で行く前に思い描いていることに大きな違いはありませんでした。思っていたのとは違うと感じたのは、東南アジアなどには物乞いや物売りが多くいるのかなと思っていましたが、想像している以上に少なく、ホームレスのように外で生活している人たちも見かけることがなかったことです。最初はバリ島と聞いていて、日本人などもよく訪れる観光地なので物乞いがあるのかなと思っていましたが、訪れたのはプリンビンサリ村という観光地とは大きく離れている場所であったので本当に現地の人々ばかりがいてイメージのバリ島とは異なりました。そこで私たちは村の人たちの家に何人かに分かれホームステイをさせていただきました。

実際にインドネシアに着いた時の、最初の印象は思ったよりも暑くないと感じました。飛行機を降り、バスに乗ってホテルに向かって行く途中に交通ルールは特に厳しくないのかなと思いました。バイクは3、4人で乗っていてヘルメットもしていなかったり、クラクションや割り込みも多く、車間距離も狭いので、これはこの国の文化なんだなと思いました。村の方に行くと、交通量もほとんどなく道幅自体が車一台通るのが精一杯な程度でした。すごく静かな所で誰も日本人のように生き急いでいるようには感じられなかったです。買い物をするところは、歩いているとたまに売店のような場所があり、そこに飲み物やお菓子、日用品が置いてありました。私がホームステイしたのは、その村の村長の家でした。これまでにホームステイをしたことがなかったので、最初は言葉も通じなくて大丈夫だろうかと不安と緊張をしていたのですが、実際は優しく迎え入れてくれて、ひとつの部屋を貸してもらうことができました。想像以上に部屋は狭かったのですが、今考えるとキャリーバッグも開くことが難しいところで何日も生活をしたことは人生における濃い経験であったなと思います。村長には毎晩私たちよりも後に寝ているのに、毎朝私たちが起きる頃にはすでに起きていてバナナやコーヒーを用意してくれたことは感謝しています。その奥さんであるイブは毎

日洗濯をしてくれたり見送りをしてくれたりしてホストファミリーの温かさを身をもって感じる事ができました。昼間には家に帰っても、村長はいなくて毎日村の人たちに挨拶に行ったりして大変そうに感じました。村という地域のつながりの強さも、ここでの文化なんだなと思いました。

このプログラム期間中は体を使ったワークや小学校、中学校などでの日本語の授業、アスラムの子どもたちとの運動会等の交流など多くの活動をしました。その中でも私が印象に残っていることは日曜礼拝というアスラムの近くにある教会と少し離れたところにある教会でのプログラム期間中2回行ったお祈りです。最初は何をするとところなのかもよく分からなかったのですが、席が埋まるくらいの人たちが朝から集まり2時間ほどに渡る礼拝を一緒にしました。私は礼拝の間、まず祈ってなんだろうと疑問に感じていました。たしかに、私自身も日本にいるとき神様に願掛けをしたことはありますが、そこまでの深い気持ちではないですし、祈ることで何かが変わるとは思っていません。その願いが実現することも健康なまま無事であることを願うことも確約されているわけではないのに、どうしてここまで必死になって祈ることができるのかと考えたとき宗教の信仰心の差を感じることができました。多くの日本人にとって宗教は生活の中での些細なことであって、信仰するかもしれないも自由で、そこまで重要視していません。しかし、ここの人たちは何よりも優先するものが宗教であり生活の全てに関係するほど大きいものであると学びました。祈ることとは自分自身を知ることであり、心の中で願っていることが本当の自分を映し出す鏡のようなものになるのだと分かりました。そこで自分でも考えてもいない自分に出会い、崇める存在に頼ることで精神的な面を安心させ穏やかにさせることができるもの、それが宗教であると実感しました。

このインドネシアでの活動を終えたことで私が考えたこと学んだことはいくつもあります。まず一番に思うことは、私たち日本人との価値観の違いです。日曜礼拝でも感じたように1日という時間の過ごし方も異なり、村の人たちには人間本来

のあるべき姿が今も残っているように思いました。私たちは発展しすぎた場所で生活することが当たり前になったことで、もう戻ることはできないようになってきました。休みの日が1日あったとして、なにかをしなないといけない、どこかに出かけようなどと考えてしまうのは普段の生活が時間に追われているため休みの日も何かの予定で埋めなければいけないと本能的に考えてしまいます。けれど、この村の人たちは休みの日は朝から礼拝に行き、いつもとにも変わらない日常を過ごしています。彼らの文化や生活を間近で同じ時間を過ごすことで、テレビやネットでは分かり得ないことまで知ることができました。他には、豊かさという面でも考える機会がありました。私たちは発展し進化した社会で何をすることも不自由のない生活を送って満足しています。お金さえ払えば更に上の生活を手に入れることも可能です。この日に旅行の予定があるから、毎日を頑張ろうというモチベーションになったりして日々を過ごすことが多いのが日本人の特徴で、なにか自分にとって楽しいことをするという目的意識が常にあります。それに対して、こちらの人たちは毎日朝起きて手洗いで洗濯をして、ご飯の支度をしたり当たり前家事をするだけで1日がおわります。自分自身が実際に現地での生活を体験してみて、ひとつひとつの作業にかかる時間が日本に比べると数倍長いことも分かりました。休みの日に何かをするとか、どこかに行くとか、それ以前に毎日を生きているだけで、その日他に何かをする余裕は生まれません。それでも、便利なものを求めずに今のままの現状を維持することで何でもない普通の日常を送っています。それに不満すら感じていないことで、彼らの心の豊かさに感銘しました。私たち日本人も昔はこういう生活をしていたのに、今はもうできません。社会が発展し、便利なものが増えていく中で、人間としての私たちは進化したように見えて本当は退化しているのかもしれないとさえ感じました。私たちの当たり前を当たり前と思っはいけない。日本と同じ物差しで全ての物事を測ることは異文化理解にはつながらないと学び考えました。

今後の人生において、私はこのワークキャンプで大切なことを多く得ました。幸せの意味について帰国した今でも考えています。帰る家があって、温かいシャワーを浴びて美味しいご飯を食べられる私たちが幸せであると、ずっと思い込んでいました。アスラマの子どもに会うたびに、どうして私たちよりも不便な環境に置かれている彼らの方が私たちよりも綺麗な笑顔で日々を過ごせるのかなと考えていました。私たちは発展をしすぎたせいで、毎日なにかの不安や不信感を抱いていて、時間の概念もくっきりと存在している社会のため圧力による窮屈な感情さえも生まれるため常に新しい悩みを抱え込んでいます。そんな私たちが本当に幸せなんだろうか。彼らのように毎日を笑顔で笑って過ごせることが精神的な豊かさを持った正しい人の生き方じゃないだろうかと思いました。どうして家族もいて不自由のない生活をしている私たちが施設で育っている彼らに励まされているのか。最終日、私たちはここでの生活はこれで最後になるけれど彼らにとっては明日もいつもとにも変わらない、いつもの毎日が待っていて、この短期間私たちが彼らにしてやれたことは何かあったのか、そんなことを考えていました。なにもなくなったとしても、人は生きていける、そして毎日は自然と過ぎていく。この旅で私は出会った人たちみんなから「生きる力」を学びました。幸せは人の心にあって、環境や便利なものがあるからだとかではなく、自分に正直に向き合って、苦しめないように生きることかなと思いました。これから日本で生きていくにあたって全ての考えを、インドネシアで得た考えにすることはできません。それでも彼らのように一日一日を全力で生きようと思います。その中で、本当の幸せの意味を探していけたらなと考えています。このインドネシアでの活動を通して、私は多くの物の見方を学び、幅広い視野で客観的に事物を判断することの大切さも学びました。このように国ひとつ違うだけで、本当に文化も生活スタイルも全く異なるため新しい発見は毎日どこかにあります。私はそのような発見や気づきを日本に持ち帰り、これからの人生での糧にしようと考えています。自分自

身この体験を通して、多くの面で成長できたのではないかなと思いました。

## 私が感じたインドネシア

～インドネシアの文化および生活について～

国際教養学部 3回生 西口 塔子



今回IWCで得た経験は、私にとってインドネシア文化に触れる素晴らしい機会となった。常日頃から先生、仲間、インドネシア人からインドネシアの文化、生活についての話を聞いていた私にとってインドネシアを訪問する事は、不安感と期待感が入り混じる複雑な心境であった。それと同時に、自身の関心分野であるインドネシアを自身の肌で感じる絶好の機会でもあった。今回、IWCメンバーと引率の先生方、現地のスタッフの方々、子どもたちと共にワークを通して私が見て肌で触れ合った、現地の人々の暮らし、生活、文化をまとめていきたい。

### 1. 行く前に自分が思い描いていたこと

インドネシアを訪問する前、私は様々なイメージをインドネシアに持っていた。それは文化、生活、宗教、人間性、多岐にわたる。しかしそのイメージはインドネシアの人々、文化に触れるたびに崩れていった。そして自分自身の固定観念であったと徐々に感じていったのである。

まず、訪問前、インドネシアという国は決して豊かではない国で貧しい生活をしているというイメージを持っていた。農村地域が多く農業で日々の生計を立てている人々が多いのではないかと

いうイメージがあった。なぜならインドネシアという国は、歴史的に植民地であったという歴史認識が強かったからである。植民地支配が長く続いた国は、国力が支配国に奪われていくという事を聞いた事があったので、その言葉を鵜呑みにしていた。しかし空港に到着し、周辺を車で移動している内に、これらが自分自身の固定観念であることに気づいた。なぜなら、空港の周りは近代的、都市的な建物の作りが多かったからである。大きな建物や、道路の中心に置かれたオブジェ、噴水、そしてマンションのような家、日本製の車やバイクが多く存在した。その上、たくさんの人々が様々な仕事につき日常生活を送っているように感じた。その様子を見てみると、そこで暮らしている人々がとても貧しい生活をしているようには思わなかった。ごく一般の日常生活にも感じた。そして観光客のような外国人もいて、観光客にお土産や果物を売って生活をするなど、非常に活気に満ち溢れた生活をしているバリ島の人々が私の目の前にはあった。そんな人が多い中でも、その人、個人個人が思いのまま自分の時間を過ごし、働き、生活をし、穏やかな時間を皆で共有しているようにも感じた。人が沢山いるにも関わらず穏やかな時間が流れていたのだ。そしてスーツを着ている人が少なかったようにも私は感じられる。

インドネシア人の友人からはバリ島には電車が走っていないと聞いていたので交通網も発展していないのだと勝手に思い込んでいた。しかし実際、現地に行ってみると道路、山道は綺麗に舗装されていて、都市部には信号機もついている。車、バイクが走りやすい環境が整えられていた。電車はなかったもののインドネシアの車文化、バイク文化に根ざしていると感じた。このようにその土地柄や文化、宗教などによって、それぞれの地域で生活様式に差が出るのがインドネシアであるのではないかと感じた。

### 2. 実際のインドネシア（バリ島）の印象

インドネシアを訪問してみて、インドネシア人は陽気で気さくな人が多いという印象を受けた。村で生活しているとき私は自転車を借りて村の周

辺を走った。その時バイクに乗っている人たちは必ずと言っていいほどクラクションを鳴らし気さくに手をふってくれた。歩いている時も同様で、おばあちゃんが知らない外国人の私に「どこから来たの?」と声をかけてくれた。私はその様な所にインドネシア人の国民性、人間性が溢れ出ていると感じた。毎日の生活で人と関わりながら生活している、生きていると感じさせられた。そして、その人々とのつながりの中で穏やかな時間が流れていた。人がいそいそと行き交う今日の日本ではとても考えられない対人感覚と時間感覚である。インドネシアの独特の空気感は人と人とのつながりや共存を感じとても人間的であると思った。

そして食文化、生活面など日本と違って不便だと思うことはたくさんあった。しかし生活をしていく内にこれが現地の人々の生活なのだと、受け入れ、慣れていく自身が存在することに気づいた。

### 3. プログラム中に印象に残っているエピソード

私のホームステイ先の家族は、お父さん、お母さん、娘さん、赤ちゃんの4大家族であった。毎朝早くにお父さんは外でカンカン、カンカンと家の屋根に登り仕事をしている。私は、屋根の上で何をやっているのかなあとと思い、お父さんに何をしているのかと尋ねた。すると、お父さんは「台所を作っている」と答えた。私はその時、びっくり仰天して大笑いしてしまった。なぜならもう50歳を過ぎていであろうお父さんが、屋根の上に登って大工仕事をしていることに驚いてしまったからだ。その家には台所がすでにあるのだが、「家族のためだ」とニコニコしながら作業しているお父さんを見て感嘆の声しか出なかった。かっこいい姿が目に入った。私は、このような物も自分たちで作っているということに人間生活の原点を感じていた。なんでも、自分たちの手で作るというような自立した生活を目の当たりにした。

洗濯する時も私の家はいつも手洗い場であった。家には洗濯機がなく、家族も全て手洗いで洗っているらしい。洗濯一つ取っても、日本とインドネシア生活の違いに驚いた。日本での生活だとボ

タン一つで洗濯ができる。しかし、この家では自分がやらないと誰もやってくれない。なんでも自分で苦労してやらないとできない。自分の手で洗濯をしていると日本の恵まれた環境にありがたみを感じた。しかし現地の人はこれが日常の生活なんだと思うと、自分自身が普段過ごしている生活の便利さに疑問を抱いた。本来の人があるべき姿はどうかかと思ってしまう。自分が日本で過ごしている日常は、本来人があるべき姿なのか、そうではないのか。とても疑問に思った瞬間であった。現地の方と触れ合い、現地の生活に溶け込んでみると、日本との文化の違い、生活の仕方の違いが沢山あり、そのギャップに驚く。

### 4. 行く前と実際に行ってからの違いから自分が考えたこと学んだこと

日本人が旅行に行くと言った時、バリ島はインドネシアの中でも大変有名な観光地である。だが、今回バリ島にも地域によって生活様式や貧困に差がある事を学んだ。今日のメディアではバリ島は自然とビーチがありバカンスや旅行に打って付けの場所であると広く取り上げられている。私も訪問する前は、バリ島という場所はそう言ったパッケージを過ごす最適な場所だと考えていた。しかし実際に訪問すると一言でそのような事を言う事に抵抗を感じた。なぜなら、バリ島の南地域は観光色であるが、北地域は農業が盛んに行われ、そこに貧困というような格差を感じるからである。アスラマにいた子どものご両親達は出稼ぎのために子どもを預けていることも多い事が分かった。その時、私がもしバリ島の北地域出身であったら貧困に悩んでいるのではないかと考えた。バリ島の北地域には火山があり十分な水がないから貧しいと聞いた。このアスラマ以上の貧困に悩み、子ども時代から両親がいない子ども達が実在するなんて、あまり知られていない事実である。それは私たちが現地に行ってみないと知ることの出来ない事実であると感じるとともに、私たちには何ができるのか考えるべきである。

## 5. 今後の人生にどのようにいかしていきたいと考えているのか

今回の経験を自身の就職活動や将来の仕事のために活かしていきたいと考えているのはもちろんだが、今回インドネシアを訪問して、私は新たな目標ができた。それはまた、いつかプリンビンサリ村に行き、ホームステイ先の家族、アスラマの子ども達、スタッフの方々、村の人々に会いに行くということである。そしてこの経験を通して、インドネシア文化やインドネシア語の理解を更に深めると共に人生の学びにも活かしていきたいと考えている。

私のホームステイ先の家族に息子がいる娘さんがいた。その人の旦那さんはなぜかいつも一緒にいない。私は、なぜ息子と奥さんが家にいるのに旦那さんは帰ってこないだろうと疑問に感じ、ある日彼女に尋ねた。私が「この赤ちゃんのお父さんはどこにいるの?」と聞くと、その言葉を聞くなり彼女は涙を流した。最初、私は何が起きているのか分からなくて狼狽えた。すると彼女は涙を流しながら、「彼はヒンドゥー教徒、私はキリスト教徒だから一緒にいられない」「だからこの子には父親がいない」と「私は今でも彼が恋しい」と言った。しかし、その時私は「I'm so sorry.」と一言だけしか答えられなかった。涙を流している彼女を目の前にして、一言それだけしか答えられなかったのだ。その上、インドネシア語ではなく英語でしか答えられない自分に憤りと悔しさを感じていた。その時、もし私自身がインドネシア語で話せていたら彼女の話をもっと親身に聞いていたのにと感じた。彼女がどういう思いでその決断をしたのか、どんな風に考えたのか、また考えてたどり着いた結果なのか、本当に知りたいと思った。しかし、私の言語力が未熟なのでなかなか聞き出せない。アスラマの子ども達も同じであった。彼、彼女達は沢山のことを私に伝えようとしてくれた。もっと彼らの事が知りたいと感じた。しかし、自身の未熟さにより理解する事ができなかった。それが一番悔しかったことでもある。だから、この悔しかった経験を通して自身の将来の学びに、より一層力を入れていき

いと考える。

## 最後に

高校訪問の移動時、車の中で私はある質問をスイクラマさんに投げかけた。それはインドネシアの家の玄関にはなぜ国旗が飾られてあるのか?という質問であった。私自身、インドネシアに訪れてきてから大変疑問に思っていたことである。空港周辺の民家やプリンビンサリ村の家でも全ての家が絶対とっていいほど国旗を家に飾っていたからだ。そして話を聞くとその国旗は独立記念日のお祭りで使われていたものだと分かった。それも日本から独立した記念日で使用されたものであると聞いた。もし今回インドネシアを訪問しないとインドネシアで日本からの独立記念日のお祭りが行われている事など知らなかった。私の知らないところでそのようなことが行われているなど全く知らなかったのである。大学の講義などで、戦時中日本軍がインドネシアを植民地にした時、様々な経済政策でインドネシアに貢献した話もあるがその反面、むごい虐殺をしていたことも聞いたことがある。この様な過去の過ちがあるにも関わらず、今回受け入れてくれた人々には感謝の気持ちでいっぱいである。この様な過去に起こした様々な日本の歴史を、今日を担う日本の若者として考えなければいけない。二度と同じ過ちを犯さないためにも、今を生きる私たちが向き合い真剣に考えなければいけない事であると考えている。

## インドネシアの文化および生活について

経済学部 2回生 青野 壮助



私は海外に行ったことがなくこのIWCのプログラムに参加することが決まり不安と期待とで体中がうずうずしていたのを覚えています。初めにインドネシア（バリ）については事前研修の時の話ですごい田舎なのだという印象がありました。その中ですべてがそろっている日本から出たことのない私がインドネシアで元気で過ごせるのかな、はたまたボランティア活動なんてできるのかなという不安に襲われていました。しかし、それ以上にインドネシアでIWCのメンバー、スタッフと一丸になってワーク活動に燃え汗を流しながら頑張っている姿や、アスラマの子ども達と楽しくお喋りやスポーツをしている姿のほうに想像することができて早く行きたいと思う日々が続いていました。

実際のインドネシア（プリンビンサリ）の印象はとても田舎でした。村の状況はすごく空気がきれいで街灯もなく朝は早く明るくなり夜は八時過ぎると真っ暗になりました。さらに、道にはたくさんの放し飼いの犬、ニワトリ、少しの猫がいてびっくりしました。道も車一台が通れるぐらいの幅の道で車と人と犬とニワトリと猫が行き来していて日本には無い光景で新鮮でした。しかし、道はきれいに舗装されていて日本の田舎や砂利道よりも全然きれいでいい環境だなという印象を受けました。ホームステイ先の印象はとにかく大きくて天井が高かったです。これはどの家でも共通

していて少し羨ましかったです。家の中の状況は部屋がたくさんありベッドもすべてがダブルサイズ以上で二人掛け以上の椅子が五つもあり大豪邸でした。しかし、日本の三種の神器の冷蔵庫、3Cのカラーテレビ、車はあるのですが三種の神器の洗濯機、3Cのクーラーがなくとても驚きました。ホームステイ先のイブ（母）に聞いてみるとそんなに不便じゃないと言って、インドネシアのプリンビンサリではないのが普通らしい。お風呂はマンディーと呼ばれトイレと一緒にあってユニットバスのバスタブがないバージョンだった。さらに私のホームステイ先ではシャワーがなく水がめに蛇口で水をためて桶のような物で水を浴びるので初めはすごく難しかったです。とにかくマンディーはとても苦労しました。初めてお湯が出ないので朝や夜の気温の低い時も冷たい水で体を流します。さらに気温が低いということは水の水温も下がっているのでマンディーの後は身体がキンキンでしんどかったです。しかし、一週間もすれば慣れてきてむしろ気持ちいい感覚でマンディーが楽しくなりました。次に生活に大切な洗濯です。先ほども出てきたのですが洗濯機はなくすべて手洗いです。これがまたものすごく大変でした。手洗いは初めての経験だったので初めは失敗してしまいました。洗濯物を洗う場所はマンディー場です。洗濯用の大きめの樽のようなものにお風呂で使う水がめの場所から水を入れて一つずつ洗濯をするのですがつけているだけでは駄目なのでしっかりこすって汚れの強い部分はブラシでゴシゴシします。この作業はいいんですがこの後しっかり真水で洗剤をすすぐのが大変でした。少しでも洗剤が残っていると臭いの原因になるので時間をかけます。この後の干す作業が一番苦労しました。一つずつしっかり絞らないといけません。水が日本と違って汚いので水がなくなる位絞らないと本当に臭くなります。一人分の衣類を二日分洗濯するだけで30分以上かかりました。洗濯をしているときにイブのありがたさや日本の洗濯機のすごさに感動しました。普段の生活だけでも日本と全然違うので深く印象に残っています。



次にインドネシア人の印象です。私がインドネシアにいた17日間にはたくさんの人と出会い関わってきましたが、とにかくみんな優しくかったです。日本人は親切で優しくしてお節介でおもてなしの国だと言われていますが私の中ではインドネシアのほうがおもてなしの国だと感じました。村を散歩しているだけでバイクに乗ったおじさん、おばさんからプ〜と鳴らしながらスラマシアーンと声をかけてくれます。ホームステイ先のイブも毎日のように生バナナ、揚げバナナを持ってきてくれて全然言葉が通じないのに話しかけてくれて笑ってくれます。アスラマの子どもたちは私よりも年下なのに私と会話するために必死に日本語を覚えようとしてくれて、英語とジェスチャーで話しかけてくれます。本当にうれしいし温かい気持ちになりました。いつもニコニコしていて大好きです。この人たちのおかげでインドネシアが好きになり、また来たいと感じました。生活のスタイルとしては朝早く起きて寝るのが早いイメージでしたが私のイブは夜の10時過ぎまでドラマを見ていて意外と寝るのが遅かったです。

印象に残っているエピソードは2つあります。1つ目は犬を車で轢いてしまったことです。朝アスラマに行く道中でアスラマのスタッフの方に車に乗せてもらい車に乗り向かっているといきなり犬が車の横に突っ込んできて、車が少し揺れドンという音が鳴り後ろを振り返ると犬が仰向けに倒れていてもがいていました。急いで降りようとするとスタッフの方はそのまま進んでアスラマに届けてくれました。私たちは犬のことが気になり相談すると朝倉さんが一緒に謝りに来てくれることになり先ほどの犬の場所に戻りました。すると犬の姿がなく飼い主の方が掃除をしていました。謝ろうと思ひ話しかけるとノープログラムと言い怒っている様子や悲しんでいる様子は一切なかったです。後ほどプリンビンサリの人に聞いてみると犬が轢かれることはよくあることらしくあまり気にしないらしいです。さらに、犬はかわいがる為ではなく番犬用なのでそこまで感情はないらしいです。しかも、犬が轢かれるのは飼い主側が悪いらしく犬の死んだ後の掃除などのケアは全部飼

い主がやるのが普通です。この体験は本当に衝撃的でした。日本との文化の違いがとても感じられました。

2つ目のエピソードです。携帯電話の普及率や今時の子が多いことが印象に残っています。私は今回のワークで中学生と高校生と看護学生に日本語の授業をしました。その時に話した内容が日本の若い子がする話と一緒にでした。例えばインドネシアでは今韓国ブームらしく少女時代やTWICEやブラックピンクなどの会話をしたり、スマートフォンをほとんどの子たちが持っていて私の持っているカメラアプリやインスタグラムなどで共通の話をしたり盛り上がりました。日本もインドネシアと変わらないなと同じことをしているのだと知って深く印象に残りました。

行く前と行った後でのギャップから考えたこと学んだことは、当たり前ですが行ってみて直接見て触って体験しないと何もわからないことに気がきました。日本から出たことがないのにいろんなニュースや誰かからの情報から勝手に自分で想像して、たぶんこうだろうなと考えていたのですが全然違いました。日本は進んでいる国だからまだ経済が成長中のインドネシアを少し下に見ていた自分がいたのかもしれないと気づかされ、考えさせられました。今回のワークキャンプで老若男女様々な価値観の人と学んだことは別にお金を持っているから頭がいいから偉いのではないし幸せになれるのではないと感じました。インドネシアの学生やアスラマの子たちは英語が話せます。けど私には話せません。だからインドネシアの子が偉いというわけではないのに、日本にいるときの私はわかっているつもりでそんな考え方をしていました。ボランティアをするきっかけもみんなの為に何かしてあげたい、みんなを楽しませてあげたいという気持ちでした。この気持ちには私は上にいるのだという考えがあったのです。しかし、行ってみて私はとても自分の成長になったし、すごく楽しかったです。ここでやっと事前研修で大野先生が言っている意味が本当に理解できました。ボランティアは何かをしてあげるのではなく、みんなに何かをすることです。それが終わった後にこ

そ成長や楽しさが待っているのだと私は学びました。みんなの為にと言いながら自分の為にボランティアをしようとしていた自分が恥ずかしいです。

これらのプログラムを経験して今後の自分の人生にどう生かしていきたいか。自分の良いところや悪いところを見つけられる良い機会になりました。ここで得た経験で私は本当の意味でみんなで何かをすることの楽しさを知ることができました。さらに、自分で見て、経験しないとわからないことも気付きました。そして、人に上や下とわからないことも気付きました。だから私はこれから勝手な固定観念に縛られないで、いろいろな人と出会いつながっていきたくさんの価値観を持った友人を作りたいです。そしてその友人とともにいろいろなことを経験したいです。こういったプログラム以外でも周りの人と協働してもっと楽しくもっと意味のある体験をしていきたいです。

## インドネシアに行ってみて

経済学部 2 回生 池永 一樹



### 第1章『行く前の気持ち』

まず私がインドネシアに抱いていた街イメージはテレビによく映っているインドと一緒にような場所なのだと思っていました。スクーターがよく車と車の間にいたり、信号待ちしている車の前にスクーターで前が見えない状態だったりしていると思っていました。住んでいる人たちは温厚そう

な感じではあるが、いざというときは非協力的でずる賢い人たちで溢れていると想像していました。そんなインドネシアへ行くわけである。私は生活に刺激がほしいと常日頃から考えており、カルチャーショックなども味わってみたいと思っていましたし、何よりも初めての海外でもあったのでとにかく楽しみであった。本当に日本語は通じないのだろうか。また私の拙い英語やボディランゲージでも相手に私の意志が通じるのか、と今考えればわかることを想像するたびに期待値が高まってきました。こんな風にこのプログラムのことをポジティブに考えていたのは、まだ行くことが決まって1カ月と経たない頃の時である。事前研修も中盤に差し掛かってくれば、インドネシアでの交流会、日本食、日本語の授業などの班に分かれての活動も始まってきた。各班になが正解なのかもわからない中での活動だったので不安や焦りなどが見えてきました。またインドネシアがどういったところなのかも事前研修の中で学ぶこともありインドネシアでの生活になれば、日本では気にしていなかった健康面もシビアになってくるので、ここでも不安の色が見えてきます。自分は Dengue 熱にかかるのではないかと、Dengue 熱でなくともほかの病にかかってしまうのではないかと考えてしまう瞬間が何度もありました。なので、初めに抱いていたワクワク感が事前研修をしていく過程で段々とネガティブになっていき遂には行きたくないと私は感じていました。

### 第2章『実際にバリへ来てどう感じたか』

バリに到着して空港にいるわけですが私が見た光景はとても綺麗で日本とあまり変わらないところではないのかと驚愕しました。ですが、やはり空気感は日本とは別物でここはもう日本ではないのだなと感じさせるほどに違いを感じました。そして空港から1歩外へ出れば先ほど感じていたものが一転し別世界に感じました。警備員と思われる人が座りながら煙草を吸っているところや、一番驚いたのは人が通る道で堂々と座っていたことです。日本では考えられないシーンだったの驚きの連続です。そして空港からホテルへ向かってい

る途中でも驚くシーンがありました。まず一つ目がバイクに乗っている人たちがヘルメットを被っていないことが多かったことです。二つ目が日本ではだいたい一家に1台車を持っているところをインドネシアでは一家に一台のスクーターがあり家族で乗っているのが文化の違いを感じました。

ホテルでの食事はやはりインドネシア人に合う味付けになっているのでとても不味く感じました。特にサンバルの味は今まで食したことのない味であったためすぐに手が止まってしまうほどでした。これが何日も続くのかと思うと心が折れそうになりました。何よりもお腹がすいているのに食べ過ぎてお腹を壊してはいけけないので、お腹いっぱい食べるのができないのがとてもしんどく感じました。

ホテルでの1泊が終わり第2アスラマに向かいます。日本では片側1車線しかなければ、追い越しすることはあまりないが、インドネシアでは追い越しする場面をよく見かけるし、自分が乗っている車も前の車をよく追い越していた。村に入ると道は一本になり、日本での住宅街のような道になるが少し違う点がある。それは車がすれ違うことができるようになるのかは不明だが、かなり広い芝生の部分があるので日本の住宅街で車とすれ違う時に味わう緊張感などはないので安心である。ところが家で飼っている犬やニワトリたちは放されているので気をゆるめられないところも多少ある。日本では動物をペットとして飼っているのに轢いてしまえば飼い主は怒ってしまうし、轢いてしまった人は罪悪感を抱いてしまうだろう。だが、彼らは自分たちの躰不足だと思いあまり気にしない様子である。ここでもカルチャーショックを感じた。

一日の疲れをとるお風呂でも違いがある。日本のシャワーを浴びるといえば個人での違いはあれ、暖かいお湯で浴びるのが一般的であるが、インドネシアでは冷たい水を浴びるので、事前研修で聞いていたものの日本よりも夜の気温が低いインドネシアでは大変な日課であったと今でも鮮明に覚えている。またユニットバスであるため便器も濡らしてしまうので不快に私は感じてしまう。

### 第3章「プログラム中の印象的だったエピソード」

私がプログラム中に印象的だと感じたエピソードはいくつかあるがまず1つ目が日本語の授業の時である。小学校、中学校、高校、看護学校へ行ったがどの学校でも感じたのが、どの生徒も興味を示してくれるのである。私は英語の授業などで発音の練習などは比較的に大きな声を出しているが、他の生徒は声を出さなかったり、出しても小さな声であったりとあまり協力的ではないのが日本でのイメージである。これに反してインドネシアの学生たちは大きな声を出してくれ、尚且つ大勢が出してくれるのである。これに私はとても感動した。来る前は嫌だと感じていた日本語の授業が楽しく、学生たちにもっと日本語を知ってほしい、という強い思いが生まれた。

日本語を教える方法として日本の遊びが使われた。フルーツバスケットでは色を覚えることができ、かるたでは日本の単語を読んで競い合い、告白ゲームでは本当に告白するときのシミュレーションとして言葉にする遊びである。フルーツバスケットをしていて驚いたことは男女関係なく椅子を取り合ったことである。男子が椅子を取り合うので熱くなる様子は容易に想像することができるが、女子は女子で取り合っていたことに驚いた。

かるたではその人の人間性が表れていたと思う。目をつむってから読み上げられた言葉のカードを取り合うのがルールだったのだが、みんなの目は軽く開いているように見えたのでズルをしていたのだと思う。

最後に告白ゲームであるがこれは日本とあまり変わる点がなかった。自分はせずに誰かにやらせようと自分の友達の名前が教室内に響いていた。少し違う点といえば学生たちが指名する相手は僕たちであったことである。どういう意味で私たちを選んだのかはわからないが、日本の学生たちなら外国人を選ばないであろう。日本人はシャイな性格であるとよく言われるがその通りだと感じた。そしてインドネシアの人たちは積極的な性格なのだと感じた。他にもそう感じた場面がある。私たちが担当しないクラスの生徒たちが私たちのことを呼び、写真を撮ろうと誘ってくるのである。

スマートフォンを持っている学生たちからはSNSで有名であるインスタグラムのアドレスを聞いて来るのである。このことから積極的な性格なのだと感じた。

### 『実際に行ってみて感じたこと、考えたこと』

私はインドネシアに実際に行ってみて住みやすい環境だと感じた。確かに都市部では、軽犯罪など頻繁に起こっているのだろうが私たちが生活した村では、私たちのこと快く受け入れてくれると感じさせるほどに優しく接してくれたのである。インドネシアへ行くことが決まった時に想像していたイメージとはまるで違っていた。蚊や日本では気にも留めていなかったことにビクビクしながら生活をしていくものだと考えていたが、途中からはすっかりと頭から抜けていた。インドネシア語しか通じないと思っていたが、そんなことはなく私たちの拙い英語でも何とか通じていたし、心配していたことは小さなことであつたのかもしれない。ただこれは、入念に考えていたからこそその結果であるとも考えられるので一概には必要ないとは言えない。トイレトペーパーがないと言われて手で拭くしかないと思っていて汚いと思っていたが、お尻を洗うシャワーがあり案外トイレトペーパーで拭くよりも綺麗にできるし環境にも良いのではないかと考えることができた。そうして色々なことを経験することでイメージするだけでは見えなかったことが見えるようになった。これはとてもいいことを学べることできたと強く感じることができることの1つである。

### 『これからの人生にどのように活かしていくか』

このワークキャンプの経験で私が学んだことは1つの物事は多角的にできているので、絶対にこうだと言えるものは少ないということである。これから色々なことにチャレンジしていくつもりであるが、少し触れて分かったつもりになるのではなく、いや他にもこんな部分があるのではないかと模索することを癖にしていきたいと感じました。

また、下手だからとやめるのではなくまずは試

してみ、それで通じないならどうすれば通じるのかを模索してしつこく頑張りたいと考えました。だから私はこの2つの「模索」をしていきたいと強く心に刻みました。

## ワークキャンプを通しての経験と気づき

国際教養学部 2回生 國枝 みずほ



### 1章

まず私がこのインドネシアワークキャンプに参加したいと思ったきっかけは、去年の夏、私はBSPタイという大学のプログラムに参加したことだった。プログラム中にラオスを訪れた際、小さな子どもたちが私たち外国人をみるなり、小さな手を私たちに向け、何か物をくれ、と要求してきた。靴を履いていなかったり服も汚かったりしていた。しかしそこでは応えてはいけなかったので何も応えずにその場を後にした。その時感じたことは日本ではまず物乞いの子どもを目にしたことがなかったので驚いたこと、心が痛い気持ち、そして何よりも何もしてあげられなかった自分がいやだった。そして、今年の春にこのインドネシアワークキャンプがあることを知った。子どもたちとともにボランティア活動を行うと知り、私は去年感じた何もできなかった悔しさをここで発揮できるのではないかと思います。思い参加を決意した。

インドネシアは暑くて綺麗な海とヤシの木があるリゾート地というイメージだった。しかし、事前授業や先輩方のお話で文化や言葉、またプリン

ビンサリ村の子どもたちの暮らしを学び、日本とは全く違うことに不安とともに楽しみでもあった。特に不安でもあり楽しみだったことはやはり、子どもたちとのコミュニケーションだ。インドネシア語をいろいろと教わったがやはり馴染みがなかったのととても不安だった。しかしせっかく習ったので使って話したいと思っていた。また日本語の授業も不安と楽しみが混合していた。特に私の班は1、2年生しかおらず、しっかりできるか不安だったが、日本について少しでも興味を持ってもらえたら嬉しいなという気持ちで準備を行なった。

## 2章

空港に着いた時から危機管理が重要視された。荷物のこともそうだが、蚊除け対策も行わなければならなかった。空港に着いた時から地べたに座って談笑する男女が見られ、日本ではまず見られない光景がとても不思議で、尚且つ海外という緊張がようやく芽生えた。バンに乗って宿泊先のホテルに向かうまでの街並みはヤシの木が生え、交通量の多さに驚いた。特にバイクが車線を気にせず走っており怖さを感じた。危機管理が本当に大事だと感じた。ホテルではディアナプラ大学の学生6人が私たちを迎えてくれた。インドネシア語の他に英語も堪能で同じ大学生にも関わらずすごいと思いき後れしてしまった。ホテルで日本語プログラムの説明をインドネシア人学生にし、たどたどしい英語での説明で不安もありつつ、一緒になって考えてくれて早速距離が縮まった。そして次の日プリンビンサリ村に着くと子ども達がすぐにきてくれ、手を繋いでくれた。初対面の私たちを温かく歓迎してくれた。心配していた会話は英語がわかる子もいればわからない子もあり、たどたどしかったが、ボディランゲージでなんとか通じ合うことができた。施設の子どもたちは想像していたよりもずっと笑顔で楽しそうな印象をうけた。しかし日本人の小学生、中学生に比べると身長は少し小さい印象だった。ホームステイ先の家も温かく迎えていただいた。施設内、ホテル、家のすべてに共通するのは床が日本では木が多い

が、インドネシアはタイルであった。乾季と雨季に合わせた作りなのだろう。そして網戸がない。網戸は贅沢品と聞いた。そのため家でも昼間は虫が多くてそれを気にしない人々も生活環境の違いで興味深かった。そして歓迎として、伝統的なガムランと踊りを見せていただいた。事前授業中に映像で見たり聞いたりしていたのだが、生で聴くと独特な音の響きとリズムが心に響き、踊りは手足、目の動きが日本では決して見られない動きで独特だった。映像で見るときは怖い印象だったが生で見るととても華やかな印象をうけた。

また、聞いていたよりもはるかに気温差が激しい。朝と夜は寒くマンディの水が苦痛だった。ドライヤーを使うと停電してしまい、電力供給の違いにも驚いた。しかし髪の毛が乾く間に家族団欒したり、ホームステイ先の方々と夜のふれあいができた。イブ（母）ババ（父）は英語は全く通じなかったが娘さんは英語で話してくれ、世代によって話せる言葉が違うことに気がついた。

## 3章

ワークキャンプの体験で印象深かった体験、1つ目はマンディだ。現地の学生がマンディのやり方を教えるから一緒に入ろうと誘ってくれ方法を教えてくれた。身体を流している最中にトイレに用を足し始め、シャワーをしながら左手で拭くというやり方を見せてくれた。20年間生きてきて堂々と人のトイレを見たのは初めてだったし左手は不浄の手の意味がわかった。私は羞恥心が捨てられず見ているだけだったが異文化体験を肌で感じられた場面であった。

2つ目は空にたくさんの凧が揚がっていたことだ。私は最初黒い凧をみてカラスだと思ったのだが凧の方向や、強さなどを調べるために上げていると聞いた。街のいくつかの商店にカラフルな凧や真っ黒な凧様々売られていた。日本では最近電柱などがたち、正月でもあまりみられなくなった凧が日常に見られた。また、国旗もとても多い。去年タイに行った時は国王の写真がたくさんあった。それは敬愛の意味があった。私はインドネシアに国旗がいたるところにあったのも国に対する

敬愛の意思なのではないかと考えた。3つ目は、施設の子どもたちとの関わりのことだ。ワーク中に手伝って、と言ってもないのに一緒にバケツリレーや草むしり、畑を耕したりしてくれた。その中でインドネシア語を教えてもらったり日本語を教えたり異文化交流を通して仲良くなれた。下手くそなインドネシア語を話しても子どもたちは喜んでくれ一緒に笑ってくれたことが嬉しかった。4つ目は、日本語プログラムでのことだ。日本語のレベルはどのくらいか、本当に盛り上がるのか不安がたくさんあったのだが3校すべて一生懸命取り組んでくれた。日本人の学生とは違い手をあげることも自分から発言することも恥ずかしがらず積極的であったことがとても印象に残っている。私たちが学ぶべきところだと思った。

#### 4章

インドネシアに行く前は貧しい子ども達になにができるだろう、どう接したらいいのだろう、と考えていた。しかし、実際に行くと『貧しい』という言葉は全く当てはまらなかった。先ほども述べたが、私たちが行くなり子ども達は手を繋ぎにきてくれ、早速遊ぼう！という感じだった。靴を履いていない子どもも中にはいたが、それでも気にせず無邪気に走り回っていた。部屋を見せてもらったがベットがあり、女の子の部屋のクローゼットの中には香水が沢山あり、匂いのするものが好きだと言っていた。日本の子ども達と比べると、ゲームソフトやテレビゲームなどはないが、その分ギターを弾いたり、ガムランを演奏していたりそれぞれ楽しんでた。私たちの目からすると一見電化製品もなく『貧しい』と捉えられるのかもしれないが、実際はそうでないとわかった。自分たちの暮らしにあった生活で、周りの人たちとの交流を楽しんでいた。そう言った意味ではゲームやスマートフォンで1人遊びが増えてきた日本人の方が『貧しい』のかもしれないと考えさせられた。

現地のインドネシア学生にアスラマの子ども達にアンケートをとってもらったのだが、雨季のハエ、蚊の問題と食事の問題が私は特に考えさせら

れた。部屋を見せてもらった時にガラス窓が割れていたり、網戸がないため虫が入ってくるという問題を抱えていた。そのため私たちは網戸の設置を提案したのだが、網戸は贅沢品だから必要ない、という回答であった。私たちにとって当たり前の網戸が贅沢品。そういう考え方がなかったためとても衝撃的だった。しかし網戸にするだけで割れる心配も虫対策もできて一石二鳥であるのに贅沢品ということでの却下は、設置費の問題や修理のことを考えてのことだろう。それでも子ども達の睡眠を守り、割れて怪我する心配のない網戸は必要だと思う。この対策についてはこれからも諦めず設置を訴えてほしいと願う。

またインドネシアに行く前はインドネシア語はわからないし仲良くなれるか本当に不安だったが、ディアナプラ大学の学生が英語も話せたためこちらも英語の勉強にもなりつつ仲良くなれた。日本語の授業では通訳的役割を果たしてくれた。そのため1回生、2回生しかいなかった私たちの班も盛り上がり少しでも日本に興味を持ってもらえたと感じることができた授業になった。そのほかにも文化や食、またバリ語についても教えてくれた。そして日本の文化にも興味をもってくれた。味噌汁とお吸い物を日本から持ってきていたので食べてもらったら酸っぱくて苦手と言っていた。日本人が誰でも好きな食べ物が所変われば感じ方も違うことがおもしろいと感じた。最初ディアナプラの学生は日本に興味ないと言っていた人もいた。しかし毎日一緒にいる中で日本にも興味をもってくれ、来年日本に留学したいと言ってくる人までいた。お互いに自分たちの国に興味を持てたし、持ってもらえたことも嬉しかった。

#### 5章

この実習で最も感じたことは『思い込み』と『協力の大切さ』である。私は去年タイやラオスに行き特にラオスで目にした物乞いの子ども達がとても衝撃で情けなくこのプログラムに参加した。インドネシアに行くとなしかに日本より道路はガタガタで商店も綺麗とは言えない。ホームステイ先のキッチンも外で釜でご飯を作っていた。子ども

達の施設も電子機器は少ないし靴がない子もいる。しかしその国の生活スタイルに合った暮らし方をしているし商店は近所付き合いが色濃く残り、外のキッチンでご飯を作りながら近所の人たちとおしゃべりを楽しんでいた。施設の子も達も外で遊んだりギターを弾いたりして友達と付き合い合っていた。日本は近所付き合いが薄くなりテレビゲームなどで1人で遊び、外で野球などをやるということが少なくなっている。人間付き合いが薄くなってきたということだ。日本は世界から見れば先進国といわれる国だ。しかし心の豊かさではインドネシアのほうが豊かだと感じた。行く前は日本の方が綺麗だしきっとインドネシアは過酷だ、と思っていた。行って自分の目や肌で体験すると行く前の自分が恥ずかしく思えるほど間違っただけの思いをしていたことを体感した。事前にインドネシアについてインターネットで調べたり、授業で習ったり色々したが、自分で実際に体験するのと人づてに聞くのでは全く違った感じ方をすることがわかった。これを通して、周りの話やメディアの情報はたしかに重要だ。しかし、それが本当か、自分も同じ考えなのかは、体験してみようやくわかることなので、積極的に物事に取り組んで行きたいと思う。例えば一つの資格を取るにしても誰かが難しいといった資格は自分にも無理だと思っていたのだが、自分には得意かもしれないしやってみないとわからないと思うことができたので挑戦したい。これから先も何か挑戦したいものが出てくると思う。そうなった時に初めから苦手だとかできないとか思い込みで決めつけてはならないと考える。自分が挑戦できるものに恐れず積極的に取り組む人間になりたい。また、今回のこのワークキャンプは決して1人ではなにもできなかった。まず先生方と現地の関係者の方々があったことでなりたっていた。そしてもちろんメンバーがいたからできたことでもある。壁を作るにしても1人だと17日間ではなにもできなかった。みんながお互いのことを見ながら効率よく円滑に壁を作ることができた。また日本語授業も盛り上げる人や司会の人など、それぞれの役割を果たしたから成功した。様々な協力があったこ

のワークキャンプは成り立ち無事に帰ってこられた。自分1人では小さな力だが、小さな力がいくつも集まると大きなものになると改めて感じた。何かに取り組むとき、自分だけができたらそれでいい、ではなく周りの状況を理解しお互いに協力しあえる環境を作っていきたい。

## インドネシアで体験したこと

国際教養学部 2回生 河関 慶士郎



<はじめに>

私は今年の8月21日から9月7日までの18日間、第31回国際ワークキャンプ（インドネシア）に参加し様々な経験を得ることができました。第31回という新しいIWCの始まりとなる今回、キャンプ長として参加できたことをとても光栄に思います。この国際ワークキャンプではワークなどのボランティア活動、児童養護施設での子どもたちとの触れ合い、言葉の通じない環境でのホームステイなどの国際ワークキャンプでの活動内容全てに大きな期待や意欲を抱いて参加しました。それに加え、以前から興味があったインドネシアという国を私自身で実際に感じる事が出来るということも参加を希望した大きな要因のひとつでした。

そして、インドネシアでは日本人メンバー17人とディアナプラ大学の学生6人で18日間の全ての活動を共にして、とても堅いつながりで結ばれた関係を築くことが出来ました。

### <行く前に、自分が思い描いていたこと>

私が実際にインドネシアへ訪れるまでに考えていたインドネシアのイメージは、由比先生の授業でのお話から得た「虫やトカゲが多く、枕元をそれらが走り回っている中で睡眠をとる。」「ベッドではなく、床に蓐蓐などを一枚敷いて寝る。」という情報や、テレビや雑誌などで見た写真などから想像した、発展しているのはリゾート化している一部のみで、その他の地域ではインフラ整備が行き届いていない発展途上の国というものでした。それに加えて、ホームステイ先は都市部から遠く離れた村なので山奥での生活をしているのだろうかかと想像していました。なので、その村にある児童養護施設では完全ではない設備で親元を離された子どもたちが生活していて、とても暗い雰囲気のある場所なのではないかという勝手な考えを持っていました。そのようなイメージを抱いていたので、インドネシアへ出発する前には大きな期待や楽しみな感情と共に不安も感じていました。

### <実際のインドネシア（バリ島）の印象>

しかし、実際にインドネシアのバリ島へ到着するとそれらのイメージは全て私の勝手な想像であったことをはっきりと感じました。街には日本と同じようにたくさんの自動車やバイクなどが走っていました。走っている自動車やバイク、その他にも食品なども日本製のものが多く見られ、日本の製品が海外から大きな信頼を得て使われているのだと感じました。都市部から遠く離れたプリンピンサリ村での生活も日本での生活スタイルとほとんど同じで、電気や水道などのインフラも整備されていてとても快適に過ごすことができました。私が勝手に良くないイメージを抱いていた児童養護施設では、子どもたちが私たちの到着を笑顔で歓迎してくれました。どの子どもたちも無邪気な笑顔で積極的に交流しようという気持ちが伝わってきました。施設の設備はどれもきれいに手入れされており、職員の方たちも自分の子どものように施設の子どもたちに関わっていたので、施設内はいつでもとても明るい雰囲気に包まれたたいへん居心地の良い空間でした。

### <プログラム期間中に、印象に残っているエピソード>

この18日間の国際ワークキャンプでは多くの印象的な思い出を得ることが出来ました。期間中に活動を共にする6人のインドネシア人大学生とは初日に宿泊したホテルで初めて出会い、それから毎日のコミュニケーションを通してとても良好な関係を築き、日常の生活、ワークやエヴァリュエーション、最後の観光の日まで全ての活動に協力して取り組むことが出来ました。

初めて村に到着してから行われた入村式では、子どもたちによる伝統楽器ガムランの演奏、伝統舞踊の披露、司祭さんによるお祈りなどが行われました。その中でも私が一番印象に残っているのは、村の方による挨拶の後に行った宣誓です。宣誓の内容は考えていましたが、いざ本番になって多くの人の前に立つと緊張から内容を忘れてしまいました。ですが、メンバーから宣誓良かったと言われたことで失敗ではなかったのだと感じ、とても良い経験になりました。

施設では自由な時間には子どもたちとの会話、サッカーやバスケットボールなどのスポーツなどを時間を忘れるほどに楽しみました。子どもたちの中には英語が堪能な子どももいたが、年齢の小さい子どもたちには私の言葉は通じませんでした。しかし、毎日交流をしているうちに言葉は通じずとも身振りや表情などから感情を読み取り、コミュニケーションをすることが出来るようになりました。どの子どもたちも素直な性格で、楽しいことや嬉しいことに対しては笑顔を見せて積極的にコミュニケーションをとってくれたことも言葉が通じない状況でも気持ちを通わすことが出来た大きな要因の一つであると感じました。ですが、数日経過して、少し環境にも慣れたことで気が緩み、それらのことに熱中するあまりに時間やスケジュールの管理が疎かになり、ボランティアをして少しでも手助けをしたいという目的のために参加しているのにも関わらず、スタッフの方に迷惑を掛けてしまうということも起こってしまいました。しかしながら、この出来事以来メンバー全員の時間やスケジュールに対する意識が向上し、よりメリハリを付けて活動を行い、活動の内容がよ



り密なものになったと感じました。

現地の高校を訪問したときには、日本語の授業の班での準備が十分とは言えない状況で、成功できるかとても心配していました。しかし、インドネシア人大学生の熱心な協力や高校生たちの日本語の理解度の高さのおかげで、日本語での名札作り・かるた・伝言ゲーム・フルーツバスケット・告白ゲームをして大成功を取めることが出来ました。

小学校では大縄跳びやバレーボール・サッカー・シャボン玉など、いろいろな遊びを通して交流を行うことが出来ました。子どもたちが笑顔で遊んでいる様子を見てみると、成功できたのだという実感が湧き、大きな達成感を感じました。

プリンピンサリ村での滞在期間中に毎日お世話になっていたホームステイ先のお宅では、帰宅するとドアを開けて出迎えてくれ、家を出る際には笑顔で送り出してくれました。また、イブが洗濯をしてくれたおかげで、いつも清潔な服を着て快適に過ごすことが出来ました。

ワークキャンプの日程が進み、終わりが近づくにつれてワークを行ったムラヤの子どもたち、プリンピンサリ村の施設の子どもたち、ホームステイ先の家族、そして18日間の日程を共にしたディアナプラ大学の学生たちとの別れもありました。メンバー全員がお世話になった全ての人たちとの別れを惜しみ、今までの思い出を振り返りながら最後の別れをしました。

<行く前と実際に行ってからの違いから、自分が考えたこと、学んだこと>

私がインドネシアへ行く前と実際に行ってからで違いを感じたことは、児童養護施設の雰囲気でした。始めでも述べたように、私は児童養護施設での親元を離された子どもたちは悲しい気持ちなどから落ち込んでいて、暗い雰囲気の場所なのかと考えていました。しかし、実際にはどの子どもたちもいつも笑顔で積極的に私たちと遊びや食事や学校での勉強などに取り組んでいました。この施設の子どもたちはスタッフの方や地域の人たちとのとても良い関係の上で明るい前向きな生活を

送っているのだということを実感しました。この経験から私の中の「児童養護施設の子ども＝かわいそうな子ども」という勝手なイメージはなくなりました。この経験を得たことで、大学や地域などで児童養護施設でのボランティア活動などがあれば積極的に参加してみようと考えています。

<今後の人生にどのように生かしていきたいと考えているか>

私は今回の国際ワークキャンプで様々な経験を得ることが出来ました。その中でも、英語の会話の能力は向上できたのではないかと感じています。期間中の行動を共にしたインドネシア人大学生や、児童養護施設の子どもたち、ホームステイの家族、その他の様々な人とのコミュニケーションは英語を用いたものがほとんどでした。それに加えて、エヴァリュエーションでは英語で原稿を作成し、それを発表するという活動も行いました。これらの活動がきっかけとなって英語の会話能力はインドネシア出発前に比べて向上しました。そして、キャンプ長という経験によって自ら率先して取り組む姿勢が一層身につき、私の消極的な部分を減らすことができたと感じています。これらの得ることの出来た貴重な経験を今後のキャンパス内での生活や、課外活動、これからは積極的に参加したいと考えている海外でのプログラムなどに活かそうと考えています。

## 国際交流について

国際教養学部 2 回生 樋口 さくら



### 第一章 行く前、自分が思い描いていたこと。

私は以前から海外に興味があり大学生になると「様々な国に行ってみたい」という思いがあった。一回生の時に学内の別のプログラムでタイを訪れた。そこでは異文化を知るたくさんの体験をすることができた。帰国後、私はもっと他の国に行き異文化を体験してみたいと思い始めた。海外の中でも私は東南アジアに興味を持った。そこで二回生になった時に、次の事にチャレンジしたいと思いこのIWCへの参加を決めた。

このプログラムの宿泊はほとんどがホームステイということで初めての経験なのでどのような家族なのか、バリの家はどのような造りなのか、お風呂が水と聞いていたのでもしかすると半屋外のような家なのかと想像をすることも多々あった。食事も自分の口に合う料理がないのではないかとバリでの生活に不安ばかりだったが、バリのことを知れる良い機会になると思い楽しみな部分もあった。

また、事前研修や合宿を行い、時間をかけて準備をしていた交流会や日本食のプログラム、日本語の授業がバリの人たちに喜んでもらえるか少し不安に感じていた。特に私は、アスラマの子どもたちと交流ができることに期待を膨らませていたのでアスラマの子どもたちのために文房具や遊び道具をプレゼントしたいと思い事前研修の段階でIWC31のメンバーや先生方に協力をしてもらい

集めた。また、体育館からも遊び道具を一部頂くことができ、それらを送ることができた。

### 第二章 実際のインドネシア（バリ島）の印象。

デンパサールの空港についてバスに乗ってホテルに向かう時にたくさんのバイクを目にした。日本の常識とは違って、ヘルメットを被っていない人や複数人での乗車など一見危なく感じるものが多かった。車間距離やスピードなど命の危険に関わりかねない光景がインドネシアでは当たり前のようだった。さらに驚いたのは日本車が思いのほか多く左車線という共通点もあり非常に親近感が湧いた。

ホテルに着いて部屋に入ると想像しているよりも綺麗だった。夜にお風呂に入るとお湯が出ず、水しか出ないのでとても寒かった。ホテルはお湯が出ると思っていたのでこの先の生活に不安を感じた。

インドネシアで出会う人々はみんな笑顔で明るい印象を受けた。特にディアナプラ大学の学生の6人はほとんど日本語を話せないが英語やポディーランゲージで積極的にコミュニケーションを図ってくれた。それによってすぐに親睦が深まったので不安が和らいだ。

バスでプリンペンサリ村に到着するとすぐに子どもたちが出迎えてくれた。音楽を流し、笑顔で握手をしに来てくれて、私たちが待っていてくれたことや歓迎してくれたことが嬉しく感じた。子どもたちは親と暮らせない状況でも明るく、前向きに暮らしているように見えた。施設も想像していたよりも華やかな部分もあり広く感じた。

ホームステイ先の発表後子どもたちが案内してくれたお家にインドネシア学生を含めた4人で行くと、ホストファミリーの方は笑顔で私たちを迎え入れてくれ、日本から持っていったお土産もすぐ喜んでくれた。その後、トラブルでホームステイ先が急に変更することになったがそのホームステイ先の家族は急な変更にも優しく笑顔で対応してくれた。そこでは1人のインドネシア学生との生活となった。英語でのコミュニケーションだったが打ち解けることができた。このことは私

にとって国際交流をするにあたって大きな自信を得る経験になった。私のホームステイ先の家はミニショップを経営しており、とても広かった。

中でも特に印象的だったのはプリンピンサリ村では近所での交流が深く家への行き来があり私が家に帰ると近所の方が「Selamat malam」と優しく声をかけてくれたのでバリの人は温かいなと感じた。

### 第三章 プログラム期間中に印象に残っているエピソード。

アスラマの施設に通うにつれて子どもたちが慣れ親しんでくれ、施設に行くたびに私の名前を呼んで駆け寄ってくれた。ある一人の女の子が私のことをイヴ（お母さん）と呼んでくれ、彼女はまだ小さく英語も話せないので言葉も通じないが毎日私のところまできて写真を撮ったり手遊びをして遊んだ。イヴと呼ばれたことは私にとって今までにない経験でとても嬉しかった。アスラマの子どもたちはみんな明るくて私たちが来ると声をかけてくれ一緒にバスケットをして毎日遊んだ。アスラマでの食事今年からは網戸で外と仕切られており、食事私たちの口に合わせて作って頂いて毎日美味しく食事ができてボランティアをするために行ったはずなのに逆に私たちが良くしてもらってばかりだと感じた。チャプレンの呼びかけで空いている時間に何かできることはないかと考えた結果、私たちは施設内のゴミ拾いをした。思っていた以上にゴミが多かったことに驚いた。

日本語の授業で高校と看護学校、中学校を訪れたが、私たちのグループで一番盛り上がったのは高校だった。歳が近いこともありカラーバスケットや告白ゲームを非常に楽しんでくれ、休憩時間も写真を撮るなどして交流を深めることができた。中学では学校側の急な変更のため即席のグループになったが無事に楽しく終えることができた。今までこのように人の前に立ち話すことや教えることはなく、このようなことが得意ではなかった私にはこの機会は苦手を克服ができるきっかけになった。

バリ島で生活をしていくうちに日本に帰りたい

気持ちと子どもたちやインドネシア学生と別れるのが辛くまだバリにいたいという気持ちが同じくらいだった。

村での最後の夜に離村式をしてイヴとパパにインドネシア語で手紙を読んだ。ご飯の後に子どもたちとお別れをしたが、子どもたちが泣いてくれて私も別れるのが寂しくて泣いてしまった。朝子どもたちが学校に行く前に来ると会うことができると聞き、私達は朝早くにアスラマに行った。子ども達との最後のお別れをし、笑顔で学校へ行くのを見送った。私のために手紙を書いた子や折り紙をくれた子、手作りのプレスレットをくれた子ども達がいた。それらは私にとって宝物になった。村を出る朝ホストファミリーに感謝を告げ、最後に写真を撮り家族たちと別れた。一緒にいる時間は少なかったが、朝ごはんを毎日用意してくれて私がシャワーを壊した時には次の日に新しいシャワーに変えてくれるなど、英語がほとんど通じなく挨拶や簡単なインドネシア語での会話しか出来なかったが、私を本当の家族のように優しく接してくれ第二の家族のような存在になった。プリンピンサリ村ではたくさんの出会いがあり生活をしていく上で日本にいると絶対に体験することができないことを体験することができた。

空港に向かう前の最後のバリでの夕食後、荷物がホテルに届いているはずだったが、トラブルがあり、1時間ほどフリーの時間ができた。その時間がインドネシア学生との最後の時間となったので手紙を渡して感謝を伝え合い、平野くんが作ってくれた動画を一緒に見るなどして過ごした。最後のお別れは17日間一緒に過ごしてきたのでとても寂しくほとんどの人が泣いてハグをするなど、日本人とインドネシア人と国も言語も違うが私たちは国を超えて仲を深めることができ、このプログラムを通じて私には大切な友人ができた。

### 第四章 行く前と実際に行ってからの違いから、自分が考えたこと、学んだこと。

日本食をホームステイ先の方やアスラマの人たちに食べていただくとき、私たちは分担して準備をした。その中で私は豚肉を切る担当だった。豚

肉といっても日本のようにスライスされた豚肉ではなく、今までに見たことのない大きな塊のブロックだったことに非常に驚いた。日本ではできないことができたので良い経験になった。また調理をする側に立ってみて作ってくれる方の気持ちがわかった。全て完食してくれることや美味しいと言ってもらえることの嬉しさ、大人数の分を作るためには時間と手間がかかるという大変さにも気がつくことができた。それからは食事をするときの自分の中での気持ちに変化し、作ってくれている人や食材を育ててくれた人にも心の中で感謝するようになった。他にもお風呂や洗濯など普段私がしていた生活がどれだけ充実してきたか改めて気づくことができた。

アスラマの施設に行く前に私の想像では子どもたちは親がいなく、寂しい思いをしていて内気になってしまっている子どもたちが多いのではないかというイメージだった。しかし実際に行ってみると、明るく元気でとても何らかの理由で施設に来ている子どもには見えなかった。私たちが行くだけで子どもたちは笑顔になって楽しそうにしている光景を見て、IWCに参加をしてよかったと思った。

## 第五章 今後の人生にどのように活かしていきたいと考えているか。

バリ島で過ごしている間インドネシア学生や現地の方とコミュニケーションをとる際はほとんど英語だった。私はほとんど英語を話すことができず、自分の言いたいことが言えなかったことが悔しかった。私はこれからもたくさんの国を訪れたいと思っている。そうなることややはり言語は必要不可欠なものだと思うのでこれからの大学生活で自由に使える時間を有効的に活用していきたいと思う。

このIWCでの経験は私にとって大きな自信となった。以前は団体行動になると内気で人任せにしてしまうことが多く、そんな自分を変えたいと思いこのプログラムに申し込んだ。自分の意見を言うことがこれまでは怖かったがみんなが聞いてくれたので考えが浮かぶと提案をして他の人の意

見を尋ねながら少しずつ自分が思っていることを言えるようになった。バリ島に行く前に比べると帰ってきてからの私は成長した自分になったように思う。なので、これから先、私が感じたことや思ったことは積極的に伝え、考えを共有できるように残りの大学生活や国際プログラムなどの機会ですらに自分を成長させて社会に出てもそれらの経験を活かせるようにこれからも積極的な姿勢を持ち続けたい。

## インドネシアの文化および生活について

国際教養学部 2回生 平野 順也



### 第1章 行く前に自分が思い描いていたこと

私は、このIWCに参加するまで、インドネシアと言われても場所もわからず、イメージもパッと出てきませんでした。出てきたとすれば、「アジアの生活の貧しい雰囲気のある場所」でした。しかし、そのイメージはすぐに変まりました。それは、参加する前に行われたインドネシアに関するテストからです。インドネシアに関する資料をいくつか貰い、目を通しました。そこで「バリ」「ジャカルタ」というワードを目にし、「アジアの生活の貧しい雰囲気のある場所」から一気に「リゾート地」へ変化しました。私の中では、インドネシアという国の名前よりも「バリ」「ジャカルタ」など地域の名前の方が印象的でした。さらに資料には、島が約13,466もあると書かれており、島の間の移動や、生活環境、島による文化の違いに興味をそ

そられました。事前研修を受ける前には、少しリゾート地の様なものを想像していて、現地での生活ももしかしたら、不便なく生活できるのでは？と少し期待をしていました。

しかし、事前研修が始まり授業でインドネシアでの生活の話を聞くとその期待は、なくなりました。一番聞いて辛かったのがトイレ事情です。普段家では、トイレットペーパーを使い、使用後はそのトイレに流しています。ですが話を聞く限り、流すことができる場所は、限られている。ペーパーを使わずに素手で水を使って汚れを取ると聞いて驚き、落胆しました。そして、トイレは選んで使用しようと心に決めました。その他様々なインドネシアに関する話を聞き、現地に行くにあたって、生活に不安を少し抱いていました。勿論、その生活を体験することは良い経験だと自分に言い聞かせながら。

生活以外にも、行く前に気になっていたことがあって、それはインドネシアと日本の関係です(文化的な面)。事前研修では、ドラえもんやクレヨンしんちゃんが人気だと聞き、さらにジャカルタにはAKB系列のJKT48が活動をしています。日本のことがどれだけインドネシアの文化に浸透しているのか気になっていました。

## 第2章 実際のインドネシアの印象

1章で述べたイメージや疑問を持ちながら、実際にインドネシアに行きました。

空港に到着し、すごく立派な建物で、しかも綺麗で初めに思い描いていた、リゾート地のイメージに近づいてきました。ですが、空港を出ると、外にはたくさんの方がいました。その人たちをよく見てみると時々靴を履いていない人もいました。外で寝ている人たちもいて、リゾート地のイメージがまた変わりました。その人たちがなぜ靴を履いていないのか、寝ているのか理由は分かりませんが、良いイメージは湧いてきませんでした。そこから、バンに乗って移動です。空港から外に出て景色を見てみると、去年行ったタイの景色にとっても似ていて驚きました。それは道でのバイクの量、建造物や旗の多さが似ていると感じました。

少しして空を見上げると、何か黒い影が見えました。初めは飛行機かな？と思ったのですが、車内の誰かが、「カイト」だと教えてくれました。後でインドネシア学生に聞いたのですが、「カイト」はよく行われる遊び「カイト」の大会もあることも分かりました。私はカイトを見て、凧揚げを似ているなど感じ日本と何か関係があるのかと考えました。さらに道沿いにサークルKがあり、ショッピングモールには日本のチェーン店がよく見られ、日本の企業のインドネシアへの進出がよく見られました。そこで日本とインドネシアの違いを感じる事ができました。私が訪れたマルカメ製麺には、インドネシア限定メニューがありインドネシア人の好みに合わせているのかな？と考えました。さらに日本のはなまるうどんやマルカメ製麺といったうどんチェーン店は、注文してからその場で作りあつという間に完成させます。ですが、インドネシアでは注文してからゆっくりと作業を行い、従業員同士で楽しく話しながら作業をしていました。勿論商品の出てくるスピードも遅くてびっくりしました。さらにドミノピザにも行き注文しましたが店員さんのやる気は殆どなく、少しイラつきもしました。「外国人に日本人は真面目でせっかちだ」と言われている理由が少しわかったような気がしました。

さらにホームステイ先でも様々な点に気がつきました。それは男女での役割がはっきりと分かれていることです。例えば女性は必ず朝早くに起床し朝ごはんを作り主に家事をする。そして男性は仕事に行くということです。日本でもまだ普通に行われているようですが、私は現代の日本に比べてよりきっぱりと分かれていると感じました。また、家の作りにも特徴がありました。日本では2、3階建ての家は一般的に見られますが、プリンビンサリ村では、すべて一階建ての家でした。理由はいくつか考えられます。まず、日本に比べて土地が安く、広いこと。または技術的な問題。住民たちが必要としていない。というのが考えられました。そしてお風呂も日本と違いました。基本は水でシャワー(マンディ)を行います。私は始めプリンビンサリ村が田舎だからお湯が出ないと

思っていました、インドネシア人学生に聞くと普段から水でやることが多いそうです。理由は暑いからだそうです。「日本では夏でもお湯でシャワーを浴びるよ」というとすごく驚いていました。

### 第3章 プログラム期間中に、印象に残っているエピソード

IWC参加中に様々な体験をしましたが、その中でも特に印象に残っている事は、バリの儀式ンガベン (ngaben) です。

ホームステイ先の向かい側の家に人ばかりができていて、何事かな？と覗いてみると豚が一匹丸々運ばれていました。そして、集まった人々(殆ど男性)が大きな包丁を持ち一斉に捌き始めました。豚はあっという間に解体され、解体をした肉を運ぶ人、大きな肉の塊を切り分けて行く人、腸を洗う人で分れていました。話を聞くとこの腸を洗って豚一匹からウルタンと呼ばれる長いソーセージを作るそうで、とても伝統的な食べ物だそうです。その後なんの儀式を行うか聞いたところ、その家に住んでいたおばあちゃんが亡くなったそうで、次の日にお葬式が行われるとの事でした。

そして次の日の夜、ワーク後から家に戻るとお葬式が行われていました。お葬式ということもあってあまり中に入るのは失礼だろうと思い、少し離れたところから様子を見てみると、中から1人おばさんがやってきて、「写真をとってもいいよ」と言ってくれました。さらに中を案内すると言ってくれました。私はお言葉に甘えてインドネシア人学生と共に中の方へと入って行きました。日本のお葬式と比べてとても和やかな雰囲気で行われ、参加している人たちの多くに笑顔がみられました。楽しくお酒を飲んだり食事をしている様子でした。見学が終わり、ありがとうございました。と去ろうとすると次は他の住民の方からは非もって中をみたらどうだいと声をかけて頂きました。そして、ある部屋に入ると大きな棺と亡くなったおばあさんの遺影がありました。こんな感じなのかあと見ているとなくなったおばあさんの遺族らしき人達が棺に掛かっていた、布をめくりおばあさんを、みせてくれました。突然の出来事

だったのでとても驚いたのを覚えています。さらに写真をとるなよと言ってくれましたが、流石に失礼かなと思い遠慮をしました。

日本のお葬式と違った雰囲気のお葬式で、悲しい雰囲気ではなく少し楽しい感じの雰囲気でした。さらに私のような突然現れた見ず知らずの外国人でも快く迎えていただき、日本で同じ状況になったらまずありえないと感じました。

### 第4章 行く前と実際に行ってからの違いから、自分が考えたこと学んだこと

私がインドネシアに行く前、インドネシアに対して様々なイメージを抱いていました。それはどちらかといえばマイナスのイメージですごく先入観に捉われていたと思います。現地についてからあまり目にしないような料理や出来事があっても、「衛生状態がー」、「どうせ味付けがー」等チャレンジしてもいないのに、勝手に決めつけて良い機会を逃している事がありました。しかし、日程の中間あたりになるとその考えが段々薄れていき、色んなことにチャレンジをするようになりました。そのお陰で先程書いたお葬式のエピソードのような貴重な体験ができ、今まで食べたことのないような味や匂いが体験できました。もし考えが変わっていなかったらインドネシアでの経験は今に比べて半分以下になっていたと思います。もし初日からこの考えだったら経験は今以上のものになっていたと思います。

先入観に捉われず一度チャレンジしてみる、それから理解をする(しようとする)ことが大切だと学ぶことができました。

次に英語の大切さです。私たち日本人ははやくて小学5年生頃から英語の授業を受けています。それなのに、話せる人はごく僅かで、簡単な単語さえ分からない人も多いです。ディアナプラ大学の学生たちは、私達と殆ど変わらない年齢にも関わらず、完璧ではなくとも英語を話す事ができます。彼らはこうして私達のような外国人が来たとしても、積極的にコミュニケーションをとる事ができ、豊かな情報を得て良い経験を手にする事ができます。英語が話せる、話せないということ

は自分にとって様々な面で、とても大きな違いがででくると思いました。

## 第5章 今後の人生にどの様に活かしていきたいと考えているか

このIWCを通して、様々な経験をし、先程書いた通りに大切な事を学ぶ事ができました。先入観に捉われれないということは、今後また海外へ行ったときに良い経験が多く得られるようになると思います。さらに海外へ行ったときでなく、日本での生活でも違いは出てくると思います。現代の日本は、様々な情報源があってそれはSNS、TV、インターネット、人々の噂などです。沢山の情報があって今まで私は本当かどうか不確かな情報で物事を、決めつけていました。自ら視野を狭くし、可能性を狭めてしているように感じます。今後生活していく上で自分の意思や考えをしっかりと持てるように成長していきたいです。

そして、今後の英語の上達に向けて大切経験ができたのでこの経験を今後の就職や、このようなプログラムに参加する際に役立てるように「英語を自分の武器に」できるように努力をしていきたいです。

## インドネシアで感じたこと

国際教養学部 2回生 小椋 良平太



1

私は大学にいる間に、海外で外国人と接したり、

その土地の食べ物や風習、文化に触れたいと思い今回の国際ワークキャンプに参加しました。具体的に例をあげると、インドネシア人とインドネシア語で会話することやインドネシア料理を食べること、インドネシア独特の文化を現地で体験したいと思っていました。このなかでも特に興味を持ったのがインドネシア料理です。日本のもちもちしたお米とは違い、さらさらとしていて長細いお米を食べたことがないと、ミーゴレンやナシゴレン、サンバルといった日本ではあまり聞かない料理や調味料に興味をもちました。ただ、普段食べられていない料理なので下痢や腹痛などの体調不良が心配でした。

2

実際にインドネシアに着いて一番驚いたのが気温です。私の中で東南アジアは暑いイメージがありましたが、日本を出発した時よりも涼しく感じました。そして次に驚いたのが道路が車やバイクで溢れかえっていることです。日本では考えられないくらい近い距離で走っているので事故が起きてしまうのではないかとドキドキしたのがインドネシア、パリに着いた時の第一印象です。パリに着いた初日のホテルで初めてインドネシア料理を食べました。思っていたよりも味は薄かったのですが、右手にスプーン、左手にフォークといった慣れない食べ方やさらさらでまどめにくいお米、サンバルという調味料の辛さに苦戦しました。しかし、異文化体験をしていると感じ、嬉しかったです。2日目にはプリンビンサリのアスラマへ向かいました。アスラマに到着すると子どもたちが笑顔で手を振りながら歓迎してくれたのをよく覚えています。また気になったのが食堂に網戸が設置されていることです。インドネシアはハエが多く、ハエを媒体に病気になることがあります。私たちが病気にならないようにするためにわざわざ網戸を設置してくれたのです。その日からプリンビンサリでホームステイが始まりました。事前研修で話は聞いていたけど実際に見て、やってみて驚いたのが水浴びのマンディーです。夜に冷たい水で水浴びをすれば風邪をひくと思っていましたが、いざやってみると意外と気持ちよく、すつき

りました。しかし、インドネシアの家は風通しを良くするために通気口のようなものがあり、そこからトカゲや虫が入ってきて、これがインドネシアでは普通なんだと思いました。翌日は入村式でムラヤのアスラマへ向かったのですが、その前にホームステイ先のイブから朝食にインドネシアの甘い菓子パンと甘い紅茶をいただきました。思っていた以上の甘さに驚きました。入村式ではムラヤの子どもたちがガムランの演奏や伝統舞踊を披露してくれました。私はガムランの音にひかれました。鉄琴のようだけど柔らかい感じで思わず聞き入ってしまいました。舞踊も指や目の動きが細かくてすごいと思いました。日本ではあまり伝統舞踊や音楽を小さい子どもがしているイメージがなく、日本では失われていると感じました。入村式が終わったあとは早速プログラムの中心のワークが始まりました。雨で倒れた壁の補修のために土やレンガを運びました。学生だけで運ぶと思っていたら、ムラヤの子どもたちも参加してバケツリレーをしました。言葉は通じないながらも「このバケツは重いぞ」というようなやりとりができました。

バリに着いて3日目と10日目には高校、看護学校をそれぞれ訪問しました。私は日本語班で準備をしましたが成功するか本当に不安でした。しかし、高校生、看護学生ともにノリと勢いがよくて想像以上に盛り上がりました。日本の高校生だと面倒臭そうだったりやる気がなさそうですが、インドネシアの学生は真面目で真剣に取り組んでくれました。小学校を訪問した際は、日本語の授業というよりも遊びがメインでした。その中で縄跳びやシャボン玉があり、小学生に大人気でした。

ワークキャンプ中の日曜日は教会へ礼拝をしに行きました。キリスト教の教会なのにバリ風の建物が目を引きました。また、私は今まで礼拝をしたことがなかったのでこれが初めてでした。教会の中も風通しが良い設計で大学のチャペルのような感じではありませんでした。建物すべてが風通しを考えているんだと感じました。

### 3

バリに着いた日のホテルのことはよく覚えています。一緒に活動するインドネシア学生と合流して、一緒にご飯を食べました。お互いの自己紹介の時に、現地コーディネーターのスイクラマさんが「味の素」と日本人なら聞いたことのある言葉を話し、日本人は大喜びでした。日本のことをよく知っているだけあってさすがだと思いました。また、同じテーブルでご飯を食べていたインドネシア学生のアリスはAKB48が好きだと話してくれました。日本のアイドルを知っていて、さらに好きだというので私もなんだか嬉しくなりました。

教会の礼拝で、牧師の説教の時はインドネシア語で何を喋っているかはわかりませんでした。時々笑いが起きているのには驚きました。説教というところしなさいというようなイメージがあったからです。プリンビンサリが小さい村だからこそ牧師と村の人との距離が近いのではないかと感じました。

### 4

インドネシアに行く前と実際に着いてから感じた違いや考えたことがたくさん「あります。一番感じた違いは、私が出会ったインドネシアの人は英語が流暢なこと、そして日本語を知っていることです。事前研修で勉強したインドネシア語よりもほとんど英語で会話することができました。また、プリンビンサリ村の人が「こんにちは！」と挨拶したり、高校を訪問した時には「お兄さん」と声をかけられたりして驚きました。

他にも、田舎なので交通手段は車かなとおもっていたら、バイクやスクーターがメインでした。その中には小学生がスクーターを運転している姿も目にしました。デンパサールのような都市部ではヘルメットをかぶっていない人は少なからずいるものの、そんなに多いわけではありませんでした。しかしプリンビンサリやムラヤでは逆にヘルメットをかぶっている人が少なかったです。他にも、インドネシアでは犬を放し飼いにしているので、1日の活動が終わってホームステイ先に帰る



ときは毎回吠えられたり後ろについてきたりしました。また、プリンピンスリの方々には寝るのが早くて、10時頃には電気を消していました。人が通ると犬が吠えるので、夜遅くに歩くのは近所迷惑になるんだと思いました。日本では考えられないようなことが当たり前に行われていてカルチャーショックの連続でした。

アスラマの子どもたちと遊んでいると、ふと自分が親元を離れていることを思い出しました。子どもたちは事情があって親と離れ離れになっています。小さいときから親と離れてアスラマで生活していますが、親に会いたい、一緒に暮らしたいと思っているはずで、それなのにそんな顔はせずに、毎日笑顔で私たちに接してくれたので、この子どもたちは強いんだなと感じました。離村式のあと、私は思わず涙ぐんでしまいました。あっという間に時間が過ぎて子どもたちと別れなければならなかったからです。その時に子どもたちが「Don't cry」と励ましてくれました。短い時間でたくさんの思い出ができ、きっと子どもたちも別れが辛いと思うのに励ましてくれて、本当に強い子たちだなと感じました。

## 5

18日間のワークキャンプの中で学んだことがたくさんあります。その中で特に大切だと思うのは「しっかりと耳を傾ける」ことです。お互いに違う国の人で話す言葉も違います。それでも相手が何を伝えようとしているのかを理解しようとする姿勢が大切です。

他にも、私は今まで小さい子どもと接するのは苦手でした。しかし、アスラマの子どもたちと交流したことで、子どもたちの笑顔や楽しそうにしている姿を見て、子どもは可愛いんだなと思うようになりました。これは今回のワークキャンプで得たなかで一番重要なのではないかと思います。今まで将来のことについて考える中で、子どもに関係することは全く考えていませんでしたが、教育という選択肢が増えたことによって将来に対する視野が広がったのではないかと考えています。

## 私がインドネシアで感じたこと

経営学部 1回生 林 雅貴



### 一章「インドネシアに行く前の気持ち」

最初にこのプログラムを知り、事前研修がスタートするまでの期間はただただ待ち遠しかった。インドネシアは、バリは一体どんどころなのだろうと、異国の文化や、空気感を想像し、きたる事前研修を待ちわびていた。

そんな思いの中、事前研修がスタートし、インドネシアの文化や国風、言語などを学び始めた。この頃はモチベーションも保たれていた。むしろ日々の学習で「インドネシアにはやく行きたい。」という気持ちがどんどん強くなってた。しかし、旅立つ直前の気持ちは最悪だった。インドネシアについて学ぶにつれ外国特有の病気や危険性、不便さなどを知り、かなりモチベーションが下がっていたからだ。これからケータイは使えない、ご飯もおいしくない、トイレなどの衛生状況も悪い、さらにはテロの可能性もある、そんな風に考えていたのを覚えている。旅立つ前の私はインドネシアの悪いところしか見てなかったのだ。

### 二章「実際バリにきてどう感じた」

『想像していたよりはるかに綺麗』というのが最初の印象だった。

空港の設備は一見日本と変わらないように見えたし、警備員のもつ警備具は日本で使われているものと同じレベルのものだった。しかし、空気感はインドネシア特有のものがあるなと感じた。二

つ例を挙げてみる。

まず一つ目は交通の事である。

道路に出てみると、明らか一人しか乗れない原付バイクに三人以上乗っている人たちが数えきれないほどいたし、ノーヘルメットも大量発生、車は衝突するのではないかとひやひやする運転をするし、そもそも交通ルールはあるのかと疑うレベルだった。こういった点でインドネシアはまだまだ発展途上の国なのだなと感じられた。

また、そういった文化なのかもしれないなとも考えた。

二つ目はごみ箱の設置数である。

日本は世界的に見てごみ箱が少ない事で有名だ。それに慣れているから特別目にとまったのかもしれないが、それにしてもごみ箱の量が多いなと感じた。道路を歩けば一定間隔で置いてあるので便利だと感じた。

### 三章「ワークキャンプの体験の中で私が驚いたこと、

またその体験から生まれた自分自身の考え」

あれはインドネシアに着いてから四日目の八月二十四日の木曜日、最初の日本語プログラムで高校に訪れた時の出来事だった。これは私の印象であるが、今回IWCで行われた全てのプログラムの中で、この日本語プログラムが最も、皆が真剣に取り組んでいたと考えられる。だからこそ、このプログラムの準備は皆一番気合いが入っていたし心配もしていた。「こんな授業の進め方で大丈夫かな」、「ちゃんと伝わるかな」と直前まで不安な様子だったのがよく印象に残っている。

そんな気持ちの中、最初の授業が始まったのだが、予想とは裏腹にインドネシアの学生たちは積極的に授業に参加してくれ、僕たちを助けてくれた。これには非常に驚いた。相手は高校生、正直話は聞いてもらえないだろうと思っていたし、何人かの子どもたちは反抗的な態度をとるものだと想定していたからだ。事実、日本でこのようなプログラムを行えばそうになっていただろう。いやもっと酷かったかもしれない。しかし、彼らは私たちに積極的に協力してくれた。インドネシアの学生は日本のように恵まれた環境で育っていな

い、むしろ厳しい環境のなかで過ごしてきたはずだ。だからこそ、他者への思いやりや、優しい気持ちを持っているのだなと感じた。また、この一件でインドネシアの学生たちの思いやりに感動したのだが、同時に悲しい気持ちになった。

日本は世界に誇る技術を持っていて、今もなお進化し続けている。

しかし、その技術が進化し便利な世の中になればなるほど、人として優しい気持ちが失われていっているのでは、と感じたからである。

もちろん日本にも優しい心を持っている人が存在しているのは理解しているが、その割合が減ってきているのも事実。

今、自分が置かれている環境が恵まれているのだと理解し、皆が彼らのような優しい心を持ってほしいと考えた。

### 四章「思い描いていたことと実際のエピソードとのギャップにどう感じたか」

インドネシアに着いてから、それこそ驚かない日などなかったのだが、特に意外だったのは『食事』が美味しかったことである。一章でも述べた通り、私はインドネシアの食事は美味しくないと思い込んでいた。しかし、インドネシア、特にアスラの料理は私の予想を遥かに超える味だった。日本の食事にも引けを取らないのではないかと、思う場面も多くあった。食事の時間を楽しみにワークや振り返り、ミーティングなどに精を出した生徒もいたほどだ。私たちの為にここまでしてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

もう一つ驚いたことがあった。それは、アスラマの子どもたちの事だ。事前研修で彼らの話を聞いたとき、親にも会えず自由が少ない生活に嫌気をさしている子どもたちを想像していたのだが、実際はその真逆だった。運のいい子で年に一回親や家族に会えたらいい方だと聞いた。それでも、彼らは毎日楽しそうに生活している。年上の子たちは年下の子の面倒をみて、まるで兄や姉のようにふるまっていた。その姿に私は強く感銘を受けた。そして、改めて当たり前のように家族に囲ま

れて育ってきた環境が、恵まれているのだなと知り、感謝して生活しなければならないなと痛感した。

#### 五章「今回得た経験を今後どういう風に活かせるか」

今回のプログラム中、話されている言語はほとんど母国語のインドネシア語であり、私たち日本人学生は理解できない場面も少なくなかった。しかし、私たちは、インドネシアの方々とコミュニケーションをとらなければならない。私は外国語が苦手なので、ノリや勢い、ボディランゲージなどを使い意思の疎通をしていたのだが、そんなものより、より確実に伝える方法があると気が付いた。『相手の立場に立ってみる』ということだ。自分が聞くのではなく、自分が伝える側ならどう考えるかと想像してみる。そうすることにより、相手との関係を徐々に近づけることの大切さ分かり、回数を重ねるたびに、相手との距離を近づけるよう行動できるようになった。これは言葉の通じない外国人に限ったことではない、日本でも、またどのような場面でも活かす事の出来る考え方である。

私はひとまずこの考え方をアルバイトの場で活かしてみるつもりである。どんな忙しい時でも、予想外の事が起きても、お客様には感じよくふるまう事を徹底していこうと思う。また、そういう風に意識を高く持つことにより、今後の学生生活や就職活動に活かす事ができると私は考える。

## インドネシアに行って感じたこと

国際教養学部 1回生 松村 彰大



### 1. 行く前に私が思い浮かべていたこと

私は授業でこのプロジェクトがあることを聞いた時に絶対に参加したいと思いました。このプロジェクトはワークだけでなく子ども達やホストファミリーの方へ日本料理を私たちが振る舞う日本食パーティー、アスラマの子ども達との交流会、そして現地の学生たちに私達が先生となって日本語を教えるなどの活動内容でした。私は海外で日本語を教える機会などないし経験してみたかったし、私は塾のアルバイトをしていたので小学生や中学生と一週間に一回勉強を通じて触れ合う機会があり、日本の小学生や中学生とインドネシア人学生では勉強に対する姿勢の違いはあるのかと思いました。また私がこの活動を志望する最大のきっかけとなったのは、私がインドネシア語を第二言語で専攻していたことでした。私がこの言語を選んだ理由など特になく、なんとなく選びました。実際に学んでみると簡単で面白く感じ、この活動を通して語学力を向上させるのが目的でした。

事前研修が始まってから私達は現地での活動を考えるために日本語班、日本食班、交流班、しおり班の4つに分かれ、私は直感で選んだ日本食班に所属しました。この班は一番人数が多かったですがメニューが決まるのに時間がかかりました。私達が話し合った結果、炊き込みご飯と豚汁とわらび餅になり、事前研修の間で最低一回ずつ作り

ました。私たちはとてもおいしく感じましたが、インドネシア料理は辛いものと甘いものが多いと聞いて日本の料理が口に合うだろうか、何人が当日来て調理時間はどれくらいかかるかなど当日になってやってみないと分からないことが多くて不安な部分もありました。

事前研修の中で私は30期の皆さんが途中帰国になり今年も途中帰国になるようならこの活動はなくなるかもしれないと聞かされた。研修の中で健康オリエンテーションがありカットフルーツは食べてはいけなく、蚊には十分注意するなど去年の経験から体調管理には気を配らないといけないし食事には気を付けなければならないと思った。

## 2. 実際のインドネシアの印象

様々な思いを持ってインドネシアに着いた時の第一印象は少し熱いと思うくらいで海外に来た実感などまったくなく実感がわいたのは2日目の午後でした。初日は半日飛行機の中で夕方にホテルで現地の大学生5名と交流をするだけで終わりました。2日目の午前中は現地の学生と日本語の授業の為のミーティングで午後はプリンビンサリ村まで移動し、アスラマ（児童養護施設）に着き、その子ども達と出会いその時に初めて実感が湧きました。私たちが初日に泊まったデンパサールはバイクや車がとても多く、インドネシアは空気が澄んでいないと思っていました。しかし、プリンビンサリ村は交通量も少なく空気がきれいで、夜は日本では絶対に見ることのできない量の星を見ることができたので、自然の部分では羨ましさを感じるほどでした。生活の中で私は何も不自由に感じることはありませんでした。事前研修の中でお風呂は水シャワーという事を聞いていたので実際体験してみても思っていた通りでした。

## 3. プログラム期間中に、印象に残っていること

私がこの期間中に印象に残っていることは3つあります。まず私が印象に残っていることは、日本語の授業をした時です。私は高校生、中学、看護学生を担当することになり、その中で最も印象に残っているのは高校生の授業です。高校生の授

業をおこなったのは4日目の午前中で、2日目3日目に打ち合わせをする時間がありました。私は打ち合わせなど別にしなくてもその場の雰囲気や何とか乗り切れると思っていて最初ミーティングで自分の意見を言いませんでした。しかしインドネシアの学生はそのゲームを何分行い司会はだれが担当し休憩はいつとるなど事細かに私たちに質問してきました。最初は真面目すぎると感じていましたがよくよく考えてみれば私達が主となる授業で、言葉の壁は絶対あるのに即興でできるわけがないし、普通の大学生活の中で授業内容をその場で作る先生などいるわけがないと思いました。ミーティングを行い万全の態勢で臨んだ最初の日本語プログラムは、高校生のノリと元気の良さに驚かされました。私たちが行った内容は、名札作り、カラーバスケット、かるた、伝達ゲーム、告白ゲームでどれも盛り上がりなんとか成功しました。このプログラムで感じたことは、私たちが笑顔でないと生徒さんも楽しんでもらえないし、笑顔を作ることができるのは心に余裕があるから、それは事前準備をしていたからであると感じました。現地の学生にあの時気づかせてもらって本当に良かったと思っています。

次に印象に残っているのは日本食パーティーのことです。私達はインドネシアに行く前に120人前を用意するつもりだったが当日来る人数は180人と聞かされました。今更何もできなかったが急なアクシデントがまた続きました。豚汁の味噌が思ったより少なかったことでした。日本人の口には合う味だったが実際食べてもらわないと分からない状態で、ご飯の炊きあがりに時間が掛かっていたこともアクシデントのひとつでした。事前研修と合宿で2回作っていたが当日は私達が準備期間で使っていた鍋よりも大きな鍋を使用したので火の通りが悪かったのか、私たちは時間内に出来るのを待つしかなかったが、プリンビンサリのスタッフの手伝いもあり時間内に完成はしました。子ども達に味の感想を聞いたところ全員がおいしいと言ってくれましたが、豚汁を残す子ども達が多くいて子ども達は言葉では気を遣っていると感じました。また私が反対の立場で、現

地の子ども達が私たちのために料理を作ってくれておいしくなくても気を遣っておいしいと言うと思います。私が5歳や6歳の時に言えるだろうか？絶対にまずいと言うと思いましたが子ども達はおいしいと言ってきて大人だなと感じました。また私達で作った料理を子どもたちが残してくれることで毎日僕たちの食事を作ってくれるスタッフの気持ちを知れた気がしたし、料理に愛情を込めるということを知れるいい機会でした。後日改めてインドネシア学生が子ども達に何が美味しくて何がまずかったか聞いてくれたところ、炊き込みご飯は少し味が薄いがおいしい、豚汁は美味しくなく、わらび餅は美味しかったそうだ。この結果から、私たちはおいしいものも、美味しくないものも作れ、来年インドネシアに行く32期の皆さんが参考にできるのではないかと思うとやってよかったと思う。32期の皆さんには美味しいものをぜひ作っていただきたいと思いました。

最後に私が印象に残っているのはワークでのことです。私達が行ったワーク内容はムラヤでの堀づくりが4日間とプリンビンサリで1日畑作業を手伝う内容でした。ワークは私達IWCのメンバーだけで行うとは思っていましたが、ムラヤやアスラマの子ども達も手伝ってくれました。それも私が知っている中で誰一人面倒くさがっている人はいなかったことに私は彼らの人間性の良さを感じました。日本語プログラムでも私が出会った人々は本当にまじめな性格だと思いました。

#### 4. 行く前と実際行ってからの違いから、自分が考えたこと

私が行く前と行ってからの違いから考えたことは、異文化体験はやってみると意外と面白いと思いました。私はインドネシアに行く前、ホームステイ先は雑魚寝で洗濯も自分達で行うし、何よりお風呂のシャワーが水しか出ないと聞いていたので日本にいるときと真逆の生活になるので大変な生活になるのではと思っていた。しかし、実際に生活してみて洗濯もやってみると意外と面白かったし、シャワーも浴びてみると思っていた以上に気持ちよかったし、部屋にはベッドもありインド

ネシアにいる間は何も不自由なく生活できたと思いました。このことから私は行く前から心配しすぎない方がよかったなと思いました。私が泊まったホームステイ先は、朝私たちが家を出る前、パンとお茶を持ってきてくれたし、洗濯の時は洗剤を貸してくれたのでその家がたまたま裕福で何不自由なく生活できたのかもしれないが、それでも日本ではすることのない体験ができたし、何事にもやる前から背中を向けては何も始まらないし、嫌々やってみようと思う気持ちでやるのも違うと思う。インドネシアにいる間は生活の中でちょっとした些細なことが自分の学びになりました。自分からやってみようと思う気持ちで物事に取り組むことが大切であると改めて感じる事ができた。

#### 5. 今後の人生にどのように生かしたいと考えているか

私は、このワークキャンプを通して自分のやりたいことができることは本当に裕福だと感じました。この活動に参加することも自分のやりたいことでこの活動に参加できたことで国を超えている人々とも知り合えることができたし、このプログラムに参加したことでふとした瞬間やいつも当たり前のように大学に通えていることが幸せに感じるようになりました。この考えは生涯忘れることがないであろうし、今後の人生に今よりもっと人との関わりの時間を大切にしようと考えています。

## 異文化

国際教養学部 1 回生 森 千芳



約2週間インドネシアに行き実際に現地の人々と関わる中で、自分の考えや価値観が変わった。また、実際に異文化に触れ日本とインドネシアの比較をすることが出来た。

出発前に描いていたインドネシアのイメージは実際に行ってみると全く違った。

それは、ムラヤやプリンビンサリの子ども達やアスラマのことだ。色々な事情で施設に入った子どもたちはおとなしく、施設も小さく暗いイメージだった。だが、施設には大きな木々に囲まれているグラウンドがあり、シンガポールからのボランティア活動によりカラフルな壁があったりなどして、大きく明るい施設だった。そして子ども達はイメージとは全く違い、元気で協調生と自律性があると感じられた。もちろん十人十色ではあったが、毎日子ども達から駆け寄り挨拶をしてくれて私達の出し物のダンス練習に参加したりなどして、積極的で子どもらしかった。また、下級生の洗濯物を上級生がすること。遊具などが木に引っかかってしまった時は遊具が取れるまで木を揺らし続けるなど、問題を自分達で解決する自立性や協調性には驚いた。それは、自分自身が一番かけている点であると思った。

一方で都会に出ると交通マナーが悪く、スピード違反で事故があるなどして出発前に描いていたインドネシアと重なる点もあった。

実際のインドネシアの感想は貧富の差が激しいと感じた。最終日の観光で屋台に行った際に、私たちがバスから降りてきた瞬間から帰りのバスに乗り込む時まで、終始品物売る人々の姿があった。一番印象深く残っていることは、頭に小さいバナナの束をのせた女性が一本のバナナをお土産にと私達に差し出した。私達は一本のバナナを受け取り帰ろうとすると、今度はバナナの束をビニール袋に入れ、無理やり押し付けられてお金を要求された。なんとかその場から立ち去り、その女性がまた新たに観光客にバナナを売っているところが目に入り止めようとする、腕をはたかれた。

このような光景は日本ではないだろう。だが、横にいた先生から「生きるためにしていることだから」という言葉を聞き、その女性への怒りは消えた。やり方がどうであろうと、その女性は生活や家族の為に手段を選ばず必死で、小さいバナナを売り続けていると思った。そして同じ日にショッピングモールへ行き、屋台とショッピングモールの雰囲気や人の違いに気付いた。ショッピングモールでは高級店で買い物をしている人やブランド物を身にまとっている人、そして家族で食事をしている人がいて私達がよく日本で目にする光景だった。日本にいる時にこのような光景を見てもおそらく何も感じることも考えることもないだろう。

そして次にインドネシア学生との交流の中で、インドネシア学生と日本人学生の英語の語学力の差について疑問を持った。それは、英語を本格的に勉強し始めた時期はだいたい同じであるのに、なぜ彼らは第2外国語である英語を流暢に話すことが出来るのだろうかという疑問である。その理由の1つとして、英語の必要が日本では感じられないからである。例えば、フィリピンは英語を話す人口が多い国とも言われている。理由としては海外への出稼ぎ労働、つまり海外就学に目を向けており、国外でも仕事のチャンスを掴むための手段として、英語の必要性を感じながら勉強しているということが大きな理由だと思う。

一方日本は母国語である日本語だけでも十分な教育を受けられ、仕事にも就けることが出来る為なのだろう。もう1つの理由としては日本人ならではの完璧主義な考えが邪魔をしていると思う。アジアの人々の英語の発音は聞き取りにくい、文法のベースや単語という土台がしっかりと固まっており、英語を自分達のものにしていると感じる。一方日本はアメリカ、イギリス英語をいつまでも追いかけていて、完璧な発音ではないから英語を話す事を恥じて避けているという感じがする。この2つの理由から今後自分自身がどのように英語と向き合い勉強していくのが分かった。

また、ルームメイトの彼女の勉強量には驚いた。毎朝5時に起きて日本語の勉強をしていた。ホームステイ先に帰ってからもその日の振り返りとその日に覚えた日本語の復習に励んでおり、良い刺激になった。

プログラム期間中に印象に残ったエピソードは初めて実際に異文化に触れた事だ。

約2週間インドネシアで生活をして、無駄な時間が少なく1日がすぐに終わることが多かった。日本では洗濯機など色々な機械を使用して、常に同時進行に何かをしている。その為、日本では空いている時間が多いから、ながら作業が多い。インドネシアでの生活は1つ1つこなしていくという感じだった。お皿は食洗機を使わずに手で1枚1枚洗い、服も手で洗う生活だ。一見不便そうに見えるが現地の人々は生活していくうえで、それが日常のことだというふうにしており、そこに感じられるパワーに感激した。

その他シャワーが水だったりバイクを自転車感覚で使用したり、子どもから大人まで早寝早起きの習慣がしっかり身につけていることなど様々あった。その中で私が一番驚いたエピソードは、ベットへの執着心の差だ。あの朝、いつものようにホームステイから施設に向かって歩いていると、後ろからメンバーを乗せた車が私たちのホームステイ先の犬をひいてしまい犬は亡くなってしまった。日本では愛犬を引いて殺してしまうと慰謝料を請求し、飼い主がとても落ち込んでしまう

という状況になる。その時も私達はそのような状況になる事を思い浮かべていた。だが私たちのイブは「よくある事。車が来て逃げる事をしていない私が悪かった」と言ってけろっとしていた。

このような考えは私たちのイブだけではなく、今の日本とかなり違っているのだと知った。

行く前と実際に行ってからの違いから自分が考えたことは、アスラマの子ども達がよりよく生活が出来る方法だ。私が思っていた以上にアスラマでの生活は良かったが、なお改善点がいくつかあると思った。

1つ目は子ども達の衣服だ。特に男の子は外で遊んでいるところをよく見かけたが、服のサイズと体のサイズがあっておらず、動きにくそうだった。

また、靴を履かずに裸足でサッカーなどをしてきた子どもや、服と同様にサイズの合っていない靴を履いた子どもがいた。この問題を完璧に解決することは時間がかかってしまうだろう。だが、今私達が唯一出来ることは寄付だと思う。最近ではUNIQLOなどをはじめ、アジア地域に衣服を寄付することが出来るボックスを設けている店が増えてきている。私達が協力することが出来る寄付という形でインドネシアや他のアジア地域に協力して行きたいと思った。

2つ目は衛生面だ。子ども達の日々の行動を見ると、手足を洗うということが習慣化されていないと感じた。この2つ目の問題は1つ目の問題とは違い、意識によって改善が出来ると思う。まず、スタッフが子ども達に再度手洗いのやり方を教え直して上級生からの手洗いの励行を活発にしていくことにより、手足を清潔にたもつ習慣が身につくと思う。

そして、なぜインドネシアにはテロ問題があるのかと思った。理由としては、近年世界中でアルカイダやイスラム国の活動が目立つようになり、テロリズムが騒がれている。そうなると、約2億人の人口と世界最多のイスラム教徒を抱えるインドネシアは注目を集めるようになる。インドネシア学生がとっていた子ども達のアンケート調査で

「海外に行ってみよう」という意見が多かった。この子ども達の夢がテロによって壊されないように、人々が安心して暮らすことが出来るように、私達はもっとテロに対して対策をしていかなければいけないと思った。

約2週間のインドネシアでの生活の中で多くの事を学ぶことができ、自分自身の考え方の幅も広がった。

例えば、屋台で生活をする為に手段を選ばず、バナナを売っていた女性から学んだことがある。それは今まで私は、相手がしてきた行動だけをみて判断することが多かった。だが、相手が置かれている状況やどういう思いでその行動をしているのか、どのような考えなのかを読み取る大切さを

彼女から学んだ。相手の行動の考えを読み取ることで、自分自身の固定観念に気づき、視野が広がると思う。また他国の人々との関わりの中で、日本人の短所がコミュニケーションを深める邪魔をしていると学んだ。発音や文法を気にしすぎ、間違える事を恐れて英語を話す機会を減らしてしまっている。このことに気づき、今後自分がどう英語と向き合っていくのが明確になった。

今回の経験を生かして自分の語学の向上に励み、より多くの他国の人々と関わって異文化を学びたい。学んだことから、世界で何が問題にされているのかを理解して自分が協力できることをしていきたいと思う。



## 《参加学生のレポート》

### INTERNATIONAL WORK CAMP 31 UNFOGETTABLE MEMORIES I HAD

I Made Aris Ananta S.



International World Camp 31 was a program where Japanese and Indonesian participants combined together to make a barrier wall for an orphanage. This event was also useful to make the relation between St. Andrew and Dhyana Pura University more intact. It was held from 22nd August until 7th September 2017. Firstly, I would like to give huge appreciation to those who organized this program and succeeded the program very well. Beside meeting and working together, the program had packed us with orientation even way far before this program held. Mostly the activities were held at Melaya and Blimbingsari. I felt this place was so peaceful, tranquil and cold.

I personally felt so blessed and honored being a part of this. Being in one place and directly interacted with the Japanese students felt like a blast to me. I have been admiring Japan and its cultures for a long time. I was so nervous and anxious that I would not be able to communicate well with this 21 volunteers coming from Japan. There were a lot of activities and we were split into groups. There were Team Hirano, Team Chiga, Team

Nishiwaki, and Team Hayashi. The varieties of activity were like; we visited primary and high school in Melaya, had welcoming party with a lot games, Japanese meals party, Family program, Athletic festival with the kids, having free time activities and at last, farewell party. The most unforgettable moment was when I cooked Japanese foods together with them. There was a parable that to know the culture better, you need to enjoy their traditional cuisines. Takikomi Gohan (mixed rice) was made of rice, pork, ginger, soy sauce, salt, negi, carrots and soup stock. Firstly we had to soak rice in the water for 30 minutes. Put the rice, the ingredients and some flavorings into the pot and boiled over a high heat. When it comes to the boil, lower the flame, cover and let simmer for 15 minutes. And then, maintain a high heat for 15 seconds. And then, turned off and let it steam for 5 minutes. To finish up I cut negi over. Butajiru was made by using water, soup stock, miso, pork, callot, Japanese radish and negi. The recipes were made by cutting the pork and vegetables into easy to eat size. Boil the water and put miso, stock soup and cut ingredients into the pot. To finish up, add cut negi over. My most favorite food to make was warabimochi because it was elastic food. The look of it was so cute that I was interested in it. It was made of water, kinako, warabi-starch, and sugar. Put the warabi-starch and water into the pot and stir them to dissolve the warabi-starch. I put them on the tray and roll warabimochi into a ball. Mix kinako and sugar well, evenly and dust warabimochi with them. I decorated it with colorful and cute food ornaments.

My Japanese skill was so simple and during our first circumstance I was so shy and quiet. However, I kept in mind that this program would be fun, enjoyable and many useful

lessons I learnt. And it was true that every day was full of laughter and joy. The students from Japan were so helpful, friendly and they even patiently taught me how to speak Japanese really well. Chiga Atsushi, Aono Sosuke and Hayashi Masaki were my closest friends among all of them. We were so easily get along and made jokes to each other so often. Through them I could learn a lot of lessons to differentiate between Japanese and Indonesians. To be honest, Japanese people were so clean and try to look in their best outfit when they met other people although they were still messy inside the rooms. Chiga, Aono and Hayashi taught me about how not to be individualist yet I need to learn how to be more open and helpful to others. I could not stand my laughter when I saw those people making jokes in front of me and dancing all along. They even taught me song "Kimiwa aisarerutame umareta". There were times when I was home sick but they danced so freely and expressively to entertain me, it showed how they did appreciate our friendship. They also helped me with the daily diary that we should make or we shared our opinions about evaluations of activities we did each day. Together with Chiga, Aono and Hayashi; we enjoyed the Welcoming Party organized by the high school students. Then students danced the Yokai Taiso so fluently. We also played games with the kids. The best game that I enjoyed the most was KOKOHSKU Game where we got to introduce ourselves in Japanese and then confessed the guy or girl that we liked and interested at. I chose the high school student, she was so flattered of me. There was a friend of mine, Palma and Kazu they did not only ended their so called 'love life' there but even after the program ended. I felt so proud as Indonesians

when they also learned how to speak Bahasa Indonesia. There were one or two that successfully spoke Bahasa Indonesia fluently. The only event I wanted to do with them was extending time by spending more time hanging out and having some coffee together while exchanging our opinions.

The differences that I thought so obvious before I joined this program and after were I never eat punctually. At home, I always wanted to eat anytime and anywhere. However, I was trained to eat punctually in a good manner. I never do households' activities before and in here I learnt to be more independent. I knew now how to wash the dishes as we ought to take turns in doing it. I learnt how to wash my own clothes. This may sounded childish but I could not clean my own clothes. Even my friends laughed at me when my first attempt was fail. The clothes were smelly because I added too few soap while washing too many clothes.

In the future, I really want to excel in Japanese language and join the exchange program to the Momoyama University. Going to Japan is my dream since young and being able to fulfill it will be the best gift ever. Surely I learn how to be more independent and be a better person due to this program.

## My Experience participates in the Work Camp

Ni Putu Yunita Nara Putri



### 1. My thoughts and feelings before joining this program

Before joining this program, my feelings were not feeling confident, feeling unprepared, and certainly very nervous, even I almost resigned to join the program. This is due to the limited language skills of both Japanese and English languages and the addition of his work camp takes quite a long time of about two weeks and there is a business in other organizations that cause I do not have time to learn the language or organize my language well, even I think the ability my language is still far behind with my teammates. But after I think again, I may regret not trying this challenge to participate in this program. So I told myself, if you can, so do it.

### 2. My Impression with Blimbingsari

My impression of Blimbingsari was unbelievable. I am very grateful to join this program, the first time I can visit the Blimbingsari and it's very fun. Can visit the orphanage's Widya Asih, meet orphanage children, play, can participate to help the development in the village

Melaya, mutual cooperation work with friends from Japan and even the orphanage children, can solve the problems together, love and sorrow, can live there for a few days, live a life that may be very different from before, which was originally a foreigner but eventually the stranger became very close like a family, the friendliness of the community in the village, the kindness of the family in the house where we stayed. It was a very valuable experience for me and I will never forget.

### 3. Certain events or episodes during the program that gives me an impression. I am always very impressed in every activity that takes place because it is a very interesting and new experience for me, as:

- The first time, I was very nervous waiting for my friends from Momoyama Gakuin, due to not knowing what to say.
- Make missions (games) with friends from Momoyama Gakuin and practice them before going to Blimbingsari
- Despite not mastering the Japanese language well, but over time can very well be able to communicate with them (Japanese team) and they are also very good so it did not take long we can establish intimacy.
- Go to Blimbingsari, and be greeted by the younger siblings from the orphanage which is very fun
- The division of teams and houses of residents to be occupied during the program. One Indonesian team with several teams from Japan.
- Go to Melaya by boarding a truck car together, for the opening of the 31th

International Work Camp, until there is also welcomed by the orphanage children who are very enthusiastic to play beautiful gambelan and Balinese traditional welcome dance very well.

- We always have breakfast, lunch and dinner together, and it's very tasty, nutritious and the menu is always changing so we never get bored
- Visit schools in Blimbingsari be it elementary, junior high school, vocational health, with friends from Momoyama Gakuin who has been divided into several teams, while teaching Japanese and playing traditional games from Japan, these students are certainly very enthusiastic and loved it very much
- Everyday we head for Melaya together to assist the construction at the orphanage, wearing hats and hand gloves and long-sleeved shirts, working together even though it is exhausting, very hot but that's great fun.
- One day, the preparations for the program from Momoyama Gakuin friends will be dedicated to the orphanage children and families of each homestay which is to cook Takikomi gohan, Butajiru (Tonjiru), Warabimochi. The shopping team from Mamoyama Gakuin had been shopping for the preparations before. So we will help to cook it. Incidentally my team got a piece to cut up the meat to be filled for Butajiru. That's the first time I can cook Japanese cuisine and cut meat like Japan. Although not easy but very enjoyable to learn to cook with friends from Momoyama Gakuin. Quite a lot of meat we had to cut. When they finish they start to cook it. Invitations and children started coming, we started to prepare and

serve. The first time I saw the cuisine, it was very unique. Invited guests and children started to sit in the prepared place, we immediately began to prepare and serve each of their tables. Although there are some obstacles but we can solve them and handle them well. Very different from the dishes I've known before. They began to pick up the spoon and taste it. Warabimochi cuisine is most desirable. Takikomi gohan is well-liked and Butajiru (Tonjiru) is less desirable. This I think because not yet familiar with Japanese cuisine and our tongue that feels different. But overall very interesting. Thanks for the food my Momoyama Gakuin friends love me so much.

- There is also an entertainment party at night where each is good from the orphanage, a team from Bali and friends from Mamoyama Gakuin have prepared offerings for all of us. The orphanage children offer dances and modern dance, friends from Mamoyama Gakuin offer gymnastic youkai taisho dance and me and my friends from Bali also present Maumere dance at the end of the show of friends from Mamoyama Gakuin invites us all and all the children join in their offerings Mai Mu Mai Mu dance is very fun and the children are very happy and we want to again and again without feeling tired.
- Our work at Melaya is always assisted by the orphanage children, although very hot, fatigue, it does not feel back, because while working we are always entertained by the behavior of the orphanage children is very funny and adorable, so that our work becomes lighter and can be finished quickly. Once when there were no children

from the orphanage because they were at school, our work became exhausting and boring.

- The day of the celebration of sports with the children of the orphanage and the community in blimbingari and melaya began, me and my friends from Japan made a team to fill and supervise the children on that day. I happen to like basketball so I joined the basketball team. First we waited for the orphanage children to come, we also started collecting the children from the Blimbingsari house. After the children arrived, we collected them and made a row to warm up before we started playing. Warming up we do with gym yokaitaiso from japan which is very fun. They were very happy to follow him. After the meeting is over, they immediately look for the preferred sports, such as soccer, badminton, jump rope, basketball and others. At the end of the show we invited the kids to play your mai mai and that was so much fun.
- From time to time, I and my friends from Indonesia, interviewed several children from the orphanage, we know that they came from the orphanage, their impressions in the orphanage, and their impression of us. This makes me very nice and very easy to share. It makes me touched to listen to their stories and hug them.
- As our last day at Melaya and closing ceremonies, the children went to offer something for us, to play gambelan, dance. Of course I also took many pictures with them. I hope to be able to come back to the orphanage. The experience of being a volunteer in the orphanage and meeting with the orphans was the most boring

thing for me.

- Day of separation with family homes and homestay family was getting closer. We began to prepare a series of gratifying remarks for them. But this is quite unique, because friends from Mamoyama should pronounce it in Indonesian and our friends from Undhira should pronounce it in Japanese. We started practicing and exchanging ideas. To memorize time spoken in front of each family homestay well enough. In addition Student's Momoyama Gakuin and Undhira friends also started training for their new dance, fortune cookies from AKB48.
- I remember the time my condition had dropped. My body was very hot after the check was hot to 38 degrees, maybe this is because I was exhausted. Finally Mrs. Miwa gave medicine and suggested that I immediately take a rest and should not follow the temporary activity. I was escorted by the pack of the Mr. Forman to the house I live in. I rested too. My friends are good from Momoyama and Undhira are very kind and caring they take turns to greet me come home, giving vitamins and spirit to quickly be able to join them back. I am very grateful to have friends like them, I am very grateful. I do not feel asleep again may be due to the drug given, and when I wake up there is a dating back, and it is the orphanage of the Melaya. I am very surprised, why he can be here. Apparently he was escorted by someone. He told me, because today is the last day of my brother and friends here so I have to come here. Also because I really miss my sister. I can not say anything, just can see and smile at him. I am Very happy to

meet again. He told me, today he went to the market, he bought a shirt, the same clothes as that used at the time, and he bought it specifically for me. I really did not think, I can not say anything. I did not expect him to buy me the same clothes he wore. I am very thankful. He also gave me a letter and had to read it when he got home. He went back to the home to gather with the others. Without realizing it I fell asleep again. When I wake up the breaking time will start soon, and I also feel better. I began to prepare myself and immediately headed to the orphanage. I walked, far enough I was wearing the clothes that have been given and I started thinking about it, there is nothing I can give for it, because I do not have time to shopping before, danse routine that I have. Finally I immediately ran to a shop, I want to give a bracelet that I bought there. The merchant was immediately looking for it, long enough to find the end, get a bracelet and I bought it. From a distance, a pack of forms and Mrs. Miwa hurriedly rode on a motorbike, apparently they worried me. I ran to meet them and we laughed together. I was asked by Mrs. Miwa to be escorted by pack Mr. Forman to go to the home and Mrs. Miwa on foot. Arriving in the orphanage all yelled at my name and welcomed me, I am very happy for their great attention. They were surprised because my clothes were the same as the boy, I laughed too. It was time for a farewell and a gratified remark to begin.

- We also gathered together with their families. We are very grateful, for the good that has been given, we will never forget. When we are done we take

pictures together and dinner together. What a moment we will never forget. After we finished with the homestay family, we did not forget to thank the children of the orphanage. Cuddle, take pictures, and sadness everywhere. This is because tomorrow morning we have to go back to Denpasar.

- Arrive preparation back to Denpasar, we started to prepare our goods. I get ready, tidy up the room, clean up, throw garbage. Do not forget to take pictures and write a special letter to thank you again. I and the team took leave and went to Denpasar to the orphanage located there. Time is running so fast.
- Until we were there, we took a short break while waiting for the orphanage to come home from school. The event started immediately. The orphanage children offer Gambelan with different styles, traditional dances, culture and so on. Very beautiful, we were very enthusiastic to watch it. We also each show the gymnastics we have prepared and they are also very very human. We also invite them to play games and they are very happy. We are also invited to go around the dormitory and say thank you. We immediately headed for the hotel to rest.
- We started preparing our report which we will get after a few days stay in Blimbingsari, which we will report to Widya Asih. Prepare yourself. Continue to practice and try to get the report well received by the foundation. The day of his delivery arrived, very nervous, fearing wrong, but thankfully we can handle it well, and report very well. the foundation also can receive very well.
- Day of separation with friends from

Momoyaman Gakuin was getting closer, they started shopping for souvenirs and on holiday. We took a vacation to the Tirta Empul in Gianyar regency, elephant cave in Gianyar regency too, even they had visited my campus, Dhyana Pura University, although briefly but quite memorable and they really enjoy it.

-The day of separation arrived. We could not resist each other's emotions. The experience of living together, working together, solving common problems, the joys and sorrows we face together and others. Moments I will never forget for the rest of my life. Thank your friends Momoyama Gakuin great team. Our mission is done. See you again and do not forget our Bali team.

4. What is the difference between what I think before the program and the reality of the program What can I learn?
- Very different, before joining the program I think it will be very boring, will not be able to communicate well, the program is very long time almost 2 weeks. But the reality is very different from what I think, very interesting. Lots of experience I get. I can study more independently, meet great people, can help with the development of the orphanage, help entertain the orphanage, know the life of the orphanage children, their daily activities, live together in the community house, walk every day. Laugh and cry together. Those are moments I will never forget. Many things I can learn one of them, I can be more independent and be grateful for what I have today.

5. How do I want to take advantage of this experience in the future? The trick is;
- Always give thanks to God, what has been given and owned today
  - Please help with others
  - Helping people in distress
  - Keep up the good and honest, no matter how you matter, when you calm down you will be able to deal with it. Make the people you care about proud of you.
  - want to go to japan

~ THANK YOU IWC31st. ~

## INTERNATIONAL WORK CAMP 31 GREAT MEMORIES I'VE EVER HAD

I Nyoman Agus Aristya Palma D.



Firstly, I would like to say thank you so much for this event. Such an honour for me I can be participant of International Work Camp 31 between St. Andrew University and Dhyana Pura University. From this event, I can learned anything. I remember before i joined this program with my friends, I got the preparation like Japanese language course for 1 month. We learned how to introduction in Japanese and say greeting in Japanese. It was fun to studied Japanese language, but sometime I felt difficult how to read hiragana letter. And the time is coming. We went to

Puri Sharon Hotel to stay for a while before we went to Blimbingsari village. I felt nervous in that time. Because for the first time I met with Japanese students. Finally, they were arrived in the hotel at 06:30 pm. I was excited to welcomed them. All of us felt afraid to start the communication with them. After that, we went to the restaurant for dinner together. I remember, my first friend from Japan were Asuka, Chiga and also Agung. And we start the communication with them like ask his/her name, what the grade they are now, etc. After I finished my dinner, it's time to introduce ourself. Momoyama students used Indonesia language and Undhira students used Japanese language. It was amazing because they can introduce theirself with frequently. After we introduced ourself, I got IWC uniforms and guide book. And before we went to slept, we had a meeting for teaching in High School of Melaya. We divided to be some group. Momoyama students and Undhira students mixed to be one and we practiced about the matery as teaching material.

After we enjoyed breakfast, we prepared to Blimbingsari village. In the car went to the village, I still felt confuse and didn't knew each other. But I tried to made a topic with Haruto. He was a funny person. I talked many topic with him also Adi and Emy. In the end, I fell slept. Its took about 3 hours we went to Blimbingsari village. Finally I was arrived in Blimbingsari village. I felt excited because the orphanage children were welcoming us. And after that I got sharing about the homestay house and i stayed with Haruto. And I was back to the orphanage to enjoyed dinner. After dinner me and my friends also washed the plate, spoon, fork, and glass. Everyday the group got the turn to washed it. And I back to the homestay house to slept. Before we

went to slept, me and Haruto have special tradition, that is made a diary. And sometime i talked about evaluation of that day.

Next day, I went to Melaya village to join the opening ceremony. I went to Melaya by truck. And this is my first time to used the truck. And after I arrived in orphanage, me and my friend were greeted with gamelan music. And I followed the worship there and enjoyed the snack. And got the information about work. What I did while in Melaya and the job desk. During in Melaya, I work like moved the sand with the bucket and moved the brick. That's was fun because I worked with good teamwork. And after I finished the job, me and my friends must back to Blimbingsari village to meeting and prepared for Japanese lesson for the next day. Before I started the meeting, I enjoyed lunch. And the meeting here will discussed about the Japanese material for Senior High School. We made some games, like kokuhaku game (love you game), karuta, making name tag, fruit basket, and holding hand game. We practiced about the game and prepared what we need for the games. And finally we moved to kokuhaku game. My friends told me to played this game. In this game, we must say something to someone if we like her/him.

And my friends told me which one will I choosed. I am confused. And i choosed the girl with random. And i didn't know why i choosed Kazuho. And from this game, I getting closer with Kazu hihhi. The game is begin. We said something in Japanese language. Like "Watashi wa Palma desu. Watashi wa anataga sukidesu. Tukiatte kudasai?". And Kazu answered yes, she wanted to be my girlfriend ( keep calm, this is just game). And my friend shouting to me. And I am happy because I got hugged from Kazu. After i finished to



practiced the game, me and my friends went to ballroom to enjoyed the dinner. While we enjoyed the dinner, we did the evaluation again for Japanese lesson. This is to make sure all what we did was ready. And after dinner, I join the meeting again. Finally we back to home. Again, before I went to slept, me and Haruto made the diary.

The day was came. We went to Senior High School to gave the Japanese lesson. I proud with them. Because they felt excited and enthusiasm when we came and gave the games. They were happy and enjoyed the games. But one thing was didn't good for me, the students were really noisy. But that's no problem. I am happy seeing they happy. After finished the Japanese lesson, we back to Melaya. In there we took a rest for a while before we started the worked. And we worked as usual. Finished the worked, I back to Blimbingsari and I had free time with my friends. I remember, when we had the free time, we discuss about vocabulary in Japan. Many vocabulary i learned from the source directly. But I got many vocabulary from Osaka or Kansai-ben, like honma sorena, nandeyanen, maji or honki, joudan, usotsuki, onaka ippai, onaka suite, omosiroi, iyan sore, and many more. I can't mentioned it one by one. And Japanese students also asked us about the vocabulary in Indonesia. That's was funny because they said the Indonesian word with fluently. And after that we took the dinner together and also meeting to discuss about the evaluation.

On August, 25th 2017, maybe for me is one of the good memories. Because in this day, we and the orphanage children had the welcome party. But in the morning, we went to Melaya to work until afternoon. And then we back to Blimbingsari to took a rest for a while. After

finished lunch, we had meeting for welcome party and prepared what we need in welcome party. In the welcome party, everyone must share the performance. Like Japanese students showed the Yokai Taiso dance, Indonesia students showed Maumere dance and orphanage children showed the modern dance and also singing. That's amazing night for me. All of us were happy and enthusiasm of this party. And after party, we got back to our homestay. On Saturday, me and my friends went to Primary School. The other group went to Junior High School. In Primary school, we also teached Japanese lesson. But we were focused in the sports because we thought the primary students felt bored if we teached. So, for the sports we did like football, volley ball, nawatobi (skipping), badminton, and make bubble gum. Again, their enthusiasm was very good. Their were very excited. Until we're felt tired, they continued to invited us to played again.

In the afternoon, we prepared about Japanese meal. We made this for the children and host homestay. We made pork rice, misou soup, and warabi mochi. Everyone were busy to made the meal. And after we finished to cooked the meal, we prepared it on the table and gave the chance for the children and host homestay to ate firstly. After they finished, now we turn. I thought when I tried misou soup first, that's delicious. And I took many soup into my cup. But when we ate together, i mixed the soup with the pork rice and the tasted is not good for me. Kazu asked to me "Was the soup delicious?". And i answered that's delicious. But i can't lay. I tried to ate that but i can't. And then Aris took my soup and ate. My stomach felt not good. And I took warabi mochi and finally that's delicious meal. Warabi mochi was meccha oishi (very

delicious) for me.

Sunday was came. Me and my friends prepared to went to the church. I thought everybody felt sleepy when they in the church. Including me but a little bit. So we worship and pray in the church. Then we back to orphanage to enjoyed the lunch. After lunch, we got free time until 04:00 pm. We may visited our family in there or played with friends. Me and Kazu went to saw dam in Palasari. And then went to the Grojogan with Haruto, Emy, Yunita, Touko and Kazu. We went to there by walked. It's took about 30 minutes. Grojogan was waterfall in the Blimbingsari village. The view in there was very nice. So, we back again to the orphanage to enjoyed the dinner and joined the meeting. I thought that's exhausting day. But it paid off with the nice view in Grojogan.

In Blimbingsari village, we especially Indonesia students got the project. Our project was interviewed every children in orphanage. To knew every story and how they life in there. Maybe they had some problem while they stayed in orphanage. And we interviewed as many as we can. So from their story, we can conclude average from them had the same problem, like fighting with the other and didn't like ate the vegetable (esspecially eggplant). Somehow, some of them had the problem with the orpahange staff. Like if they can't finished ther job, the got hit. But they did it to be better children. And in other story, i had a funny moment. I had big stomach. Every girls in IWC members liked my stomach. I didn't knew what the reason. They called my stomach was "puni-puni, puyo-puyo, and mochi-mochi". It's tickled to me but I am happy because they wanted to hugged me everyday. And I am proud to Japanese students because they were discipline about the rule. And also

on time in every activities. And they always made me happy and laugh with their joke. They knew when the time must serious and the time made a joke.

And then I back to Melaya to work. This was the last time we work. So we made sentence in the wall of the building if we already finished the job in Melaya. Before we back to Blimbingsari, we had closing ceremony. Like worship and dancing together. The Japanese students so funny when they tried to danced Balinese dance. And after that we back to Blimbingsari and I thought that's great memories I can worked together in there. And I missed the children. In the Widya Asih orphanage, we persuade to knew every place like tour around the orphanage. Where's the children slept, where's the children washed their cloths, where's the children study and work. They autonomous. And I felt embarrassed because I still need everyone to did something. From them, I can learned how to live simply and always be grateful what they have now. And in the Blimbingsari, we also had an event. We called it "Athletic Festival". That's like sports festival we may did. The orphanage children from Melaya also joined this event. So amazing day we may exercise together. In the end of this event, we dancing together. The dance's name was Maime Maime dance. The children felt excited and happy.

And finally, we had the farewell party on the Sunday night. In the farewell party, every students must made a speech to say thankyou to the host family. Japanese students used Indonesia language and Indonesia students used Japanese language. That's funny and amazing because Japanese students could talk in Indonesia fluently. That's many memories we've done while in Blimbingsari. With host

family, children, food, and the truck. I felt sad because we must to back Denpasar. To hard to say goodbye to them. On the Monday morning, we got back to Denpasar and visit the Widya Asih Cica orphanage. In there we had party with the children. And back to Puri Sharon Hotel to check-in. On Tuesday, September, 05 2017, we visited Dhyana Pura University. In there we got explain about exchange student from Bali and Japan. And we also visited church in Nusa Dua and Mall Bali Galleria to refresh our body. In the Mall Bali Galleria, I had a funny moment. Kazu persuade me to tried Japanese meal. When the food was ready, we used the chopstick. And I can't use chopstick. I tried again and again to used chopstick but still I can't. Finally I used spoon to ate.

We also visited some traditional place like Goa Gajah, Tirta Gangga, etc. And finally, the day is came. The Japanese students must came back to Japan. And in the hotel, we gather together and said thank you to other friends. Happy and sad we through together. All activites succesfull we reached. And many memories we created it. And honestly, when I made this task, I felt missed with Japanese students. Because when we were in Blimbingsari, we're always did the activities together. But now we must back to the real life. They are very kind to me. Junya, Asuka, Touko, Waki, Masaki, Sosuke, Kazuki, Ogu, Matsumu, Chiga, Sakura, Bunchan, Mizuho, Haruto, Tera, Kei, and you, Kazuho. They were my bestfriend I ever have. Thank you for always taking care of me and each other. Thank you for always made me happy and laugh with your jokes. And I am happy because I can know you, Kazu. You're always felt happy, although you felt stomachache, you're still smile. I didn't know why. And

finally, I will not forget of this event and the memories. Many moral may I got from this event. And don't forget about me guys. I'll not forget about all of you. Thank you for having me. You know guys...we should meet again next year. Arigatou gozaimasu. Samishikunarimasu.

## Report about International Work Camp 31st

Putu Emi Hermayanthi



First I want say thank you for the new experience in my life, here I will explain my experience about International Work Camp 31st with St. Andrew's University students. I choose one the theme about INTERNATIONAL EXCHANGE WITH JAPANESE STUDENT. When I hear about this program in Dhyana Pura University, I'm very excited and want to join with this program, because I think in this program I can have a new experience, new friends from japan, and I want to know and learn Japanese culture. Sometimes I think I must going to japan and I promise to myself about that. Before 21st august 2017 me and my friends from Indonesia team learning Japanese language, but only a few words I can remember, it turns out that learning Japanese language is not as easy as I think. And here we also practice Maumere Dance that comes from the Province of Papua which is part of

Indonesia.

My impression about Belimbingsari is good village, good people, and good place. Why good village, because in Belimbingsari is a cool, quiet and so far from crowds of the city. Why good people, because in Belimbingsari all of the people is friendly especially host family. Why good place, because in Belimbingsari I meet the many children and there I can get to know more friends from Japan.

On 21st August I was very nervous waiting and can't wait to meet a friends from Japan to come to the hotel, after they arrive at the hotel we went straight to dinner, introduce ourselves to each other and share IWC Uniform. At the first dinner, I became acquainted with Junya and Kei, they are very friendly and kind. On 22nd August we are breakfast at hotel, meeting and orientation before we go to Belimbingsari village. When we are meeting I very nervous because I can't speak Japanese, but I'm happy when we try practice the games for student in Belimbingsari Village. All games very creative and very fun, I was the first to know the game, and I'm very happy to follow and learn the game. Japanese game that I really like is "KOKUHAKU" and "KARUTA" games. When I play Karuta game, I became to know more and more words from Japanese. At 12.30 pm we are Indonesia student, Japanese student and all staff leave hotel and going to Belimbingsari village, we arrive at the Belimbingsari village about 4.30pm. When we get there we are directly divided and mix between Japanese student and Indonesian student to live together in one homestay's house for 2 weeks.

At that time I was a house with Mizuho and immediately rushed to go to homestay house to put the suitcase and prepare for dinner at

the Widya Asih 5 Foundation. I'm happy with Mizuho although I do not understand what Mizuho says, but somehow after dinner Mizuho cry and want to move house, and in the end me one house with Sakura for 14 days ahead. Sakura is a friendly and kind to me, she teach me many Japanese language.

At the second days in Belimbingsari village, in the morning before breakfast we exercise and sing "Kimi Wa Aisarerutame Umareta", when Chaplain explain about that song I can't understand, because at that time first time I hear that song and I can't sing together, but some friends from Japan always teach me about that song until I can sing that song. After exercise we are breakfast and going to Asrama in melaya for work by the truck. Me and all the friend look so happy and fun in the truck, because first time my experience go to the some place by the truck. All of the moment in this program is good impression for me, like a work together, interview all of the children in Asrama, visit to High School and primary school for play with all the student, pray at church, eat Japanese meal (miso soup, takikomi gohan, warabi moci) etc. On the 25th August in the evening is a welcome party with all the children in asrama, there me and Haruto become master ceremony, me and Haruto is very nervous to bring the show on that night. At the welcome party Japanese student perform youkaitaiso dance, Indonesia student perform maumere dance, and the children in asrama perform kontemporer dance, we are look so very happy, enjoy, and fun on that night, because we can laugh together and now about dance from other country. On the 26th August when Japanese meals party we cook together and I try all of the Japanese meals but I can't eat miso soup and takikomi gohan, I only can eat

warabi moci because warabi moci is a sweet. On the 27th August is the first time I go to the church and the first time I pray at the church, very nervous because in the church we sing *Kimi Wa Aisareru Umareta* together, I have not memorized that song yet but Haruto keep teaching me until memorized before performing. After pray at the church me with some friends going to waterfall in blimbingsari by walk, on the way to the waterfall we are sing about doraemon song with Japanese language and Indonesia language, so happy and funny. After arriving at the location we are a little disappointed and sad because the waterfall is dry, But we are still happy on that Sunday. The 3rd September is a bad day because we (all of the student IWC team) will leave the asrama, leave the Blimbingsari village, leave the all of the children, leave all of the memories about 2 weeks in there. 3 Days before farewell ceremony party, me and Sakura and all the student learn to make how to say thank you to each of our hosts family, but the student from Japan say thank you with Indonesia language, and Indonesia student say thank you with Japanese language. Me and Sakura at our home stay, every night learn about our language, Sakura teach me how about say thank you with Japanese language, and me teach Sakura how about say thank you with Indonesian language. I'm very happy when Sakura teach me Japanese language. When night farewell ceremony, all the student from japan very funny to say thank you with Indonesian language. But at that moment I can't stop my tears because I think I'll never be able to repeat the beautiful memories with the children and all the friend from Japan. The next day we leave the belimbingsari village and go back to Denpasar, in Denpasar we visit

to Widya Asih Badung, in there we are perform and play Kokuhaku games. The children in Widya Asih Badung no less exciting with children who are in Widya Asih Blimbingsari. After that we go to the hotel to take a rest and prepare for evaluation. The next day on 5th September we visit to my University, actually I shy to show my University is very small, unlike Momoyama Gakuin University a very large, clean and complete. After we looking around in Dhyana Pura University the next we go to Sinode Office for evaluation our activity at Blimbingsari and what should be improved so that future Widya Asih be better. In there I explain about interview the children, the result of the interview I have taken from children are all very interesting, because the ideals of the children very high like want to be a police, soldier, teacher, and in the future want to live on hometown, want to go Japan, America, Australia, etc. After evaluation we do AGAPE Festival, very fun because some of the friend from japan try Agape "sambal". Kazuki agape sambal to sosuke, and sosuke feel very spiciness. After that we lunch and visit to Japanese club in Sanur village, to be honest I do not understand with the purpose we came there. And then we go to Matahari shopping mall to shopping time, in there I help some friends from Japan to buy snack typical Balinese snack for their family or their friends in Japan. After finish shopping we go back to hotel, when on the way to hotel I feel sad and unconsciously shedding tears on the bus, because that time is a last night we are together in Bali. And at the last day on 6th September in the morning we breakfast and go to "barong dance" in Batubulan village, after that we go to Kintamani for lunch and taking picture with Batur mountain view.

After that we go to Tampak Siring to see holy water and go to elephant cave to see the history of hindu religion left behind there. In there some friends shopping and buy clothes that are typical Balinese, in there we are look so happy. After that we go to Celuk to buy the silver and go to Batubulan village to buy Balinese souvenir and then we go to Kuta to dinner. When a dinner, we do taking a picture before we split up and go back home to each of us with all the friends. At that time of the night we are all crushed, sad, angry because the 2 weeks we previously thought long it turn out it is very fast and will end that night. And at that time we still have 2 hours to be together before friends from Japan must go to airport, we spend that time in the room near where we have dinner, we play together, sing together, and promise someday we will surely be able to meet again but will not be able to with activities and experience just like this work camp. The thing that makes me disappointed at that time is Indonesian student are not allowed to take the team from japan to the airport, when the time showed 10 pm we have to part in place our have dinner, do not know what to do and do not know what to say again, the heart is broke, to feel like repeating time to the beginning where we first met, but that's the impossible thing to happen, if only there doraemon here I would ask doraemon the same time repeater machine.

The thing that I think about and what I feared before joining this program is the first time I meet, whether my friends from Japan want to be friends with me, whether later I can communicate with them, and I think 2 weeks very long time. But that's all wrong from my previous thoughts, it turns out the friends from Japan are all very friendly and we are not to be as friends anymore can even

be said to be a friend. First I think and afraid of not being able to communicate well with them, it turns out what I think is wrong, in this program we learn from each other Japanese and Indonesian language, English from japanese friends is so good that I am not too difficult to understand what they say. And the last thing in my mind before following this activity is 2 weeks it is a very long time, but the reality is different after we together do the activities and spend time together for 2 weeks, the time was very fast, so very fast. Everything I think of before joining the program and after 2 weeks is very different. When I joined this program many changes from myself, Before joining this program at home I was a spoiled child, but after being away from my parents for 2 weeks there was so much I could learn, from never before washing my own clothes, at when there I studied independently to wash my own clothes because no one spoiled me there, before following this activity I often wake up during the day, but after following this activity I became accustomed to wake up in the morning until now. Previously I never worked to lift the sand I finally know how it feels tired when we work.

For the future I will tell you my wonderful life experiences to my children and my grandchildren, I also have a desire one day to go to Japan for vacation or work there. In this program I learned to appreciate the time, after completing this program I really appreciate the time I have, I will not waste my time with the unimportant, because for a moment it is very valuable. Now I really want to join the student exchange program to Japan which is held by Dhyana Pura University and where this program cooperate with Momoyama Gakuin University. I will continue to learn

Japanese language so that later can pass and pass test of student exchange interview, so that I can study at Momoyama Gakuin University.

Once again thank you very much for this unforgettable experience, I hope we can meet again at a sometimes. So this report I submit hopefully can be received well and if there is a word above that is less clear I apologize.

☺☺☺ DOMO ARIGATOU GOZAIMASU ☺☺☺

## BEAUTIFUL AND UNFORGETTABLE MEMORIES

A.A. Kompiang Adiada



I was very excited when I heard about this program and I immediately decided to join. I thought it will be fun to meet and know Japanese students. We did meeting with Indonesian organizer of this program, and when they said that Japanese students might don't have good enough English, I started to worry because my Japanese was bad (and still bad). Fortunately, they gave us Japanese lesson twice a week for a month. On 21st August around 7 PM, in Puri Saron Hotel we all met for the first time. I really wanted to talk to the Japanese team, but I was very nervous and speechless. In our first dinner, I sat with Palma, Chiga and Asuka. We started

to talk to each other, and I started to getting close and like them.

The day after, we went to Blimbingsari village. Once we arrived, the children welcoming us cheerfully. Japanese and Indonesian students divided into small team to live together during the program. Junya and I live in Bapak Suwirya and Ibu Diah's house. They welcomed us warmly, showing us everything we need in the house. First day was awkward for me and everybody I think. But, the children made us to feel like home when we stay in the orphanage. They asked us to play together with them. They looked so happy, and made us to feel the same. In the night, was even more awkward because it was my first time sleep with "stranger", but because I was sleepy and so was Junya, we just felt asleep after we took a bath.

On 23rd August, we went to Widya Asih Melaya, using truck! It was my first time to be passenger in the rear side of the truck. It was little bit scary yet fun, and I thought others felt the same. They made us a Welcome Party, which was fun to saw the children playing Gamelan and dancing Balinese traditional dance. After that, we started to work. We were moving the sand using "ember" (bucket). Yes, it was tiring and hot, but because we were joking and laughing together, everything felt so fun. After dinner, we did a meeting to discuss the preparation for tomorrow's activities in high school. We discussed in our own group. I was with Yunita, Ryo, Bunchan, and Sakura. It was very hard to make a good conversation, because of language barrier. Fortunately, we had Bunchan, she helped a lot to translate what I and Yunita asked to her.

After had a breakfast, we directly went to the high school. Once we arrived, the students

were very excited to see the Japanese students. As my team entered the class, they welcomed us very excited. And, Matsumu made them to yell his name loudly and made them even more excited. Mat-su-mu! Mat-su-mu!

On the fifth day, we made a Welcoming Party with the children from Blimbingsari. It was fun to see the children dancing and singing. They were very talented, but not me. I couldn't dancing properly when I danced Maumere, so sad.

On 26th August, we taught Japanese to Elementary and Junior High School, and my team went to Junior High School. But because we got 1 more class than expected, we had to rearrange the team, and my new team was with Sakura, Ike and Masaki. Because the students were only 14 or so, it was easier and faster to play the game with them. Also, Masaki was very good in the class to make the students excited with the games.

After lunch, we cooked Japanese foods for the children and our host family. It was fun to cook with them, because as always we keep joking and laughing together when we were cooking. It was fun, until the dinner and we had to eat the foods. I couldn't eat the Takikomi Gohan because I hate ginger taste. I tried to eat Butajiru soup, and the taste was very weird for me, and sweet soy sauce was my savior because of it I could eat the soup. So I added it much to the soup until it tasted better. And when the Warabimochi was delicious for me and most people, Aris hated it. So Masaki and others put Warabimochi in his mouth and forced him to swallow it. It was satisfying to see Aris's expression when he ate it. It was a very fun day.

On Sunday morning, we went to the church. It was my first experience to go to a church

and I felt so excited. I'm Hindu, but I really like to know about other religions. It was little bit weird to enter the church at first, but eventually could adapt with the condition inside the church. After we got the lunch, we got long free time for the first time after we arrived in Blimbingsari. I used it to wash my clothes with Junya.

The day after, we continue our work in Melaya. After that, we started the project to interview the children before the dinner. At the first we thought it will be hard to find the children who willing to be interviewed, but we were wrong. The children were very excited when we asked them. We asked them about their thought when they just came to the orphanage, their present life, their dreams and their opinion about the 31st IWC activities. During the interview, we got chance to even more closer with them. They made me felt so lucky, because some of them were born in low level financial family. I weren't born in a rich family, but my parents can provide me everything I need until now. I really want to help them, or other children in the same condition like them. I hope someday I can do it.

On 29th August, just like the day before, we worked in Melaya. In this day we made a monument in the wall we have worked. Every single Japanese and Indonesian students got chance to write an alphabet in that monument. On 30th August, after got lunch we went to Melaya for working for last time. Before we left the orphanage, they made us a farewell party. Time passed by very fast for me. It was like yesterday I went there and they welcomed us. I was really close only with 1 child in Melaya, her name was Novi. And our last conversation was the most fun.

We went to last school in the day after, we



went to nursing vocational high school. And I got my old team with Ryo, Matsumu, Bunchan, Yunita and Sakura. Unfortunately, Matsumu got stomach ache, so he couldn't make the students yelling his name like before, but the activities were going so well because as always, the high school students were very excited with the Japanese students. After lunch, we were gardening in Blimbingsari with the children.

On 1st September, we held a sport festival for the children. Because I'm not good in sport, so I decided to supervised the jump rope game with Adi, Touku and Kei. It was tiring, but I felt happy to see the children playing jump rope with us.

The day after, we didn't have many activities. In the morning at 6 o'clock we were walking to some places in Blimbingsari area. We went to the place to make Tuak, a Balinese traditional wine and after that we went to the place to make traditional palm sugar. Along the way, we talked together. I talked with Chiga about the Japanese youth life. During the second week, we did meeting everyday, and this day the last meeting was held. The meeting for the farewell party. And there I realized that, our time was almost up.

3rd September, our last day in Blimbingsari. After breakfast, we went to the church in Melaya using the truck. It was our last time to be passenger in the truck. I was surprised in the church, because they prayed using Balinese language, like Balinese Hindu do. It was a very interesting experience. After lunch we got free time, and we asked to pack our stuff. But because I and Junya got some dirty clothes left, we had to wash them. That was my last time washing clothes with Junya, where we realized that the water didn't come out and nobody in the house, and we didn't

have any more time to wash. Fortunately Ibu Diah showed up and ended our desperation. After lunch, I and other Indonesian students finished our project. After that, I, Palma, Aris and Adi joined with Japanese students for practicing our Fortune Cookies dance for the last time. Around 5 o'clock, we prepared for the farewell party. Some of the children looked sad. We sat with our host family. After the party, we said goodbyes to the children. It was very hard for us. And because it was the bed time for the children, the Japanese lecturers forced us to finish it and leave the orphanage immediately. Before we left the orphanage, 1 of the child gave me a letter, she said the letter was from Novi. As I and Junya arrived in the home, Bapak and Ibu gave us a farewell gift. A nice T-shirt. Junya was very happy, so were I. After that, I opened the letter from Novi, and it made me even more sadder. I decided to reply the letter through her friend in orphanage.

4th September, around 4.30 AM, I and Junya went to the orphanage. It was Masaki's idea to come there early morning to see the children for the last time. At 9 o'clock we left Blimbingsari village. Along the way, I keep thinking about the children and the memories when we first time came there until we left. We went to Widya Asih Badung, and we did exchange show, where we and the children were singing, dancing and playing games.

The day after, we visited Dhyana Pura University, Bali Christian Protestant Synod, Bali Japanese Association and Puja Mandala, religion center in Nusa Dua.

The last day, 6th September 2017. After we visited some places started from morning until evening, we went to a restaurant in hotel to get dinner. We were joking and laughing for the last time. After dinner, we were placed in

a room. Slow but sure, the situation became into sad. Junya played a video that he made during in Blimbingsari that made us speechless. No more laugh, no more joke.

After that, Indonesian students were separated with Japanese students. We informed that we couldn't go to the airport. We realized it was the time, to say goodbye. We could handle it, except Emy. We were warned, if we cry we can't see them again to say goodbye. After Emy were calmed down, we were allowed to enter the room again. I thought I won't cry. No way!

But I were wrong.

I still could hold it for a moment. Until I had to say goodbye to Chiga. I couldn't. I cried, so was Chiga. And Junya, so funny to see he cried so hard. I tried to wipe my tears many times, but I couldn't. It was too difficult for me.

I got many things from this 31st IWC. I got 17 kawaii and kakkoi Japanese friends. I got knowledge about Japanese language and cultures. I got to know other side of Bali that I don't know before. And, I got beautiful and unforgettable memories.

This experience has made me to love Japan even more. I hope I can make use this experience someday in future, whether in my carrier or my own life. I really hope to go to Japan someday, to see you guys. I love you Chiga Asuka Junya Mizuho Kei Haruto Sakura Bunchan Ryo Matsumu Sosuke Kazuki Tera Ogu Masaki Kazuho Touko! See you again.

*Doumo Arigatou Gozaimasu.*

## THE BEST EXPERIENCE EVER HAD

Ni Made Adi Pratiningsih



My name is Ni Made Adi Pratiningsih, but my friend call me Adi. I am a student from Dhyana Pura University. How did I know international work camp program? I knew from Mrs. Christine, she always told me 2 months ago. Why did I want to join this program? Because I have a dream, someday I want go to Japan. I want to have many friend from other country. I am so happy, because I can join this program. For one month we learned Japanese, so we can communicate well with Japanese student.

On 21 September, I went to Puri Saron Hotel with my brother. After waiting in lobby for 1 hour, in the evening we met the Japanese student for the first time. They are very kindly. After we put the luggage in the room. We went to restaurant for dinner, when dinner we become acquainted with Japanese students. We made a group with them. After dinner I back to my room with my roommate (Emy and Yunita), we talked about Japan until midnight and then we went to sleep. In my mind, I would difficult to adaptation with them. I was afraid can't communication with them. Because my Japanese language is bad, but I will do the best for this programs.

On 22 September we check out from hotel and go to Blimbing Sari. It takes about three

hours from Denpasar. On the way to Blimbing Sari I saw the sea view from the car. After we arrived in Blimbing Sari (Widya Asih 2 orphanage) the child welcoming us. They are very cute and merrily. In Blimbing Sari village we stay at host family, me, Asuka, Touko and Mizuho stayed at Mr. Sutaya house, it is not far from orphanage. We spent time with host family this night. In my host family has a baby, he name is Damian and his mother name is lia. I feel lucky to get the host family friendly like Mr. Sutaya's family. We introduced ourselves to our host family. They looked really happy for our arrival in their house. Ibu presents a tea for us and there we are sharing about Japanese and Indonesian culture.

This programs name is International Work Camp, of course there is activity like work. We worked in Melaya, before the work begin. There is a welcoming from children in Widya Asih. This year we build a wall in Widya Asih orphanage in Melaya. We worked together like move the stone, move the block, and also move sand by bucket. In break time we also talked and played with the children. Indonesia student and Japan student very happy played with the children. After break time 10 minutes we back to work. I enjoyed the work with all member, we can laugh together. Some Japanese student did funny like said "emberu". The children help us to work. After we worked, we back to Blimbing Sari by truck.

That day I and my group had a meeting for teaching in high school tomorrow. We prepared the name tag, and games. Day by day I felt be better with Japanese student. They changed my mind, they help me to learn Japanese language and I learn everything from them.

When we came to junior high school, the teachers and the students welcome us. We

teach Japanese language but with game in 3rd grade. They are very happy student, we also joined the game like colour basket ,karuta, message game and also kokohaku game. We taught until 11 o'clock, after that we back to Blimbing Sari for lunch. And back again to Melaya for work. After work, we had free time, I used the free time for washing and sharing about Japanese culture with Japanese student, they taught me about kanji. We made my name with kanji together. She shared about the food, festival. We bought some snack and ate together. We also made a joke to each other.

In orphanage we did welcome party with the children in the evening. Before welcoming party Indonesian students and Japanese student practice for performs in Sunday school building. Indonesian students with maumere dance and Japanese students with Youkai Tasio dance. We practice until we tired. Not only Indonesian student and Japanese student did the performs, the children also do the performs. But it's secret, we don't know what they did for performs.

When the welcoming party start, all children look happy and very enthusiastic. They are wearing traditional costume for Balinese dance. They are very cute. I am very happy today, because see the children smile and talking to each other. After welcoming party we back to our home stay and slept.

Not only worked and taught Japanese, we also made Japanese meal, like rice pork, miso soup and warabi mochi. We separated by the group, I joined with Sakura's group. We cut the pork and slice the pork. And other group prepared the other menu. After the meal ready, we served for our host family and the children. I very like warabi mochi.

When in Blimbing Sari we went to church in

the morning. The people in Blimbing Sari very kindly and warm to us. They welcoming us when we arrived in the church. In the church we sang a song from Japan. The title of song is Kimi Wa Aisareru Tame Umareta. Before we back, we take a photo in front of church. This is the first time I pray in church. Because I am a Hinduism, but I very happy can pray in the first church in Blimbing Sari. I never forget that experience. After we pray in church we back to orphanage.

In Sunday we had a free time, I and Japanese students used that time for walking around village. The weather is very hot, but we enjoyed it. After we tired, we back to orphanage. When we arrived at the orphanage we met Komang and take a photo with him. And the other children still in Sunday school building. In the evening I and Japanese students played with the children on the yard. We played basket ball, soccer, etc. We enjoyed the games with children sometimes the children talking about their life in orphanage with us. They can speak in English very much. At 6.30 pm we get a dinner. The food very delicious, the menu changed everyday. After dinner Indonesian student had a meeting about a project. The project is interview the children in orphanage, about their past, present, future and their hope, and also about Momoyama university programs like the food, night exchange. And the result of interview will be a report when we do the evaluation. After the interview we make a summary about the interview. When we did the interview, many children came to us. They want to interview. I and Agung did the interview one by one. After we finish interview, we give them some candy. From the result the children felt happy in Widya Asih orphanage.

On Friday 1st September, we had a sport day with the children in Widya Asih melaya and Widya Asih Blimbing Sari. In the morning we went to the yard and dance Youkai Taiso together with the children. That day is Mr. Swikrama's birthday. After we got a dinner we give him a surprise. (お誕生日おめでと)

The day very pass, until we know that day will the last night in Blimbing Sari. I very sad, and also the Japanese member. Before we back to Denpasar we did the farewell party with the children and also with our host family. Honestly I sad to say good bye to them. My host family give us a shirt. I never forget them. Mr Sutaya family very kind to us. And we want to go to the orphanage early morning to give some present for the children and also say good bye to them before we depart.

We have 3 days in Denpasar., we visit the Japanese school in Sanur, visit Dhaya Pura University, do evaluation about our programs in Blimbing Sari. After evaluation we enjoyed the Agape Festival in Synode. We shared the fruit with each other and drunk a cup of tea. We also got a lunch. After that we went to Nusa Dua. We got a dinner in Mall Bali Galeria. I and some Japanese Student bought pizza. And we bought some snack in the supermarket until 7 pm. After that we back to hotel.

Next day we tour to Kintamani and lunch at one of restaurant. From the restaurant we can saw the view of mountain. Not only Kintamani we also went to many tourism destination. We bought some souvenir like silver. And finally we got dinner in one of hotel near from the airport.

When we separated in the hotel, I make a promise with Japanese students, I will go to Japan next year and will meet with them again.

I am glad to be participant of International Work Camp. After i joined the International Work Camp, I change my perspective, and I will do the best for my future and also my dream. I will study hard for next year and meet with them again. Because this program I have more friend from Japan and more experience. I am want to say thank you for

Momoyama University, Widya Asih and also Dhyana Pura University. I never have experience like this before I join with this program. I wish this program will continue every years.

Thank you

## IWC31をふりかえって

第31回国際ワークキャンプ団長

チャブレン 宮 嶋 眞

いざ、バリへ、ブリンビンサリへ

私にとっては2度目のIWCキャンプ。去年の反省を加えて、あれもこれもと思いはあったけれど、まずは、全員が健康で行って帰ってくることを第一の目標として出発。6時間後にデンパサールのI Gusthi Ngurah Rai (イ・グスティ・ングライ) 空港に到着。独立戦争のときに、オランダ軍と戦い殉死(プブタン)した将軍の名前(5万ルピア紙幣にその肖像がある)がつけられているということは、今回初めて知った。彼が最後に遺した「自由か死か」という言葉は、インドネシア独立が尊い犠牲の上に成り立ったことを示している。一時期とはいえインドネシアを植民地として支配していた日本人の子孫として、占領された側の思いを、しっかりと心に刻みたいと思う。

ブリンビンサリ村に到着すると、懐かしい顔がたくさん、でも名前が思い出せない悲しさ。それでも再会できてよかったという思いで一杯になる。なにより変わったのが、食堂と厨房。見違えるばかりにきれいになった。全面に張り巡らされたネットは、ハエ除けの力強い味方だった。しかし、多くの学生や、子どもたちが入り口から出入りするたびに、室内に侵入するハエが増え、電気ショックでハエを殺す、ハエ取りラケットが大活躍。パチッという音がする度に、快感と、なんとなくハエに悪いなあーという気持ちが混ざって複雑な思いになる。

ワークは、ムラヤのアスラマの倒れた塀の補修のために土、ジャリ運び、レンガ運びを行う。アスラマの子どもたちも混ざってのバケツリレー。片言のインドネシア語と日本語を交えたおしゃべりをしながら、手だけは動かして、、、こんなに楽しいワークでよいのだろうかと思うほど。最後の一日は、ブリンビンサリのアスラマの農作業を手伝うことができた。畑の畝に豚の糞をすきこみ、耕すという作業。ここの土は粘土質で、雨が降ればネチョネチョ、乾燥すればカチカチという厄介モノ。豚の糞をすきこむことで、適度な固さの栄養豊かな耕地に生まれ変わるはず。来年は何が植えられているのだろうか？

昨年の第30回IWCが作った石垣のおかげで区切られてできた畑には、今年は大きなナスが鈴なりに。スタッフの方は野菜がたくさん採れて、食費が助かっていると喜んでおられたが、子どもたちは、「今日もナス!、毎日ナス!」といささかうんざりの様子。ワークの成果は複雑。

子どもたちに聴く

インドネシア人学生に依頼して行った「アスラマの子どもたちへのインタビュー」は、初めての試みだったが、期待以上の結果が。毎日夕方の自由時間に、子どもたち一人ひとり、あらかじめ作られた質問表を基にインドネシアの学生さんにインタビューをしてもらった。質問表は、①過去、家族と別れて



このアスラマへ来たころの気持ち、②現在のアスラマでの生活、③未来に彼らが描く希望。そして④このIWCキャンプへの感想と、4つに分けて構成した。

小学生以上の31名の子どもたちにインタビューしたが、中には、一人で一時間も話す子どももいた。調査を実施する側がインタビュー前に「様々な心の内面のことを、どこまで子どもたちが語ってくれるのか?」、また「ネガティブな問題を聞くことが子どもたちの心にどのような影響を与えるのか?」といった心配をしていたが、それらの心配を吹き飛ばすかのように、子どもたちは色々と言ってくれた。「今まで、だれも私たちの話を聴いてくれることはなかった!」というある子どもの発言に象徴されるように、「聴く」こと自体に大きな意味があり、子どもたちに耳を傾けたことそのものが、受け入れられ、歓迎されたと思う。

当初、子どもたちがインタビューに答えてくれるだろうか、どうやったら子どもたちを集められるかといったことを心配していたが、始めてみると「次は私」、「次は僕」と、列を作って待っている状態に。自分の気持ちや、プライバシーに関わることをほかの人が聞いている横で語れるのかという心配も何のその、素直に語ってくれた。インタビューに応じてくれた子どもたちに感謝の意味で、飴玉を一つプレゼントしたことも予想以上の効果があったのかもしれない。

## インタビューの結果

過去:このアスラマへ来る前、子どもたちの多くは貧困の中で、食事でも満足にできない、当然勉強もできない状態だった。故郷を離れ、家族と別れてプリンビンサリ村に来ることは大変寂しいことだったが、同時に、そうした状況から抜け出せた感謝の気持ちも大きかったようだ。「悲しい、でもハッピー」という声を多くの子どもたちから聞いた。バリ島以外の島から来た子どもは、そういうことの他に言葉が分からなくて困ったというも悩みも聞かれた。

現在:現在、多くの子どもたちはハッピーと答えた。友達と遊ぶこと、勉強すること、それが楽しい。物質的には決して豊かではないが、過去の境遇との比較でいうと恵まれているということをよく理解し、感謝の気持ちを表明する。小さいながらもしっかりしているなあ、大人だなあとつくづく感じる。困難な環境に置かれたことが、自立した考え方を生み、感謝の心を育てていることがよく分かる。中には、少し勉強が分からなくてしんどいという子もいる。友達からいじめられたりした子もいる。しかし、仲間や、アスラマのスタッフの援助によって救われたと語った。また、スタッフから、たたかれたりする指導を受けたこともあるようだ。体罰じゃないのと一瞬思ったが、その子は、「嫌だったけれど自分が悪かったから」と、そのことを素直に受け入れているのでほっとする。

将来の希望・夢:このインタビューのメインとして、なりたい仕事、なりたい人、行きたいところ、住んでみたいところなど、いっぱい夢を語ってもらおうと考えた。そして可能ならば、何か私たちが応援できることはないのかも探りたかった。

立派な人になりたい、医者、お金持ちになりたい。先生、警官になりたい。観光業につきたい。ジャワ島、パプアに行ってみたい、日本に行ってみたい。牧師になりたいという女の子もいた。いろいろな夢を語ってくれたが、将来住んでみたいところという質問には多くの子どもたちが「ふるさとに帰って、平和な家庭を築きたい」と答えた。今の彼らのふるさとや家族への思いに胸を打たれた。

IWCに関する質問への答えを見ると、アスラマでの単調な生活の中に、2週間にわたり日本からやってきて、共に生活し交流してくれるお兄さん、お姉さんがいることは子どもたちにとって大きな刺激になるようだ。また、具体的に顔の見える日本の友達ができることも力強い励ましのようなのだ。これからもIWCを続けていく大きな意味を見出すことができたように感じる。

## 十字架の刺繍の葉、贈呈

キャンプ前に現地から、アスラマの子どもたちの名簿を送ってもらい、子どもたち一人ひとりに堺市にある東光学園老人ホームの入居者（84歳のKおばあさん）手作りの刺繍の十字架を貼り付けたカードにメッセージを書き込んで、お土産として準備した。今年の7月に、卒業などでアスラマ入所者の変更が10名前後あったが、現地に到着後、新しい子どもの分も書き加えて、ひとり一人に手渡すことができた。今まで、日本から持参するお土産は、施設にまとめて差し上げるという形が主であったが、今回、東光学園のご協力でたくさんの刺繍の十字架を入手できたので、一人ひとりに手渡すことができた。子どもたちも皆の中で自分の名前を呼ばれて、手渡され、非常にうれしそうだった。

## 感謝のうちに

とにかく健康で帰ってくることができたことは安全が至上命題だった今回のキャンプにとってまずは成功といってよいと思う。一方でプリンビンサリ村の帰り際に、あるホームステイの方から、もっと学生たちと交流したかったという声を聞いた。インドネシア語のコミュニケーション能力もさることながら、それをおっしゃったご家庭では、学生がホームステイの方と話す時間、一緒に過ごす時間が足りなかったのではないかと。インドネシア語の能力の問題もあるが、学生を見ていると、自分たちの仲間や子どもたちとは話す、現地の大人の方々との交流を積極的に望まないように見受けられる場面もあった。ホームステイの家族が高齢化している現状では、足を止め、ゆっくりと座って話を聞くという時間が取れるようにすること、また、そういう話ができる訓練や心の準備も学生たちには必要ではないかと感じた。単なるコミュニケーション能力だけでなく、違った世代、特に高齢の世代との付き合い、初対面の人にどのように近づいていくのかなども、事前学習で学ぶことのひとつにする必要があると思う。

このキャンプ中、学生が色々なところで歌い、結果としてキャンプのテーマソングのようになった「君は愛されるために生まれた」という賛美歌がある。出発前学生たちには、家族と離れて暮らし、寂しい思いをしているアスラマの子どもたちのために心をこめて歌おうと呼びかけ、練習を始めた。この歌のメロディーもメッセージも含め、多数の学生に気に入ってもらえたようだ。現地ではアスラマだけでなく、教会などでもリクエストがあるたびに繰り返し歌った。歌いこむうちにこの歌のメッセージは、相手に対してだけでなく歌っている学生自身にも語りかけているように感じた。自尊心を持ってない今の学生たちが、このキャンプの大切な思い出のひとつとして、自分たちのために心こめて歌い続けてくれることを願っている。

今回の引率スタッフは、海外でのサバイバル経験豊かな大野先生、元気はつらつ英語、日本語でインドネシアの人も巻き込んでコミュニケートしてくれたワーグナー先生、綿密な事務的サポートと学生との対話に力を尽くしてくれた朝倉さんという日本側と、日本人学生の状況を的確に捉えてプログラムを調整してくれたスイクラマ氏、裏方としてしっかり必要なサポートをしてくれたフォルマン氏、学生の母親的役割として例年同様学生を温かく、厳しく見守ってくれた看護師の石井氏など現地側も含めたスタッフのチームワークが素晴らしく、本当に恵まれたキャンプでした。参加したインドネシア学生、日本人学生もそれぞれ持ち味を活かしてがんばってくれたと思います。

最後に、日本に残り、キャンプ全体を支えてくださった第31回IWC実行委員会委員長の小池先生はじめ委員の皆様、チャペル事務室の馬詰さんと柴田さんにも感謝して報告を終わります。



## 異文化理解と自己理解

社会学部 大野 哲也

ヒト、モノ、資金、情報がグローバルな規模で流動化する現代世界に生きる私たちは、他者の支えなくしては生きていけないという他者依存の傾向を日々強めている。それはたとえば、今自分が着ている服がどこで製造されたものなのか、あるいはスーパーマーケットにならぶ商品がどこからやってきたものかを、付属のタグで確認すれば瞬時に理解できる。多くの人々は、自律的に自己の生を生きていると思っ



かもしれないが、それは単なる幻想だ。私たちは他者の支えによってようやく生きていくことができるか弱い存在なのである。だがその一方で、現代世界における新自由主義という潮流は、その対極の思想を私たちの心に日々の生活のあらゆる機会をとおして刻み込み続けている。それは「自己選択、自己責任」という考え方である。この思想を単純に説明すれば以下のようになるだろうか。

ハンバーガーや牛丼、あるいはラーメンというようなファーストフードが氾濫している現代日本社会で、それらが大好きな「私」が肥満になり、果ては糖尿病になったとする。このときに発動されるのが自己責任論だ。「あなたがあなたの意思と選択でそれらの食物を食べ続けたのでしょ

う。そうであれば、肥満や病気になったという結果責任もあなた自身が引き受けなければならない」というわけだ。この論理でいけば、現在、社会問題になっている貧困や格差も自己責任へと帰着する。会社員として高い収入と安定した社会的地位を得るためには、偏差値の高い大学に入学しなくてはならないという冷徹な事実がある現代日本社会において、「偏差値の高い大学に入学しなかったのはあなたの選択であり、入学できなかったのはあなたの努力が不足していたからだ」と言われれば、それに反論する余地はない。

つまり、現代社会は、他者に依存しなければ生きていけないという「他者依存」と、すべては自己の選択と責任へと回帰する「自己責任」という二つの相反する思想が同時進行するという矛盾に満ちた状態にあるのだ。しかし私たちは、そうした矛盾が充満する日常にことさら違和感を覚えることもなく、毎日の生をつつがなく生きている。

自己責任論が身につけている学生にとっては、このIWCは新鮮かつ驚きの経験だったに違いない。というのは、プリンペンサリで暮らす子どもたちは、ウッディア・アシ財団の手厚い援助を受け、施設でお互いが助け合わなければ生活していくことができないからだ。子どもたちは、事情があって親元を離れざるをえない、あるいはそもそも親が不在で頼れる親戚もないという厳しい生を、相互扶助の精神を最大限に発揮しながら生きている。

ここにおいて、学生は、自己責任論が強者の理論であることに気づいたはずだ。自己責任論は、自分の意思で行動できる、あるいは、それが許されている人間にとってはあてはまるかもしれない。だが、

プリンピンのわずか4、5歳の子どもたちに、「今の境遇は自己責任だ」と言うことはできない。自己責任論は、その前提として、自己決定ができる環境にいる者を想定しており、それにあてはまるのは社会の一部の人にすぎないのである。

学生たちは、これまで自分が信奉してきた自己責任論のロジックがあっけなく瓦解したことに戸惑い、厳しい環境のなかでも笑顔を絶やさないう子どもたちの「生き方」に、さぞ驚愕したことだろう。

学生たちは、ワークで、他者によって自己の生が支えられているということを強く実感したはずだ。ただそれは、崩れてしまった施設の壁を再建するという今回のミッションによって、自分たちが子どもたちの役に立てたという傲慢な実感を指しているのではない。ワークは私たちだけでおこなったのではなく、そもそも、最初から子どもたちとの共同作業だった。子どもたちに助けられることによって、ワークを完遂することができたのだ。

また、シクラマさんをはじめとする現地スタッフの献身的な協力があったからこそ、私たちは活動に専心することができた。さらに、ホームステイをさせていただきご家庭と地域社会の人たちの温かい支援があったからこそ、17日間という異文化体験を安心安全に経験することもできた。

今回、私たちは、子どもたちの役に立ちたい一心でインドネシア・バリ島に向かったはずだった。しかし実は、多くの人たちの支えによって私たちの願いは叶い、それによって充実感や達成感を得ることができたのである。

こうした経験をとおして、学生たちは現代世界における貧困や格差という社会問題の一端を目の当たりにすることができ、それを自分の身近な問題として考えることができた。また、子どもたちやインドネシアの学生たちとの友情を育むこともできた。彼らとの交流をとおして、自分自身の生き方や日々の生活を見直すこともできた。他者を理解し、他者の役に立ちたいという現場は、自分自身を振り返り自己を洞察する契機でもあった。

日本にいて、大学とアルバイト先を往復するというようなルーティン化された日常では、私たちは、深い内省をすることはできない。日常生活では、素の自分を内奥に隠し、着飾ったり、武装したりして演技した生を生きているからだ。だが、非日常的空間では、そうはいかない。思わぬ瞬間にメッキが剥がれ、隠し続けていたはずの素の自分が姿を現すのである。バリ島滞在中に散見されたむき出しのエゴイズムは、まさしく、非日常という極限状態に置かれた者の葛藤と、やり場のない逡巡の爆発だった。あの一瞬こそが、日常であれば隠し通せたはずのその人の素の自分だった。

だが、素の自分に出会えたことは学生たちには僥倖だった。深い内省をするためには、非日常的空間に身を置き、まず内奥にある素の自分と出会わなくてはならないからだ。同時代を生きているにもかかわらず、自分とは生き方も考え方もまったく異なる他者を参照することで、再帰的に自己を見つめる回路が開かれるのである。

たとえば、ほとんどの学生が抱いた「このような境遇にいるにもかかわらず、子どもたちはどうして笑顔になれるのだろう。自分にはぜったい無理だ・・・」という素朴な実感は、まさしくこれだ。この実感は「なぜ自分には無理なのだろうか」という自分の内奥への問いと地続きだ。こうした他者を介した自問自答を、あたかもらせん階段をくだって行くように繰り返すことによって、私たちはようやく、素の自分に向き合うことができる。自己を見つめ直すには、自分の姿を映し出す鏡、つまり隔絶した他者が必要なのである。

グローバル化の進行とともに重要性が高まっている「異文化理解(=他者理解)」や「コミュニケーション能力」、そしてその先にある「自己理解」は、IWCという草の根の実践こそ、その可能性が開かれていたのである。

# Fostering Intercultural Communication through Co-operative Work and Shared Experiences

International Studies and Liberal Arts     Adrian Wagner



As this is my first year at Momoyama and my first time to participate in the International Work Camp in Indonesia, I knew very little about the program. I had no idea about the places where we would be going and what work we would be doing. Furthermore, as I had joined the program not long before our departure to Bali, I was not present for most of the planning and preparation meetings. I wondered what contribution I could make to this program. As a teacher of English as a

second language, with little knowledge of Indonesian language and culture, I was unsure what my role would be. How could I be helpful?

Initially, in the first few days of the program, I found along with participating in light construction work and helping students prepare for their Japanese language lessons, my primary role was to assist in communication between the Japanese students and the participating Indonesian students as well as the other people in Bali who enthusiastically support our program. Often I would interpret instructions, announcements and general conversations between Japanese and English.

As someone who sees international travel and opportunities for intercultural communication as integral parts of human development, I was delighted to see how curious the Japanese and Indonesian participants were about each other's cultures and daily lives. When students experienced difficulty communicating due to lack of vocabulary or other linguistic problems, I attempted to help people to understand each other.

However, as the days passed, I found my assistance became less and less necessary. Students who had lacked confidence in English found competence that they did not know they had. I heard students remark that through the opportunity and necessity of communicating that participation in this program provided, they felt that their English ability had suddenly improved. Finally, they were able to make use of their years of English study in a meaningful way. They were learning new things and activating prior knowledge. Also, the Indonesian students had the opportunity to learn and use Japanese.

Aside from improvement in English, Indonesian and Japanese ability, both the Japanese and Indonesian students made use of other communication strategies. To repair breakdowns in conversation and other failures to communicate, students were able to employ strategies such as re-phrasing, code-switching (alternating between languages) gestures and visual aids. Also, they began to consult each other more and more to ask vocabulary or suitable grammatical structures. I was very impressed at how these skills and self-reliance were developed so substantially over such a short period of time.

Another pleasant surprise was to see what long term effects the visits of Momoyama students (and people from other international programs) have had on the mindset of the children at the Widhya Asih Children's Homes and local schools that we visited. The children did not hesitate to attempt to communicate in English and Japanese, displaying both highly-developed communicative ability and cultural awareness. In addition, they also employed a range of communicative strategies. They were both curious and confident. It was wonderful to see.

We travelled to Indonesia to participate in an International Work Camp. Indeed, we and our predecessors have engaged in work to make a tangible contribution and construct facilities to improve the daily lives of the children in the Widhya Asih Children's Homes. Beyond this, I feel our visits have also contributed to the personal development of the children, helping to foster language ability and open minds. Similarly, this program creates an opportunity for participating students to become more culturally aware and become better communicators.

## 国際ワークキャンプ（インドネシア）を振り返って

学長室学部事務室 朝倉康仁



今夏、プログラム実施地であるプリンビンサリ村の視察もかねて、国際ワークキャンプ（インドネシア）（以下IWC）を引率することになりました。これまで4年にわたり、本プログラムの事務担当者のひとりとして携わってきましたが、昨年度に実施30回を迎えた歴史のあるIWCに引率者として参加できる、貴重な機会を与えていただいたことに感謝いたします。

これまで、何度か海外プログラムの引率をする機会に恵まれてきましたが、久しぶりのことでもあり、また年齢からか、体力にも衰えが感じられ、自身に不安な要素がありました。しかし、全員が無事に期間を終えて帰国することができ、学生の皆さんの若さや、強引ともいえるかもしれませんがやりきる力というものに驚かされるたびに、励まされました。

体験とおして新たな知識を得たり、異文化に触れたり、刺激的で心踊る時間を過ごした一方で、参加学生の皆さんの中には、満足できなかった、やり切れていない、またひょっとすると、思っていたものとは違っていった思いがあるかもしれません。不満や後悔、焦燥感といったネガティブとも取れる思いもあったかと思います（自身もありました）。しかし、そのような負の面をむしろ大切に、それらを克服していく力を養い、これからの日常生活、ひいては長い人生の糧としていただきたいと願い、自身もそうしたいと考えることもできました。そして、それこそが、体験とおして得ることができ力なのではないかと、プログラム期間を経て素直に思うようになりました。落胆するだけで終わるか、腐らず不器用ながらも切り抜けてゆくのか、今後の過ごし方やものの考え方で、随分と違った時間を過ごすことになるのではないのでしょうか。

IWCは、桃山学院大学で最も長い期間継続されてきた海外プログラムといわれていますが、現在は、当初とは随分と違った形で実施されていると思われます。それはボランティアワークを行うプリンビンサリ村の環境（見た目の変化のみならず、そこに住む方々の考え方や子どもたちが暮らす施設やまた彼らに対する教育等）や、また私たちを取り巻く日常生活の変化によって、また時代によって変わってきたものなのかもしれません。しかしそのような変化を見過ごすのではなく、なぜ、桃山学院大学でワー

クキャンプを始めることになったのか、どのような思いで先人たちが取り組んできたのか、またなぜバリのあの地で施設が建てられ、今に至ったのか等を、ここで一度、振り返り、学びなおすことができれば、弱いながらも志を継いでいくことができるのではないか、またこれから先も継続して取り組んでいくことができるのではないかという思いに至ります。

最後に、IWCをきっかけにたまたま集い、出会い、4月から長期間にわたり毎週のように顔を合わせていた皆さんとも、疎遠になっていくかもしれません。しかし、それぞれが、共に過ごした時間をいつまでも大切にしていただけたらと願っています。

国際ワークキャンプ報告書編集委員

馮    ブンテイ  
小 谷 明 香  
千 賀     敦  
西 脇     良  
川 添 晴 人  
寺 崎 敦 也  
西 口 塔 子  
青 野 壮 助  
池 永 一 樹  
國 枝 みずほ  
河 関 慶士郎  
樋 口 さくら  
平 野 順 也  
小 椋 良平太  
林     雅 貴  
松 村 彰 大  
森     千 芳

第31回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書

発行日：2017年12月

発 行：桃山学院大学 キリスト教センター

編 集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131（代）

印 刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360（代）









桃山学院大学  
St. Andrew's University